Kodak Gray Scale

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

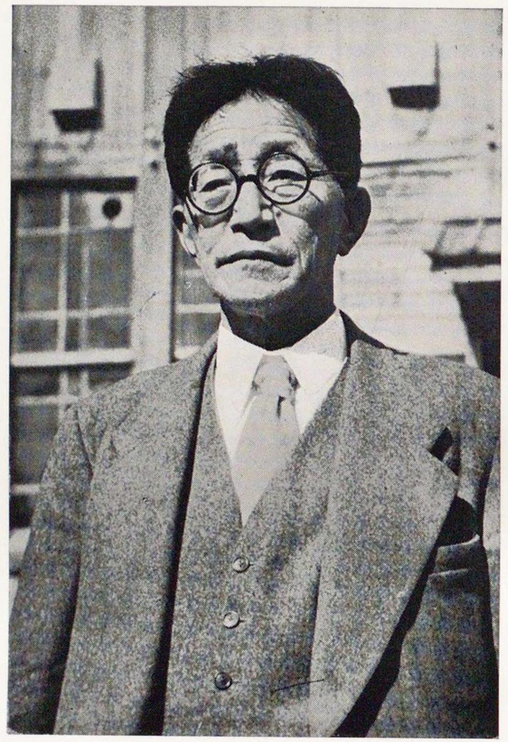
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

918.6
O764o
O(s)
00706550

折口信夫全集

第十一巻

中央公論社



昭和二十六年頃

918.6
D764o
0(2)

國立國會
41.10.-1
圖書館藏書

706550

國文學篇 5

目次

世々の歌びと……一
女流短歌史……三
古代の女性　文學以前　短歌文學の時代　實用の女歌　相聞歌
文學のない歌　獨立性を持つた歌　文學に牽かれた生活態度
女性と敍景文學と　女流文學の單純化　短歌の本質の成立を見せた
歌　女流歌人の居なかつた時代　短詩形文學の革新　新詩社の歌
風　登美子の歌　晶子の歌　現代の歌
歌の話……六六
短歌の起り　諺と歌と　歌のいろ〳〵　やまとたけるの尊のこと。
竝びに旋頭歌　すさのをの尊の短歌　景色を詠んだ歌　旅行の歌
日本短歌の第一人者、柿本人麻呂　山部赤人　文學のねらひどこ
ろ　古今集頃の歌　在原業平　作者のわからぬ歌に、よい物のあ

ること　歌の見方　西行法師と新古今集　ほんたうに優美な歌
調子の立つた歌　發達しきつた歌　江戸時代の歌　歌人として
の國學者たち　加納諸平　思ひを抒べる歌　香川景樹　橘曙覽
大隈言道……一二七
正岡子規短歌抄……一四七
與謝野寛作歌抄……一六〇
追ひ書きにかへて……一八一
——明治の新派和歌——
近代短歌……一八一
再板序……一八三
この本のはじめに……一八四
一　短歌史の意義……一八八
二　前江戸時代……一九二

一　文學の交替時代　二　歌道と連歌と　三　武家の歌人　四
歌風の流れ合ひ
三　江戸時代……二一四
一　細川幽齋　二　地下の歌人　三　木下長嘯　四　啓蒙時代
五　隱者及び學者　六　古文學の發見　七　萬葉調の概念　八
眞淵と宗武と（その一）　九　眞淵と宗武と（その二）　十　蘆庵と景
樹と　十一　加納諸平　十二　良寛
四　明治時代……二三〇
一　池袋清風　二　新派運動　三　正岡子規　四　與謝野鐵幹
橘曙覽評傳……二七七
一　晩年の作物……二七九
二　壯年の境涯……四二二
三　志濃夫廼舍歌集抄……四六八

四　この雙紙のあとに……四九一
曙覽の研究のはしに……四九五
橘　曙覽……五〇三
新派短歌の歴史……五〇八
舊派と新派と　正岡子規と與謝野鐵幹と　新詩社派の歌　根岸派
の歌　その他の流れ
短歌の歴史……五三〇
――萬葉から現代まで――

世々の歌びと

女流短歌史

昭和二十一年十一・十二月、二十二年一・三月
「婦人文庫」第一卷第七・八號、第二卷第二・三號

古代の女性

過去の短歌文學の上で、女性のした爲事を考へる事は、結局、日本文學全體に對して、昔の女性のした爲事を考へるのと、ほゞ同じ事になる。それ程、短歌は、日本女流文學に、大きい領域を占めてゐたのである。文學として、短歌しか考へなかつた時代が、永かつたのである。勿論、今日の考へから言へば、文學の領域は廣くて、源氏物語・うつぼ物語・枕草子・かげろふの日記、そのほか、物語日記などの、散文の領域を見逃す事も出來ないが、昔はさう言ふ散文類を文學とは考へてゐなかつたのであつて、今日の文學に對する態度と似た態度で、これが文學であると信じられてゐたものは、短歌だけであつた。從つて、日本の女性のした文學上の爲事は、正面から言ふと、明治以前は、まづ短歌だけを考へれば、いゝ訣である。日本の前代女性を考へるにあたつて、まづ普通には、歴史の記錄に現れてゐる者だけを考へてゐる。記錄に現れてゐぬ人たちについては、亦、別の方法で、それを考へることも出來ないではない。

さういふ婦人の群れが居て、どう言ふ訣で、さうした歌をくちずさみ、永く世に傳へるに到つたかといふことも考へられぬでもない。がまづ、さう言ふ人たちについて、考へてゐないのが普通だから、今も預つておくことにする。

併し歴史的の記錄と言つても、それに現れてゐる女性は、選ばれた極少數の者である。從つて、文學に携つた總べての女性が記錄に殘つてゐる訣ではなく、又殘つてゐる人も、文學的に優れてゐた人だからと言ふ理由で、殘つてゐるのではない。位置の高い人だから書き殘されたとか、又は昔の人の考へ方で、傳へる價値のある人だと思はれた者が、書き殘されたのであつて、實際に存在した人達の中から、極少數の人が、其作品を傳へられてゐるに過ぎない。從つて、日本の女性の短歌の作品は、高い位置の人のものと傳へる作品しか殘つてゐないのであつて、階級の低い婦人の歌は、極めて稀な機會に、極めて稀な傳ふべき作品が出來たといふ感銘から傳へられたに過ぎない。而も古くは、其殘された作品も、純粹の文學として殘つてゐるものは尠いのであつた。

文學以前

飛鳥朝の時代――此中には、小刻みに言ふと、前期と後期とあり、其から飛鳥の都に接續した藤原朝も含まれる、奈良朝の前の時代――になると、女性の文學が俄かに目について來て、而も眞實に女の作品として信用してよいものが、多く出て來るやうになる。其前までは、作物と作者と

が、ぴたりとくつゝいてゐないのであるが、飛鳥時代に這入ると、殘された歌に、個性が現れて來るので、まづ、傳への通りの作者の作物であると見ておいてよいと言へよう。尠くとも、其歌を通して、作者と考へられて來た一人の人に、其作物がぴたりとくつゝいてゐる。昔の作物と、作者との關係は、疑つてかゝれば信ずべき根據がなくなつて了ふ。我々は、作者を知るといふ事よりも先に、作物を通じて、その作者を考へてゐるのだから、其作物が或個人の生活にくつゝいてゐると言ふ事が、其人の作物だ、と言へるたつた一つの理由である。

傳へによれば、かなり昔の作物でも、いゝものはある。神武天皇の皇后、伊須氣余理比賣（イスケヨリヒメ）の尊（ミコト）の歌に、

狹井川（サヰカハ）よ雲立ちわたり　畝傍山　木の葉さやぎぬ。風吹かむとす　（古事記中卷）

狹井川は大和の三輪山に發する川だと考へられてゐる。が、此も古代も古代、非常に遠い昔であるから、地名も移り變つてゐるのではないかと思はれるあとがある。其川の近くに皇后が住んで居られた。狹井川の處から、ずつと雲が立ち續いて、畝傍山まで屆いてゐて、其畝傍山は、山の木の葉がざわめき立つて、山の動いてゐる樣に見えて來た。これから風が吹かうとしてゐる、と言ふ意味である。

畝傍山。畫は雲と居、夕されば風吹かむとぞ　木の葉さやげる　（同）

畫の間は、一點の雲が地平線の處にかゝつてゐる樣に、凝結して見えた畝傍山の綠が、日暮れ方

になると同時に、風が吹き出すといふので、ざわついて來た。――同じ事を、少しづゝずらして二首にまとめてをられる。

此歌は、皇后の歌だと稱するものが、昔から傳つてゐたに違ひない。其が傳誦されてゐる中に、時代々々で近代化されて來たものであらう。歌は調子が最大切であると見られて來たから、其調子にのせて、意識的にも、無意識にも、言葉だけを代へて、傳誦して行く。それが、古事記の原文の固定する以前既に、かう言ふ形に固定してゐたのである。それでなくては神武天皇時代の歌が訣るわけはない。此等の歌は、最後の處に抒情が出てゐて、歌としては抒情歌であるが、中心は敍景である。外界の風景をすつきりと摑んでゐる。作つてゐる態度は、外界の描寫である。其が、ある意味を暗示してゐると見られて來た寓意の文學である。さう言ふ全體よりも、まづ表面に現れて出てゐるのは、外界の描寫である。

神武天皇時代に、かう言ふ作風が現れる訣はないと見るのが、至當であらう。古代からの文章・詞章は信仰の力で傳誦されて行くが、次々の時代に訣る樣に言葉は變つて行かねばならなかつた。其變つて行く間に、時代々々の優れた良い特徴を受けて、かう言ふ歌になつて行く。つまり、外界をはつきり摑んで、そして、感動が深い微動に移つて行く、それでかうした、敍景詩らしいものが出來たわけである。抒情の歌と見るべき部分は、わづかである。だから、この皇后の個性が、十分出てゐるとは言へない。又成立に關する傳へも繼子が叛亂を起すことの注意を、實子に與へ

る爲に――と言ふよりも、實の皇子方の御身に危險の及ぶことを歌つたものだとあつて、傳へも既に、文學とは離れてゐる。今の我々は、此短歌の表現範圍について、純粹の文學として感じるが、それが正しいかと言ふ問題がある。元來われ〳〵の感じる樣な敍景の形ではないが、敍景の質が十分に出て來てゐることは、事實であつて、さうして其だけで又十分、表現範圍のひろがつて來たことが考へられる。

短歌文學の時代

ところでさきに言つた樣に、飛鳥朝に這入ると、歌がきつぱりして來る。其中、特に優れてゐるのは皇極・齊明天皇の御歌である。此天皇の御歌は、萬葉と紀とに、十首程收錄せられて傳つてゐる。

譬へば、日本紀にある御歌、御孫建の王の八歳でなくなられた時、ひどくお歎きになつて、

新來なる小丘が上の雲だにも　著くし顯たば、何かなげかむ　（齊明紀）

新來といふのは、地名である。新に中國から歸化して來た者を言ふ語。更に又其居住地を呼んだ稱へ。こゝは、飛鳥のうちにあつた土地。そこに皇子の墓が出來、宮廷から其が遙かに望まれる。をむれは小さい山・丘陵の事。たつは、幻影の顯つこと。山の青色と照り合つて上つて來る白雲は、かつきりと見えるが、其雲の程度にでも、はつきりと、亡き孫王の幻影が、目のまへに現れ

てくれたら……と言はれたのである。亡くなつた孫王の幻影が、手にとるやうに見えてくれたら、こんなため息をついてばかりはゐないと言ふので、歌の繼ぎ目にもなる「……雲だにもしるく……」の邊の表現のしかたが、今の我々には少し、しつくりと來なくなつてゐるが、其は近代・古代の文章表情の相違であつて、お歌そのものには、もう個性が、相當にはつきりして來る。たとひ此後、此種の類型が重つて出て來るにしても。

射ゆ鹿をつなぐ川邊の若草の　若くありきと　我が思はなくに　（同）

射ゆ鹿は被射れた鹿卽、射取つた鹿。上句は序歌で、相當に永く人氣のあつた修飾句である。從つて、歌の上半分までは、ほとんど何の努力もしてゐない。そのあとになつて、はつきり本氣に感情が出て來てゐる。古代の歌は、常にかくの如く、凡後の半分が肝腎な部分である。おかくれになつてもよいほど、まだ稚過ぎる年齡だつたとは、我は思つてゐない事だ。もう世の中に大事な人間としての年に達したと信じてゐたのに、死んで了つた、と言ふので、少年にして薨ぜられたお方を偲んで、少し逆說的な言ひ方をしてをられる。さうかと思ふと、また下の樣なお歌を、萬葉集は記錄してゐる。

山の端にあぢむら　さわぎ行くなれど、我はさぶしゑ。君にしあらねば　（卷四、四八六）

渡り鳥のあぢ鴨の群れが山の端に、さわいで渡つて行くのが見える、それではないが、澤山の人々が、どや〳〵と多く通つてゐることではあるが、私にとつては、其はすべて空虛な感じでしか

ない。私は魂の拔けた狀態でゐる事だ。その大勢の人は、一人として、私の思つてゐるあのお方ではないのだから。さわぎ行く以下は人の動作で、こゝの轉換が、今の我々の氣分には、さう簡單に轉換しては行かない。ちよつと讀んだゞけでは、歌の素材だけの樣に感じられるかも知れぬが、其は古典短歌の理會が全く缺けてゐるからだと思つて欲しい。

口譯した樣なことを心に入れて消化してみると、このお歌のよさや、近代文學に通ずる永遠性に似たものが感じられて來る。この作品のやうな作風は、この後、類型がなくなつてゐる。其點でも、珍しいものと言ふことが出來る。我々の思ふ此女帝陛下の性格は、かう言ふ作品から、考へられて來るので、外に傳へられるものから引いて、此歌の背景を導いて來る訣ではない。稀にはたつた一首の歌で、名の傳へられてゐる人々があつて、その人の性格も、其によつて想像せられてゐる事がある。「わが廬は、都の巽。然ぞ住む世をうぢ山と人は言ふなり」の喜撰法師なども、たしかな傳への歌は、右の歌が古今集に傳へられてゐるだけで、外に傳說的な、不確かなものが今一つあるだけである。而も其歌を解剖して、喜撰の人物が考へられてゐる。從つて歌が十首・二十首と殘つてをれば、其生活・性格を割り出される資料も多い訣である。

日本紀・萬葉集に、齊明天皇の御製として傳へてゐる此等の御歌あたりからして、日本の女性短歌は、本格的になつて來るものと見てよいだらう。勿論其は、男性の歌にしても同じことで、系譜の上からは、この女帝の御子で在られた天智天皇の御歌や、其心中をお歌ひしたと傳へる臣下

の歌などによつて、天皇の個性がはつきりうかゞはれるやうだし、同時に文學的な内容をも持つて來てゐる樣だ。つまり、男性・女性を通じて、此前後の時代からして、歌に、その本質らしいものが成立して來たのである。言ふまでもなく、それが文學であると言ふ事は、此時代の人は固より知らぬが、歌の上に其――歌の――本質らしいものが出來かけて來ると、ちやうど暗闇の中に灯がついた樣に、青い木の實にほんのりと赤味のさして來るほゝづきの樣に、匂ひやかな文學感と言ふものが、歌の中に出て來ないでは居ぬやうになつて來たのである。

齊明天皇の御歌も、亦天智天皇に關して傳へた歌も、御自身は、文學と言ふことを考へて居られなかつたであらう。併し、既に文學が出て來てゐる。さうして、我々が文學から受けるやうな清潔なものは、古人も相當に感じてゐたに違ひない。此は、日本文學にとつて、大事な夜明け、東雲（シノメ）の空である。

實用の女歌

かう言ふ風にして、歌が次第に文學としての鑑賞に堪へるものとなり乍ら、萬葉集の中心時代に進み入つて行く。萬葉集には、女の歌人が、澤山居り、其中には殊にづぬけた人たちも、相應に居た。

天子の宮廷ぶりの御歌は、自ら、きまつた風格があつて、まぎれもなく窺はれる。卽、調子がま

どかで大柄で、内容らしいものゝないのが多かつたと言へる。こまざみで情趣の豐かなものは、宮廷ぶりの御歌には、望むべきではなかつた。宮廷ぶりの歌の曲調は次第に固定して、而も一方範圍が擴つて來る。卽、一段下に移つて、貴族社會の歌に、次第におほどかな、纖細味の尠いものが現れて來る。此が、萬葉時代の姿と、おほまかに言ふことが出來る。

廣く萬葉集を見わたすと、大體において、此は、極少數の人より外は、まだ文學と言ふものを自覺してゐぬ。併し、歷史的に見ると、歌が歌である爲の成熟は、其内に、文學を持つことであつた。勿論、文學と言ふ意識などなしに作つてゐて、而も文學が出て來てゐるのである。だがさうした間にも、女性は男たちと、自ら違つてゐた。その殆多くの作者は、過去に生きてゐる人であつた。結局、昔風の生活を維持するのが女性、殊に古代の女には、唯一つの目的だと言ふ風に見えた。そんなに昔の事でなくとも、今してゐる事は、今の本道の事と自覺して、行つてゐると思つてゐても、實は案外、女性の活動は、昔に牽かれてゐることが多かつた。謂はゞ、昔の繰り返しを行つてゐる事がなか〳〵多かつたものである。

かう言ふ生活が基礎になつてゐたので、女性の歌は、信念深く、歷史の上に根をおろしてゐて、動搖することが尠かつた。從つて新しさは、容易に出て來てゐない。文學味と言ふべきものが、殆、乏しいものであつた。だが、其爲に歌として價値がすべてなくなると言ふ訣ではなかつた。男性の方の歌は、寧、時代の影響を受けて敏感になり、常に動搖してゐる所が多かつたので、じ

りじりと次第に先へ進んで行き、展開を示してゐて、奈良朝に入る前に既に、文學をつかんでゐる。

今から見れば、どちらも同じ水準において、文學として見るから、女の歌にもいゝものは發見せられたけれども、それは、時代によつて、鑑賞法が變つて來て、さう見えるのである。當時の實行的な目的は薄れ隱れて、新しく文學の領域に据ゑて見ることになつたのである。婦人の歌は、どうしても、文學としての自覺がいつまでも見られなかつた。

自覺した文學が、文學としては本格なのであるから、結局、女性文學は男性のものに敗けなければならぬ立ち場にあつた訣である。

大伴家持の伯母坂上郎女は、女歌人中にも、名高い人だが、文學に這入つてゐる筈の所を、齒を喰ひしばつて、文學に這入るまいとしてゐるところが見える。

世の常に聞くは　苦しき呼子鳥。聲なつかしき時には　なりぬ　（卷八、一四四七）

ちよつと讀んだゞけでは何でもないが、よく考へると、身に沁みてよい味が出て來る。呼子鳥といふのは、今のかつこう郎、郭公である。鳴く聲を聞くと、大きな朗らかな聲であるが、昔の人は、「あこ、あこ」と、幼子を呼び立てゝ鳴いてゐるものと聞いて、傳說への聯想から、憂鬱な聲として聞いて來たものである。平凡な常の態度で聞いてゐると、聞くのにつらい、憂鬱な呼子鳥の聲。それが、今の自分には、朗らかに明るく聞かれる。そんな經驗が去年もあつた、一昨年

もあつた、どうもこんな親しみ深い氣のするのは、不思議だ。さう言ふ、今の氣持ちの明るさをよんでゐる。從つて此歌は、類型を破つた處に出て行つてゐる。郭公を感傷的に聽くのに對して、手勁く反對して、そこに一つの新しい境地をひらいて來てゐる。郭公に對する當時の、通常の考へから逸脫してゐる。そして本格的な文學に既に這入つてゐるのであるが、郎女自身では、文學としては扱つてゐない。上句は、平凡にいつてゐるが、しまひになる程、本格らしい、文學らしいものが、調子をぐつと變へて來てゐる。「聲なつかしき」の四句の味ひから、「時にはなりぬ」の五句の急に碎けたやうな、解決に安んじるやうな變化した調子、十分、味つて貰ひたい。

當時の女の人たちの作物には、不思議に神經の遲鈍なやうな處が多いのに、此人の歌には、よく見ると文學らしい、鋭いものが見え、而もそれが文學にならうとするのを、ぢつと、堰き止めてゐるものがある。此は、新しい生活に敏感だつた郎女が、其を壓へに押へたところから來てゐるのではあるまいか。其故、かうした逆說的な强さが出て來るものと、私は見てゐる。女性の、昔を維持しようとする力は、强いものである。

さう言ふ女性の歌が、どうして、男性に對抗出來たかと言ふと、古代の歌の表現目的の大きな一つは、「かけあひ」と言ふ儀禮にあつた。さうして、女で歌の巧みなものは、皆、かけあひ歌の技術に達した人であつた。昔からの實用としての歌の上に、技巧力が發揮されたのである。

歌垣（ウタガキ）と言ふ古代の儀禮については、今は全く空想化して考へられてゐる。村々の祭りで——村の

祭りであり、又境を接した村と村との間、國と國との間の祭りであることもあつた。――男女が兩方に立ち分れて「かけあひ」をする。歌をよみかけ、又其を受けて返すのである。神と神女との形において、村々の男女が、歌の應酬をしたのである。神女としての女が敗ければ、神としての男に仕へねばならなかつた。從つて神事としては、女が敗ける役割りときまつてゐたのであるが、次第に競技精神が深まつて來て、祭式として勝敗のきまつて居たものが、本氣に、本格式の勝負を爭ふことになつて行つた。

かうなつて來ると、敗ける筈の女がなか〳〵敗けない。男が集中して、其女にかゝつて行くが、女は技を煉りに煉つてゐて、片端から、ひし〳〵とはねかへして了ふ。かう言ふ女が後代にも、村々には事實多かつたものだ。其が古い時代のもの程傳說化して、後に傳へられて行きもし、傳說ばかりではなくなつた。競技としての歌でなくとも、卽興的によい聲で歌ふ女などが、村の世間では、爭奪の爭ひの人氣の中心となつて、段々と後繼者が現れて來たものである。かういふ風に、男から競爭せられる價値が、美の價値に換算せられる。美人として有名になつた女性は、大抵容貌以外に、流行力を持つてゐたものである。世間の男は、共通の競爭目的を求めてゐるので、さう言ふ女が出、其がどの男性をも容れぬとなると、人氣はます〳〵高くなる。一方女は、ます〳〵對抗の技能を煉つて行く訣だ。かうして一生男に從はずに死んだ美女の物語が、特に傳說の上に、多く出て來る。時代は降るが、小野小町などは、かう言ふ女性を代表する一人である。

ともかく、祭りの時に重要な女性の爲事は歌をよむことで、其を以て男に抗することが、どれだけ出來るかといふことが、村々の人のすべてに考へられてゐたのである。從つて、神事としては大抵は女が敗けるのだが、たまには絕對不敗のさう言ふ人が、屢出たのが、古代の村祭生活の味のある所であつた。其爲に、女の歌の技巧は、愈洗煉されて水準が高くなつて行く。併し、此理由で、女の歌は、どこまで行つても實用的である。其が巧みになれば巧みなだけに實用的な技巧ばかりが目につく。其場々々の機智頓智に富んだものである。如何にも、情熱を以て作つたやうに見える歌でも、さう見るのは後世人の力敗けで、實は男に對する女性の辭令であつたのである。女性の昔を維持しようとする力は、優れた相手が現れて、戰ひかけて來ると、えらい力を發揮する。

あしびきの山の雫に、妹待つと　我立ち濡れぬ。山の雫に　　大津皇子（卷二、一〇七）

女人のあける戸を待つてゐて、立つたまゝ、傍の露雫に濡れてしまつた男が、びしよ〳〵になるまで入れてくれなかつた女を怨んで、歸つて來て、かう訴へてゐる歌である。それに對して女は、

我を待つと　君が濡れけむあしびきの　山の雫に　ならましものを　　石川郎女（同、一〇八）

そりやまあ濟みませんでした。私を待つてゐてお濡れになつたと言ふ山の雫に、私が知つてをつたらなりたかつたのに……と言つてゐる。ましは現在の事實に反對の事を想像する時に使ふのだから、山の雫にはならなかつたのを殘念がつたやうな言ひ方になつてゐる。なつたらよかつたの

にならなかつたのがくちをしい、と反對の事を言つてゐるのである。男の訴へに對して、女は冷酷に、お逢ひ申さないでお氣の毒でしたと、併し、語だけは飽くまでもやさしく、表面は十分男の氣持ちをひつぱつて、實は斷然として拒絶してゐる。男の方はそれを承知してゐるが、又かう言ふ歌の表面のやさしさに希望も感じて來る訣だ。

かう言ふ、男を衝き放したやうな、古代の女性の歌が、萬葉には、澤山殘つてゐる。女は境遇が變つて、男の機嫌を取らねばならぬ立ち場に置かれると、著しく弱味を表して來るが、其は何處までも、現實の女性生活である。藝術は勿論遊戯にも、男女對立の形をとる時は、女の强さを示すことを、大切な態度としたことは、江戸期の遊女の歌を見ても知れる。萬葉集に出て來る女の歌には、かう言ふ、ひしゞ〳〵と、男の手を薙ぎ拂うてゐる樣なのが多く、從つて、内容は强く、外形はたわやかなものが多い。よく世間では、たわやめぶりと言ふが、たをや女自身の歌は、なまやさしいものではなかつた。

相聞歌

萬葉集卷十五は、半分程、所謂「宅守相聞」の歌である。中臣朝臣宅守が、「たわやめの惑ひ」によつて徒罪に處せられた。行つた配處は、越前國である。當の相手だつた、狹野茅上娘子との間に、贈答した歌である。此相聞の女の歌は、非常によく出來てゐると、言ひはやされて來てゐる。

その歌には、普通の女の歌らしくない强さを持つてゐて、其强さの爲に、立派な文學になつたものと思はれてゐる。併し、强さだけが文學の本分だと思はれてはよくない。此人の價値は、自ら別にあるのである。

あしびきの山路越えむとする君を　心に持ちて、やすけくもなし　（卷十五、三七二三）

女の歌として考へると、美しいくねりがあるものと感じられる。けれども、其一本調子な言ひおとしが此歌の生命なのである。「……心に持ちてやすけくもなし」は、明快な爽やかさを持つて居る。

北陸へ行くのには、琵琶湖を西から北に廻つて、關のある愛發山を越えて、北陸へ這入つて行く。從つて越前の國へ行く人の事を考へると、まづ愛發の山越えが心に浮び、此山を中心として、其忍び難い旅路が、頭へ來るのである。その事が始終心から離れないで、氣樂な氣が少しもしない、と言ふのである。

此歌は、前に言つた調子から來るものが、我々を打つのであつて、内容や思想は、殆ないと言つてよい。たゞ調子の上に我々を打つて來るものが充滿してゐる。其は、傳說・史實を知つてよむ人には、激しい女の感情のくねりと見えるのだが、實は其技術的な調子から來てゐる。女が、男に對抗する爲の歌を常に練習し、男を相手に廻して此を衝き戻す歌の稽古から、始終心が張つてゐて、調子も、一本調子に張りつめて來るわけなのである。此場合は、さう言ふ内虛外張の形式

で、様々な煩瑣を一擧に解決して歌ひあげてゐるのである。又、此歌の底に、世間に對する反抗でもあらう、反感らしいものが、調子の上に覗はれる。

君が行く道の　長手を繰り疊ね、燒きほろぼさむ天の火もがも　（卷十五、三七二四）

あの方の旅行するところの道の長い距離をたぐり重ねて、燒いてあとかたもなくして了ふ所の、天の火があればよい。

くりたゝねと言ふあたりは、山家の生活の經驗で、人々の知つてゐた知識である。木の蔓・蔓草などを、たぐり寄せて疊み重ねて火をつける經驗から出てゐる。天の火などゝ言ふものを、昔の人が考へてゐる。それで此歌を、強い、莊重なものだと考へてゐるが、實は女の歌としても、特に手勁い歌と言ふべきものではない。女の歌をやさしいものだときめてかゝつてゐるから、さう言ふ判斷が出て來るのだが、かう言ふものゝ作れるのが、寧、自然なのであらうと思ふ。かう言ふ歌を作るのが、女の普通の形なのである。

不斷に、歌の發想の上の誇張に馴れてゐて、形式も亦張りきつたものになり易い。常に現實の生活より、調子を一際高く歌ふ事に習熟してゐるので、事情がせり詰めて來た時には、咄嗟の感激から、此位の歌を作るのはあたり前だつたのである。だから何としても、「道の長てをくりたゝね」といふ樣な作爲や、調子の誇張が露骨になる。はじめにあげた歌の方は、それが程よく行つてゐるし、此歌も、下句は本格の調子が出てゐるが、上句は、特に「道をくりたゝね」などの拵

へ物がある。言葉がぴつたりして居ない。歌は、形式としての外がはの調子と切り放しては、內容が考へられない。從つて此歌も、內容だけ受け取つて、議論するやうなことはやめたいものである。外がはの形式が歌の中へのめり込んで來て、內容の一部となるのである。

かう言ふ歌を作るのは、先に述べた樣に、此女性が始終、歌の上に選手權を持續してゐたといふべき婦人だつたからで、境遇が寧、常の經驗を高め、飛躍して作らしめたのである。いはゞ經驗が、大いにものを言つた訣である。

還りける人來たれりと　言ひしかば、ほと〳〵死にき。君かと思ひて　（卷十五、三七七二）

遠國から還つて來た人が、今この家に來著した、と人が私に言つた。その時に、私は――驚喜して――あぶなく死にさうになつた。君なのかと思つて、と言ふのである。

此歌は現實の生活も出てゐるし、深い悅びも出てゐる。併し、初めの方は少しもつれてゐる。工夫もしぽうずも作つてゐて、而もそれと調和せず、混亂してゐる。しつくりと本物になつて來てゐない。下句で、初めて歌の强さが出て來てゐる。女の歌の强さは、かう言ふ形において見ることが出來るのである。斯う言ふ風に見ると、かうした女性の歌は、純粹の文學動機に觸れる樣子も訣つて貰へよう。

偶然な機會に突發するものが、文學として望ましい情熱を高めて來る姿がはつきり見られるが、何としても生活の根柢に、一つ別な力のあることに氣がつくであらう。それは、歌を、信仰上の

重大な表現の様式と信じてゐて、歌の目的が、そこから出て行くのを、意識・無意識に努力して防いでゐた爲に、もつと早く文學になりかけてゐたのに、容易なことには、文學になつて行かうとしなかつたのである。斯う言ふ歌と、生に對する態度とが、古代女性生活の上で、久しく續いて行く。單に其だけではなかつた。女の生活形態の把持力の堅固な姿に驚かれるばかりであつて、今に到つても、千年の昔の形を、日本の婦人生活の上には持つてゐるものがあるのである。現在はすつかり變つた樣だけれども、以前內掌典奉仕の宮廷の女性の方々は、堅實過ぎるほど古風を保つてゐたものであつた。昔、其も近古、或は時として中古からの引き續きの生活樣式をすら、保つてゐる樣に見えた。宮廷の女性方は、天子に奉仕すると共に、一面は別に、天子の奉仕せられる宮廷の神に仕へてゐて、自分たちこそ古風の信仰を維持してゐると信じてゐる樣に見えた。又事實さうでもあつて、一面、まことに、嚴肅な氣に打たれたものであつた。謂はゆる「神(カム)さぶる」と言ふ語で、この女性の、神々しい古代的な生活樣式を表した古語の意義もよく感じられる。而もかうした形は、昔は、國々・邑々(ムラ〳〵)の女性生活の上にも、普く行はれてゐたものと見てよいのである。

文學のない歌

時代は次第に移る。平安朝に這入つて來ると、見識——ぷらいど——の高い、强くて、而も亦別

に女性らしい典型的な生活が目について來る。

中には、前にも述べた、信仰生活を維持する上から、男を近づけずに、一生とほして行つた女性も、目について來る。小野小町などはさう言ふ女性の中の、著しい一人である。現實の小町自身の生活が、さうであつたかどうかは別として、傳說の上の小町は、さう言ふ神さびた生活をした女の、——其から又、さう言ふ古風な文學者の代表的な形を見せてゐる。

世間の人は、小町の歌を、純粹な文學として取り扱つて來ても居り、又さう思つてゐる人が多い。又事實、小町の歌は、其居た時代既に、短歌を文學としてとり扱はうとしてゐる時代であつた。其に拘らず、小町自身の作物の內容には、實は、殆、文學はなかつたのである。

思ひつゝぬればや、人の見えつらむ。夢と知りせば、覺めざらましを　（古今集卷十二、五五二）

寢てゐる間に思つてゐる人の夢を見た。思ひ〳〵して居たから現れたのだ。その時、此が夢だと知つてゐたとしたら、さめなかつたらよかつたものを……。

かうした戀愛の心理解剖の歌である。昔の人は、其點を深刻なものとして、受け取つたのだ。併し此歌などは、其に文學の態度は持つてゐるが、文學としては感じられない。心理を說明し放しにして、具體的に心理を表現して居ない。も一つ、たとへば、

いとせめて戀しき時は、うばたまの　夜の衣をかへしてぞぬる　（同、五五四）

つきつめて戀しくてたまらぬ時は、夜の衣をひつくりかへしてねてゐる、と言ふのだが、此がも

し、昨日もさうしてゐた。一昨日もさうしてゐた。此が此頃の生活だ、と言ふ風に、連續した生活を感じさせてゐるものとしたら、其處に文學らしい表現が出て來てゐる訣だが、このまゝでは、何と言つても概念である。さう言ふ風に戀しい時には、衣をかへしてゐるものだ。戀する者の生活を歌つてゐるやうにも見える。其でもどうにもならない。呪術(マジナヒ)の上の呪歌(マジナヒウタ)を作つた樣にも見えるのだ。も一度言ふと、此歌などは、戀愛に惱んでゐるらしい小町の作といふことから離れて考へると、さう言ふ時には、皆さんさうなさい、と言つてゐる樣で、戀愛生活をしてゐる者の生活樣式の表現だけで、しまつてゐるではないか。事實、待つ人が來ないで、獨り寢をする者のする、さう言ふ信仰行爲を、背景とした歌と見る事が出來る。其上更にわるいことには、此歌を、さういふ用途の呪歌として、後世用ゐてもゐることだ。

既に小町以外にも、かう言ふ種類の歌を作つた者が多い。萬葉集でも、戀愛の歌と、まじない系統の歌とは、混亂してゐる。

勿論受け取る側で、文學として味ふので、其態度次第で文學にも、亦さうでないものにもなつて行くと言ふ樣な種類の作物が、小町のやうな女流のものには多い。

此がやがて、形式をなして、平安朝の末から鎌倉の始めにかけての時代に流行した、戀愛心理表現の作風になる。むやみにこまかく「戀の心」を言はうとした態度は、既に小町に見られるので あつて、小町の、戀愛をしてゐる者の心理分解の歌は、千載集・新古今集時代の作家の創作態度

の上に、有力に働きかけてゐる。

もと〳〵歌と言ふものは、日本古代から中世へ渉つての女性の生活の、一つの有力な表現手段であつた。世間の人たちに、自分を諒解させ傳へさせ、又自分の存在を知らせるといふ動機とすらなつた、公然たる方法は、歌の發表であつた。尠くとも、その女の居た世間の一部と、其から其住んでゐる大家庭(たとへば宮廷・貴族の家の如き)とに自分の存在を知らせるのは、歌によるより外になかつた。さう言ふ手段として、作られた歌を考へると、同時代の人の諒解に導く爲に、有力に機智が働きかけてゐる。其と共に、誰にも咄嗟に訣ることの爲に、類型的な表現であることが、何よりも大事であつた。つまり、奇拔であつて一方、普遍的な平凡を兼ねてゐなければならなかつた訣である。

色見えで移らふものは、世の中の人の心の花にぞ　ありける　(同卷十六、七九七)

此も小町である。色の變るものは目に見えるが、目に見えないで變つて行くものは何だらう。其は世間の人の持つ……花だ。その世間の人の心にある所の……。花の色が變る〳〵と花の惡口ばかり言つてるのでは、花が笑つてるだらう。かう言ふ歌を、名高い女が作つたといふ評判が、時時世間に出て行く、さうかなあと思はせられて、世間で感心する。かう言ふ歌を作る者が、宮中の奥深くに、いつの世にもゐたのである。

花の色は移りにけりな。いたづらに　我が身世にふる　ながめせしまに　(同卷三、一一三)

人からもてはやされなくなつて、ぼんやりもの思ひをしてゐる中に、櫻の花に譬へてもよいと誇つてゐた私の顏の美しさも、去つて了つた、と言ふ、眞面目な一種の憂鬱な氣持ちをよんでゐるのだが、それだけでなく、ふるに降ると、世の中にもてはやされなくなる（舊るといふ古語）事とをかけ、ながめに長雨と眺めとがゝけてあつて、同音異義による技巧を、宮廷技術の喜びと救ひとして用ゐてゐる。この歌などは、別に誰に訴へたと言ふのでもなからう。かう言ふ風に、精神の高い女がゐる事をしらせる樣に、時々ふつと、世間へ歌を洩らす女が、昔はゐたものなのである。

平安朝には、宮廷ばかりでなく、大貴族の家の主人や貴女の側近くに、さう言ふ女性が、ついて居たのである。さう言ふ中で名高くなつたのが一人出て來ると、敗けまいといふ對抗心から、さう言ふ女を養つたり、又一家の中に數多く集めて、世間に誇らうとするやうになる。衰へた貴族などからも迎へて來て、家の子女の附け人としたりする。かうして、宮廷や貴族の家庭の奥に、ひそみながら、傑れた女が輩出して來るといふ風の、賑々しい社會が出現した。紫式部・清少納言・和泉式部と、雲の樣に現れて來た女房たちがそれである。

これらの人達とても、何も後世の人の認識不足で考へる樣に、遊惰な生活を貪つてゐたのではない。日常の本格の爲事は別にあつた。事務として主人の言行を記す爲事があつて、物語や日記を書く事は、其事務の馴れからして出て來たものである。日常本格の爲事は、主人の日々の言行を

書きとめ、又外へ出す命令を傳達し、其を書き物に書きつけて出すことであつた。時には、其人たちの意志表現の爲の歌を代作して、當座々々の解決をして行くことであつた。從つて、歌といつても、實用的な目的を持つた歌ばかりで、餘程才能が高くないと、さう言ふ歌は文學にはならなかつた。小町のものですらさうであつた樣に。

かう言ふ女の人として、先に「小町」・「伊勢御（イセゴ）」の樣な人が出、時を經て、紫式部以下の人達が續々と出たのである。又、其間にも、澤山ゐたことは、考へてよい。此等の人達の歌は、文學としては、わりあひ下位にあるものが多い。文學的には、餘りに實用的に過ぎて、おもしろくは行かなかつたのである。時が經つと、獨立性が足りないから、意味が訣らなくなり、何處がうまいかも訣らなくなつて了ふのである。其場々々の當意卽妙のもの以外には、取柄がなくなる訣である。つまり、標準が違ふのだ。

此時分まで、女は、生活の上に色濃く昔の信仰を殘してゐた訣で、さう言ふ點から、小町の歌が、殊に目につく訣であつた。其よりも更に、小町の樣な女性が、廣い世間に、幾人も〳〵、長い時代に涉つてゐたことが、想像せられるのである。

獨立性を持つた歌

次に、一條天皇の頃を中心に、和泉式部を例にとつて話して行かう。

此頃は、もう小町の居た頃とは、時代が非常に移つてゐる。其だけ、世間の歌に對する態度も、よほど變つて來てゐる。男の歌は、既に完全に、其頃の人達の考へた文學になつてゐる。唯よしあしは別問題であり、又我らの好惡とも關係なく言ふものと思うて欲しい。

女の歌も、もとのまゝの姿では、行かなくなつて來てゐるのだ。事實、女の歌で見ると、總べて、くたびれ切つてゐる。源氏物語などの物語歌（モノガタリウタ）と謂はれるものも、日記類にも出て來てゐる實生活に深く關した物も、彈力がまるでなくなつてゐる。此では實用にもならなかつたらうと思はれる程である。從つてかういふ際、歌の上手といはれるには、やつぱり誠に上手でなければならなかつた。其になる爲に、自分自身を啓發する理論らしいものが、人々の心に切に要求せられ出したのだつた。具體的に言へば、作品の上に、文學がとり入れられてさへ來れば、其で讀む者は滿足したであらう。其で其頃の男の歌をよく知つた者の作品が、まづ文學として內容を持つて來ることになつた。和泉式部の歌は、そこまで來てゐたのである。つまり、歌の上の生活に、實生活を入れ、生きた文學を導き込まうとしてゐたのである。

その點では、式部の歌が、いくらか行きすぎになつて、空想の這入つてゐる樣子が見える。だが、其よさは、歌を通して取り込んだ文學が、歌を指導してゐる點にある。尤、本格的に考へてものを言ふ段になると、せんちめんたるな、嫌味な處が大いにある。さう言ふ點は、石川啄木に似てゐると言へよう。啄木にはいゝものもあるが、一方には、鼻持ちのならぬ程のものがあつた。世

間で見てゐる程、思想などのない啄木だが、式部は訣り易く言へば、女の、而もゝつと思想のない啄木である。

和泉式部の歌は、文學か、實生活か訣らない處へ這入りこんで了つてゐるが、其處に又、式部の特異性が出てゐる。ともかくも、式部になると、ぽうつと明るみのさす歌の出て來たのは、えらいものだと思ふ。同じ女房でも、散文に似合はぬ淸少納言の樣な、歌の出來ない人の中におし出されて來ると、存在は、はつきりして來る。

和泉式部の歌の特徵として、外の女の歌と變つてゐる處は、「かけあひ」といふ昔の、歌の大きな領域から、非常に離れて來た事で、意味が水際立つてよく訣るのである。此までの女の歌が、かけあひの歌として、相手の歌、男の歌に倚りかゝつて、その價値を發揮してゐたのが、はつきりと獨立して來たのである。短歌が文學である爲には、第一に獨立性のある事、表現がはつきりしてゐる事が、必要なのである。其要件を、此人の歌は備へて來た。

次に考へられる事は、此頃の女の人は、生活自身を、次第に文學化して來たのであるが、その文學と言ふのは、平たく言ふと、戀愛と、殆同じ內容を持つてゐると言つていゝだらう。此頃の人達の考へた文學的な生活と戀愛とは、殆、距離がない。此頃の人達は、身に沁むやうな戀愛をしたと言ふ事が、天下にも後世にも傳へられたかつた。そして其身に沁む樣な戀は、歌を通じて感ぜられるものでなくてはならなかつたのである。つまり歌を通じての戀は、文學の題材その物と

いふ觀があつて、短歌卽戀と同じものと思はれる傾きを生じた。かう言ふ姿は、平安朝を通じて、遂に變らなかつたのである。だからどうかすると、今におき、尙、日本の歌は、戀歌ばかりであると思つてゐる人もある位である。少くとも、「戀」が主題となつて居り、戀歌氣分に立つての、四季の歌であり、雜の歌であると言ふ本質的な事は、事實であつた。とにかく、數の上の事は別として、歌のてまは戀にある、歌の基調は戀に立つてゐる、と言ふ事が言へるのである。和泉式部に於ても、歌を文學的にしようとする努力と、身に沁む戀をした自分を傳へようとする事とは、同じ事であつた。式部は、さう言ふ戀に、身を溺れさせたといへる。世にいふうき身をやつすと言ふのが、此である。それは謂はゞ、さうした生活は、はかない事であるが、ある意味に於ける自己完成といふことにもなるので、世間狹い女性の身にとつては、大きな意味のある事となつて來るのである。其にしても、式部の歌で第一に言ふべきことは、訣り易いと言ふ點である。

題知らず

人も見ぬ宿に　櫻を植ゑたれば、花もてやつす身とぞ　なりぬる　（後拾遺集卷一、一〇一）

誰も訪問して來ない、櫻を植ゑても無駄な宿なのである。其にもかゝはらず、櫻を植ゑた事が、却て我が生の寂しさを人に見せることになつた。あでやかな花で身のみすぼらしさをはつきり表すことになつてしまつた。さう言ふみじめな境遇になつてしまつた、と言ふのである。

普通なら、かう言ふ歌は、もつと陰翳を施し、匂ひを與へ、餘韻と謂つたやうなものをつけて、

味ひを加へるのだが、此はその點はつきりしすぎてゐる樣だ。

題知らず

はれずのみ　ものぞ悲しき。秋霧は、心のうちに　立つにやあるらむ　（同卷四、二九三）

秋霧が立つ頃は、始終晴れない、もの悲しい氣持ちがする。考へてみると、心の中までも、その秋霧が、立つて居るのではなからうか、と言ふのであつて、少し淺薄だが、同感の出來るやうに出來てゐる歌である。まう少しぼかして言つてもよからうと思ふ程、はつきりしてゐる。

八月つごもりに、萩の枝につけて人のもとにつかはしける

限りあらむ中は　はかなくなりぬとも、露けき萩の上をだにとへ　（同、二九九）

逢ふに限りのある二人の仲は、つまらなく解決がついても堪へて居ませう。併し、萩の花に露の置いてゐる樣な、しめつぽいあはれな私の暮しぐらゐは、尋ねてくれる位の事はしてもよいでせう。此歌の氣分を說くのは、ちよつとむつかしい。其にもかゝはらずやはり、はつきりし過ぎる程言ひすぎてゐる。其は、中古には女歌が空想の乏しい作品ばかりになつて來た。元々、まう少し、しなやかなところをつけ加へたい樣に思ふ。此で見ても訣る樣に、昔の女の人の歌は、姿態の强さを持つてゐるので、今の人が空想して考へてゐる樣な弱々しい歌は、作つてゐないのである。

津の國のこやとも　人を言ふべきに、隙こそなけれ。蘆の八重茸き　（同卷十二、六九一）

此歌は、様子が少々變つてゐる。海岸の村にある蘆垣の八重ぶきに葺きあげた、其垣根をとりあげて、田舍の生活をば、詞の部分にだけではあるが、ともかくもはつきりと表現してゐる。昆陽は、攝津の奥の方にある土地の名で、海と關係はないのだが、津の國と言ふので、この人などは、海岸だと思つてゐたのだらう。

津の國の古い土地の昆陽(コヤ)ではないが、私は逢へるものなら、來いとでも、あの人に言つてやるはずなのだが、考へて見ると、實際この頃は、人目の隙(スキ)がない。それであの人にいらつしやいと、言うてやる訣にいかないのだ。怨んで來た人に、かう言つてやつたのであらう。

昆陽と言ふ土地の、實際生活だと思つて、蘆の八重ぶきを出したのであるが、其技巧は、地名に就いての理會がないので、知つてゐる人から見ると、うなづけないといふ失敗をしてゐるが、其はあきらめてよい。

こんなぶつきらぼうに言はなくてもよいと思ふほど、つきはなした言ひ方をした歌だ。普通に考へてゐる樣に、柔軟な感觸や、絡みつくやうな行き方で、男の氣を惹くと謂つた女の歌とは、全く違ふのである。

男の、はじめて人のもとにつかはしけるに代りてよめる

おぼめくな。誰ともなくて　宵々に夢に見えけむ　我ぞ　その人　（後拾遺集卷十一、六一一）

此は男に代つて作つた歌である。あなたの方から、そ知らぬ顏で、私の宵毎の夢に、誰とも訣ら

ないで現れて來る人があると言つて來られたが、そんなことは、わかりきつてゐるではありませんか。その宵毎の夢でお目にかゝつたその人といふのが、卽私なのです。おわかりになつていらつしやるのでせう。そんなそ知らぬ顏はせずにおいて下さい。おぼめくなと言ふのは、此時分の言ひ方で、しらばくれてはいやですよといふことにもなるが、こゝはも少し柔かに、思ひ當らぬやうな顏はすな、見當がつかないやうな風はすなといふのである。そんなに強くはない言ひ方で、命令してゐるのではないのだが、其は、此場合としてわかつてゐるから、さう聞えないといふだけである。普通は、人に命令してゐる感じにとれても爲方がない。餘情などは大して問題にしてゐない歌で、女としての强さ、人の思はくを顧慮せぬ所を十分に出してゐる。こんな歌は、單純で文學ばなれがしてゐる點は、小町の歌に通ずるものがある。

性空上人のもとによみて遣はしける

暗きより　暗き道にぞ、入りぬべき。遙かに照せ。山の端(ハ)の月　（拾遺集卷二十、一三四二）

此も、意味はすぐに來なくても、構成は實に、はつきりしてゐる歌だと感じられるだらう。歌は構成がはつきりしてゐると、言つてゐることも、第一印象として、輪郭だけでもはつきり頭に這入るのである。

今の生活も暗いし、死んでから後も、まつくらな常闇の生活であることは知つてゐる。其世界へ這入つて行くにきまつてゐる私だ。それで、せめてあなたの信仰のお力で私の後(ウシロ)から、遠くから

でも照して下さい。山の端の月のやうに……と、山の端の月にも言ひかけない訣ではなく、同時に、正面からは、播州書寫山の上人に賴みをかける心を表してゐる。すべてを投げかけてゐるやうな物言ひだが、遠慮したり、卑屈に賴んだりはしてゐない所が、強い女性らしい表現である。

小式部内侍なくなりて、うまごどもの侍りけるを見て、よみ侍りける

とゞめおきて、誰をあはれと思ふらむ。子はまさるらむ。子はまさりけり

（後拾遺集卷十、五六八）

此歌は、詞書によると、自分の娘が孫たちを殘して死んで行つた。その忘れがたみの子どもを見て、親子の關係に思ひ到つたのである。今では平凡になつた周知の感情に過ぎないが、こゝまで考へたり、言つたりした人は、男にも女にもなかつた昔である。考へると、死んだ子に對する愛情も、何だか裏ぎられた樣な氣がしてゐるのだが、其をまた思ひ直して、あらためて好意を深めてゐるのである。だが、何と言つても、構成ががつしりし過ぎてゐて、餘情がない。昔の人は作者が和泉式部だからと言ふ訣で、ないところから、わざ〳〵、餘情らしいものを引き出して感じて來てゐるのである。歌はさう言ふ、不思議な自在性がある。

親と子とを殘しておいて死んで行つた故人は、どつちをしみ〴〵と思つてゐることであらう。私だつてこのとほり、子の小式部が可愛いのだから、小式部も親の私よりは、あとに殘した子供の方が、私以上に思はれるだらうと言ふので、やはりはつきりしてゐる。下句などは、あまり論理

的に迫り過ぎて來る。まう少し何とかならないかと思ふ。身に沁むやうな氣持ちが出てもよいのだと思ふ。歌そのもの、女性の文學自體の性質といふより、和泉式部の個性による所も、大きにある訣であらう。

だが、かう言ふ風に見て來ると、女の社會性の强さと言ふことも思はれる。女性の間の習慣とか、社會的位置とかゞ訣る樣に思はれる。ともかくも、平安朝の女性の作物として豫想してゐる女歌とは、違ふのである。ぷらいどの高い和泉式部は、かう言ふ歌を常に作つてゐる。心の中へ這入つて見れば、もつと〳〵やさしい所もあつたらうが、ともかく物言ひの習慣として、かう言ふ姿をとるのが、普通だつたのである。戀歌だけについて見ても、戀愛生活を表現する態度は、始終變へることがなかつた。氣强い、がつしりした物言ひを續けて、女性を卑怯なものと感じさせないのである。

文學に牽かれた生活態度

ところが、更に時代が降ると、文學は本格化し、段々に文學が主となつて、生活が其に引きずられる樣になつて行つた。歌はまだ本格的な文學になり切つた訣ではなかつたが、生活にとり込まれ、其爲に生活が變つて行つた。悪い方から言ふと、文學の爲に、生涯をあやまる人も出て來たのではないか、と思はれる樣な傾向すら現れて來た。

さう言ふ風に、文學に身をつまされるといふことが始るのである。文學的生活に墮ちこんで來るのである。平安朝の末頃になると、文學が有力になつて、さうした生活、さうした自分だといふことを人に記憶させたい、といふ欲望をのり越えて、その生活に浸りこまうと溺れてかゝる人が多くなつて來た。文學のよさが訣ると共に、文學の中へ生活が引きずりこまれたのである。男だつて、歌よみの幾人がこれを超越して居られたか問題だが、女は歌の生活が濃厚に沁みついてゐるだけに、文學少女みたいになつてゐる人が、多く目につく。さう言ふ形から成長して、それを拔け出で、又多少なりとも、新しい歌の風姿を示した代表者が、式子内親王（シキシナイシンワウ）とか、俊成卿女（トシナリキヤウノムスメ）と

か言はれる人々である。

此二人の歌人は、平安朝末期の女流文人として名高く、又實際にも、代表的としてよい人々である。其作物には、確實に、文學がつかまれてゐる。同時に生活がそれに牽かれ過ぎてゐる樣にも見える。併し、其はもはや、此時代では、文學者であることを外的條件として重要なものとなつてゐたのだから、遊離したものと見るのは、却て不自然な考へ方ともなつて來るわけである。譬へば、式子内親王の、藤原定家に關した噂も、其持つてゐる文學や、周圍の文學の質によつて、起つたものであり、又文學の影響が、この文學者の生活をさう導いたのだ、と考へてよいのである。俊成卿の女の方は、後に、越部禪尼（コシベゼンニ）と謂はれた人である。子の定家や、弟子の家隆に比べて、寧、此人が一番、俊成の抒情的な本領を繼いでゐると見てよいだらう。

とふ人も　あらし吹きそふ秋は來て、木の葉に埋む宿の、みちしば　（新古今集卷六、五一五）

たづねて來る人もなくなつてしまつた上に、かてゝ加へて山おろしの風が吹き添つて、何もかも萎れて了ふ秋がやつて來た。さうして、風に吹き散らされた木の葉で埋めてしまつたやうになつた道――その道芝――こんな意味である。道を埋んだといふのが主なのだが、其が、芝の上に延長せられるのである。

大體は秋の敍景で行つて、少部分抒情的なものを出してゐると言ふ歌である。此歌が持つてゐる心は、戀愛的なてまである。人に訪はれぬ人が、恨めし相に暮してる樣子である。結局、どう言ふかどから出發しても、戀愛に到達するのが、此人などの歌だ。而もある點まで、はつきりと自然描寫してゐる。そして其が、自然描寫に終らさずに、抒情――戀愛に還つて來てゐる。そして初めて、落ちついた、といふ氣持ちのするものばかりである。此頃は、哀傷とか祝ひとかの歌は別として、四季の歌などは、戀愛に歸結しないと、歌と言ふ氣がしなかつたのであらう。だから、敍景歌など、澤山勅撰集にとられて居ても、精彩のないどころか、何だかぼやけて見えるものばかりであつた。つまり純敍景であるべきものまで、抒情的な氣分を引いてゐて、さつぱりしない。どうしても、印象鮮明に敍景以外のものではない、といふ氣分のはつきりした歌の出て來る必要があつた。だから、一方には全然抒情氣分をきり放した歌も、出て來てゐる。同じ作者の、

吹きまよふ　雲居を渡る初雁の翅にならす　四方の秋風　（同卷五、五〇五）

と言ふ様な歌にふれると、ほつとする。此なども、まだ調子の持つたねばりが、からりと敍景氣分を出してゐる所までは行つてゐないが、景色の外には何も言つてゐないことは事實である。方向定めず吹き廻つてゐる風の空を、渡つてやつて來る雁のからだに、吹き廻る秋風が吹きつゞけてゐる、と言ふのである。

處が、此歌でさへも、よく考へてみると、前に言うたとほり、純粹の自然描寫としては、受け取り憎い處がある。第一、風景がはつきり來ない。何かゞ絡みついてゐる。つまり始終、歌の解決を戀愛でする事に馴れてゐるので、たまに純粹の自然描寫の歌を作つても、何か解決のないものが殘つてゐる。短歌の上では、しらべ——調子が、からりと解決をつけるのだ。感情的の解決である。直覺的に諒解が行きわたるのである。此しらべは、意義ではないが、意義をてつとりばやく、ひらりと人の頭に寫し出すのである。此事は、短歌にとつて、重要なことである。

この様な戀愛の歌ばかりを作つてゐた人々は、どうしても、此しらべを抒情的なものから、獨立させることは出來なかつた。だから、此解決は、結局此時代にはつかなかつた訣である。

被ル忘レ戀ラのこゝろを

露拂ふ寢覺めは　秋の昔にて、見果てぬ夢に　殘る面影　（同卷十五、一三二六）

袂の露——涙の露を拂つて、もの思ふ秋の寢覺めの思ひ、それは今の秋でなく、昔の秋のことであつて、逢ひ遂げぬその人との關係が、最後まで行きつくしてしまはぬ中に、覺めてしまひ、而

も其人と逢つてゐた頃の幻影が、まざ〳〵と殘つてゐる。其が今——現實の秋の寢覺めである。「秋の昔にて」とあるから、露拂ふねざめは昔の秋で、今はさうした感激もなく、たゞ幻影を逐ふばかりだともとれるが、其はわるいだらう。

露はらふと言つてゐるのだから、袂の涙の露に、其人の幻影がうつゝて見える、といふ風に感じさせたかつたのであらう。歌ではそこまでは言つて居ぬが、歌の習慣としては、さうとれることを豫期してかゝつてゐる、と見てよい訣である。露は拂ひ去つたが、幻影は拂はずに殘つてゐる、といふのであらう。

此歌のおもしろい所は、見られるとほり、戀愛の歌でありながら、却て、戀愛の歌になり切つてゐないといふ點である。自然描寫と戀愛とが、からみついてゐるのである。其から今一つ、戀愛心理描寫に重點があつて、情熱をおき忘れてしまつてゐる。かう言ふ戀歌——戀愛小說の斷篇とも言ふべき歌が、殖えて來て、其が、此期以後の戀歌の特色となつてゐる。かう言ふ風に、自然描寫と戀愛の心理解剖とが、抱きあひからみ合つたものが、文學らしい文學だ。尠くとも、短歌の最上のものは、かう言ふ表現をとる筈だと、此頃の人達は考へてゐたのである。さうした考へは、事實後代——今に到るまでも續く。新古今の歌の幽玄味などいふことも、さう言ふ點に、力點をおいて言はれてゐるのだ。戀愛氣分を自然描寫の上にかけて、結びつけると、文學として立派なものが出來ると思つてゐたのである。かう言ふ歌が其時代の人々にどし〳〵作られて、所謂

新古今集の、解釋のしにくい歌が出來あがつた訣である。つまり、自然描寫として說くと、感情が殘り、抒情歌として說く場合には、自然描寫が殘るのである。併し何にしても、此時分から、純粹な自然描寫の歌が、文學の領域において、大いに認められ出して來たのは事實である。つまりうぢやぢやけた景情混淆の表現では憂鬱になつて來たのである。

女性と敍景文學と

かう言ふ風にして、此時分になると、歌の上では、男の歌と女の歌とが入りまじつて、男女の歌の區別がなくなり、一見同じになつて來てゐる。併し、社會的には、女の作風を高く評價する癖があつた。それは女の歌は集團として女房歌と呼び、男の歌に對立する力のあるものと考へられて來た習慣によるのである。更に其よりも久しい、女性の文學の歷史がものを言つてゐたのであつた。それで女の歌は、人から認められ易かつた。同時に、此時分には女の中から優れた人が相當に出た。俊成女の歌は、女歌としての特徵がはつきりしてゐないと言へば言へる。唯あの抒情表現が、人をして女らしさを深く感じさせたといふことである。

男の歌と女の歌との、境界の訣らない人が、此頃には多いのであるが、後鳥羽院に奉仕した「宮内卿（ナイキヤウ）」などは、女歌としての特徵の、はつきり出てゐた人と言へようか。それだけに空想が乏しく、寧單純な趣向を凝し、其も凝し過ぎると言ふ缺點が明らか過ぎる。併し、色彩の實に鮮明な

ものを作つた人である。

うすく　濃き　野邊の綠の若草に、あとまで見ゆる　雪のむら消え　（新古今集卷一、七六）

春になつて生えてゐる若草の綠に、濃い所と薄い所とがあつて、雪のむら消えの痕跡がそれに見られる、と言ふのである。痕跡すらはつきり見えるといふのをまでといつたのだらうが、後々までもといふ風に聞えるのを拒み難いのが困る。はつきり言つてゐて、すが〳〵しい。あつさり、さつくりしてよいが、考への設計が勝つて居て、感情が足らない。「あとまで見ゆる」に有力なねばりのしらべがあるのだが、其が又、前に言つた弱點を構成してゐるわけなのである。

逢坂や　梢の花を吹くからに、嵐ぞ霞む。關の杉群（ムラ）　（同卷二、一二九）

逢坂山の杉群を吹き過ぎる山嵐し。その通り路がはつきりしてゐる。櫻の梢々の花を吹きおろす山風は、眞白に霞んで見える。其花の山おろしだ。さう言ふ歌で、技巧を凝した作物である。が、眞の自然描寫ではない。作り物である。考へ過ぎて餘情を失つた。

花さそふ比良の山風　吹きにけり。漕ぎ行く船のあと　見ゆるまで　（同、一二八）

此歌も、同じく技術的な作である。湖水の面に、比良山おろしにさそはれて散つた花が、溜つてゐて、漕いで通る船のあとが見えると言ふので、綺麗でもあるし、殊に色彩は、はつきりしてゐるにかゝはらず、すが〳〵に乾いてゐる。此とても、新しい境地で、感覺は豐かにある。唯、現實感が後退してゐる。かう言ふ種類の女歌が出來てゐたのである。此後、玉葉・風雅などまで、

此風が續いてゐる所を見ると、たしかに一つの流れがあると思はれる。だが、本質の上から言へば女歌でなく、男歌だと謂はれさうである。つまり、こんな點では、女が男の境地に這入つてしまつたのである。

女流文學の單純化

式子内親王の作物になると、歌の上にからみついてゐた抒情味を整理し、雜多な夾雜物を取り棄てる事が出來た樣である。かう言ふ點では、珍しいほど、純粹な作物を多く持つてゐられる。

さらでだに　身に沁む秋の夕暮れに、松を拂ひて風ぞ過ぐなる　（玉葉集卷四、四八二）

此歌もなほ、前に述べた樣な、絡みついたり、纏綿したものを脱却しては居ないが、さうでなくても身に沁む事の感ぜられる秋の夕暮れに、身近い松の梢を吹き拂つて、風が過ぎてゆく事よ。かう解釋をすると、簡單に整理がついてしまふ。だう〳〵廻りをして結著のつかないのが、新古今時代の歌のある特徴であるが、式子内親王のは、さうした中で、最割り切れるのが長所である。

眺むれば、木の間うつろふ夕月夜（ツクヨ）　やゝけしき立つ　秋の空かな　（風雅集卷五、四四四）

歷史的に見てくると、この位のものが目立つのである。ぼんやりとしてゐると、木の間をうつゝて行つて、時の經過を思はせる月。其がたそがれ、段々月の色が濃くなつて行つて、ぽつと浮き立つた樣に秋の姿をして來る、その空あひよ。ちやんと近代敍景らしく出來上つてゐる。不思議

な程はつきりして居る。其頃の人の敍景は、大體、此歌の樣には、はつきりしてゐないのである。

今はとて影をかくさむゆふべにも　我をば送れ。山の端の月　（玉葉集卷十八、二四九三）

此歌もはつきりしてゐる。はつきりし過ぎてゐる。たゞ、「影をかくさむ」と言ふのが、月の事を言つてゐるのか、自分の事を言つてゐるのか、直接には來ない所があるが、月の緣語――かげを使つたゞけなのだから、身を隱すといふことはわかる。此が遁世することなどでなく、死ぬる事を言つてゐられるのだとすれば、亦もつとはつきりして來る。此以上はつきりしたら、歌の持つてゐる空想がなくなつて、この歌としての、又その頃の歌としての表現の特徴をも失ふであらう。

花ならで　また慰むるかたもなし。つれなく散るを　つれなくて見む　（同卷二、二三九）

此歌は、ちよつと見には、むつかしい樣だが、さうではない。解釋して、整理し切れる簡單なところがある。花によらないで、まう一つほかに、われ〳〵の氣持ちをなだめる方法があつてくれればいゝ。さうすれば、我々がこんなに思ふ心にかゝはりもなく、そしらぬ顏で散つて行くあの花に對して、こちらも、花なんかに執著しないで、その散つて行くのを知らん顏をして、みてもゐよう。

こんな内容を、他の人に言はしたら、持つて廻つた樣に發想して、まるで訣らなくしてしまふにきまつて居る。此内容を、これだけに整理してゐられるのは、大きな單純化する力のあつたことを示してゐると思ふ。よほど優れた素質を持つた方だ。

わが門の稲葉の風に　驚けば、霧のあなたに　初雁の聲　（玉葉集卷四、五七八）

これもはつきりとしてゐる。面白みも亦、直截である。「おどろけば」は、はつと氣がつくことである。

旅枕　伏見の里の朝ぼらけ。苅り田の霜に、たづぞなくなる　（同卷六、九三三）

此は、よさのわかりにくい歌だが、下句の味ひは誰にもわかる。すこしはつきりしてゐる所が、心をひきにくいのだ。相當に、いゝ歌である。尠くとも、明治以後の御歌所風の歌などは、遙かに、此以下であつた。さう言ふ風に考へてみると、こんな歌も、意味を持つて來る。

窓近き竹の葉　すさぶ風の音に、いとゞ短き　うたゝねの夢　（新古今集卷三、二五六）

此歌には、戀愛の氣分が這入つてゐる。切り去れば切り去れる程度にしか這入つてはゐないが、そのくね〳〵たよ〳〵とした味ひが、この歌の主題なのである。

夕立の雲もとまらぬ　夏の日のかたぶく山に、日ぐらしの聲　（同、二六八）

終始、敍景で押して行つてはゐる。夕立の雲もとまらぬは、驟雨が忽過ぎて痕跡も止めぬのである。夕方になつて、まだ日のかん〳〵あたつてゐる山に蜩が鳴き出したのである。明治三四十年代においても、新しい歌である。

たゞ純粹の敍景歌を作つても、抒情の氣分がとれない。上一二句にさうした傾きはないでもないが、まづ此歌などは、純敍景と見られる。宮內卿のに似て、もつと眞實味が深い。

あともなき庭の淺茅に　むすぼゝれ、露のそこなる松蟲の聲　（同卷五、四七四）

ところ〴〵には、古典教義に俟たねばならぬ特殊な言語の興味にたより過ぎた所はあるが、大體は、此も解釋しなくて訣る歌である。かう言ふわかり易い形を作ると言ふ事は、その時分の人にとつては、非常にむつかしい事であつた。時代の不健全な病氣、其にとりつかれてゐることから超越する事は、えらい爲事だつた筈である。それを、女の身で、きり拔けて來られたのが、式子內親王の優れた所である。勿論、式子內親王が出て來られるまでの導きや、個人としての理由は澤山にある。第一は、周圍の力、先輩の影響である。併し內親王の爲事も、此で斷絕してをつたら、價値も低くなつてしまふが、此爲事は、短歌の歷史の上で立ち消えにならなかつた。それどころか、大きい後繼者が、此後に出て來た爲に、新古今時代には認められて居ながら、ある時代認められなかつた內親王の文學上の力が、後に到つて飛躍し、增大したのである。

勿論、式子內親王以外にも、かう言ふ傾向は絕無ではなく、同時代の人の作物の中にも、ちよいちよい見られはする。

樗咲く外面（ソトモ）の木蔭　露おちて、五月雨（サミダレ）霽るゝ風渡るなり　前大納言忠良　（同卷三、二三四）

樗の咲いてゐる外側の木蔭に、ぱら〳〵と露が落ちて、梅雨の雨があがる風が、吹きわたつて來る事よ。

如何にも明るい梅雨ばれの感じ、かう言ふのが、新古今にあつたことを、知らなかつた人も多い

だらう。たけの高い調子に、氣分を十分にはつきりと出してゐて、どうして既に、此時代にこんな歌が出來たのかと思はれる程である。印象的で、題材ののびがよく行つて、むらがない。新古今集の代表的な敍景の歌である。

此歌自身は、此とほり立派で、著しく光つて見えるが、外と餘りに違ふので、此歌自身の獨立性に對する不安を感ずる位だ。併し、かう言ふ歌は、式子內親王の歌の中、今まであげた樣なものを見れば、なる程、出て來る筈だと理會出來るだらう。此傾向の先登に立つて歩いてゐられるのが、式子內親王であると見ればよい。だが、內親王の御歌の中、特にさう言ふ、かつと目を睜かれた樣な、新時代の歌だけをあげて見たのだ、といふことを考へておいて頂きたい。併しかう言ふ歌が、ぽつ〳〵あつたとは言ふものゝ、全體として新古今時代の歌は、自然描寫と、戀愛の心理解剖との、からみあつた表現、謂はゞ幻想的表現とも言ふべきものを特徵として、固定して行つたのである。

短歌の本質の成立を見せた歌

新古今集の時代から、短歌の歷史の上には長い、退屈で懶い、個性と、輪郭とのぼやけた歌で滿された時代が續く。そして、鎌倉時代が過ぎ、所謂南北朝の時代に這入らうとして、天子・中宮と申す樣な、高貴な方々を中心とした宮廷文學に、優れた少數の歌人が出た。卽、玉葉集・風雅

集の歌人たちである。此歌人たちによつて、はじめて歌の發足以來解決のつかなかつた點が、ほつと解決がついたのである。

伏見天皇竝びに中宮永福門院、此お二人の歌は、日本の歌の中で最、健康な、正面から文學として名のることの出來るものである。宮廷ぶりの歌としては、少し品位を缺くのではないかと思はれる程に、徹底して寫生態度に似たものがはつきり出て來て、優れた自然描寫の文學が出てゐる。歌が健康であると言ふ事は、解釋法に正しくのつて來ると言ふ事で、解釋法にのらない、卽不健康な歌は、文學のまづ第一歩で、つかへてゐる訣である。文學である爲には、まづ第一に形式と、內容とに對する理會が、大事である。その意味から言つて、伏見天皇と永福門院との御歌は、長い歌の歷史の後に、尙且歌の氣分を喪失してゐない、新鮮な點で、優れてゐる事が誰にでも訣る。それには、又方がたの指導者であつた、藤原爲兼が優れてゐたと言ふ事になる。此人自身の歌は、色々試みもして居り、失敗もしてゐるが、指導者として、殊によい爲事を殘してゐるのである。歌集玉葉集は爲兼が撰し、風雅集は花園天皇が重く責任に與つてをられるが、比べてみると、玉葉集の方が、やはり優れてゐる。女性の歌人も相當にあるが、今は、たゞ永福門院に就いてだけ見ておく。

なほ冴ゆる嵐は　雪を吹きまぜて、夕暮れ寒き春雨の空　（玉葉集卷一、三三）

斯う言ふ歌になると、國文學の先生は用がなくなつてしまふ。先生たちが必要だと言ふ意味は、

右に言つた様に、其文學が解釋法が要ると言ふ事で、其は文學として、不健全性を持つてゐる、と言ふ事だ。解釋法を必要としないと言ふのは素朴に言つて、其がよい作物であるといふ證據である。

峯の霞　麓の草の薄綠。野山をかけて春めきにけり　（玉葉集卷一、八四）

木々の心　花近からし。昨日今日。世はうす曇り、春雨の降る　（同、一三二）

山もとの鳥の聲より　明けそめて、花も　むら〳〵　色ぞ見えゆく　（同卷二、一九六）

入りあひの聲する　山の陰くれて、花の木の間に月出でにけり　（同、二一三）

どれを見ても、自然描寫が截然と、目的と目的ならぬものとを分割して表現してゐる。やゝこしくないのである。それでゐて、氣分を失つてゐない。

うす霧のはるゝ朝明の庭見れば、草にあまれる秋の白露　（同卷四、五三六）

月影は森の木末にかたぶきて、うす雪白し。あり明けの庭　（同卷六、九九八）

群雀　聲する竹に　うつる日のかげこそ　秋の色になりぬれ　（風雅集卷五、四四九）

内容は細やかなものだが、歌の調子で、皆單純になつてゐる。群雀が竹藪の中で鳴いてゐて、その竹むらに移動して來た日光が、もう秋らしい、と言ふので、自然の景色が表す氣分よりも、歌の表す氣分の方が、單純でなくてはいけない。此歌は、自然の景色の複雜さから、まう一歩進めて、太く單純化してゐる。飛躍してゐる。

寒き雨は　枯野の原に降りしめて、山松風の音だにも　せず　（風雅集卷八、七八七）

皇后中宮と申す樣な高い位置の方が、女性の扱ひにくい冬の景色を、此まで作り上げられるのは不思議である。題材のとり方は、上句に優れた處を見せてゐる。が、下句が氣分を十分に出してゐて、此外に言ひ方が、ちよつとあらうとは思はれぬ。

鳥の聲　松のあらしの音もせず。山靜かなる　雪の夕暮れ　（同、八一六）

氣分の勝つた歌だが、その描寫も、氣分に敗けてはゐない。

荒れぬ日の夕の空は　のどかにて、柳の末も　春近く見ゆ　（同卷九、八八四）

餘り上手過ぎ、神經が細かすぎ、普通の身分の人の氣づく樣な處に這入りすぎてゐて、其普遍性が、却て此歌を平凡に見せる懸念がある程だ。其爲に品位が削がれて、身分の高い人の作物らしくなく、普通世間人の作りさうなものになつて來てゐる。其程觀察が、こまかい處にまで行き屆いてゐる。つまり、かう言ふ作物に到つて、宮廷の歌らしい、がらが失はれたことを感じる。其程、此國の文學には特殊なものがあつたのである。宮廷の歌は、無内容で、風格が高くて、單純化されてゐる。それをづぬけて裏切つて、普遍界におりて來られたから、さう言ふ感じをうけるのである。自然描寫はどうしても柄を小さくするが、併し、さう言ふ行き方は、歌にとつて正しいことであり、又文學が、眞の文學になつたことを示してゐるのだ。宮廷文學と、民族文學とのねらひが、合體する傾向を見せて來たことなのである。

とにもかくにも、此時代に到つて、われ〳〵の文學史の豫期に反した歌が、宮廷に出たのである。併し、歴史上の女の歌を反省してみると、永福門院のはじめられた特徴ではない。單純素朴で、訣り易く、解釋し易いのは、女の歌の上に、ずうつと續いて來た特徴である。そして此は、日本の短歌文學の上の大きい事實でもあつたのだ。文學を自覺してゐた男に從つて、文學を自覺して來た女性は、存外單調な歌を作り、その現れとして、歌はいゝ方へと辿つて來てゐる。其は、男の歌と、女の歌とが同格であると認めてゐた歴史的習慣が、それをさしたのである。もし、女の歌を以つて、男の歌以下であると見てゐたとすれば、女の歌は、こゝまでは來ないでしまつたであらう。同格と見てゐる爲に、男がその歌の上に、女歌の姿態を取り上げ、女歌の發想法をも併合した。さうすると、又女の歌が先へ進むと謂ふ訣だつたのである。

短歌の上だけでみても、女の文學は、始め廣い領域を持つてゐた。それを次第に失つて、領域は狹くなつて行つたのであるが、尙、世間からは、男女が對照的に見られてゐた。其中に、時代が鎌倉時代に進んで行つて、男の歌も女の歌も衰へて行き、歌の方には、休息の時期が來、連歌に赴いて息をついてゐる時代になつてはじめて、古い幻から解放された、自由なものが出來て來た。其には、前々から形成されてゐた、宮廷貴族の間の短歌文壇が、其時分になつて勢力を失つて來た事が、大きな原因になつてゐる。事實の上では、鎌倉時代に分裂した、二條・冷泉・京極の三師範家は、玉葉集の頃には、はつきりと對立してゐた。其對立の動因を、强く出したのが、玉葉・

風雅の指導者であつた爲兼である。かう言ふ、當時の文壇の、すべての情勢に目を通して考へ併せて見ると、歌が憩ひを欲してゐて、ほつと吐いた息が、切に自由な、優れた歌になつて來たのだと言へると思ふ。正しいと考へてゐたものが、息苦しい過去の固定した道だつたのを、氣輕くふり棄てたから出た、自由な文學であつたといふことになる。

玉葉・風雅の歌に就いて、もつと調子の高いものならばいゝが、と言ふ議論もあるが、其は歌の限度を考へに入れてゐない議論である。三十一文字と言ふ、形の上の制約のある文學に、さう高邁なものは求められない。萬葉集で見ても訣る樣に、歌の上に求める精神の高邁などゝいふものはない。形式の高邁に似たものが出て、空虛になつてしまふのである。從つて、歌がかう言ふ風に、玉葉・風雅の歌風に向つて進んで來るのは、當然であつた。其當然すら、若し、伏見天皇・永福門院が出られなかつたら、現れずにしまつたであらう。

女流歌人の居なかつた時代

江戸時代三百年の間に、歌の改革を考へた人は、ないではない。ともかく此時代は早くから、爲政者によつて文化政策第一手段として學問が奬勵せられ、印刷術がかなり自由に行はれ出した。漢學以外に、日本の古典も多く出版せられたので、時が立つと共に、日本學といふべき古典學が盛んになり、その最初に現れたのが、歌書の研究であつた。さうした新しい教養を持つた人から、

これまでの歌は、平凡な、傳襲的なものばかりで、古典に出てゐる歌に比べると、皆末流のもので、價値の極めて尠いものと思はれたであらう。其に氣のついたのが、江戸の古典學の出發である。江戸の町にも、京大坂の地にも、和歌の改革を唱へる人たちがちらほら出て來た。だが多くは浪人・隱士などの世間全體に對する優越觀から出た批評で、大した實行力があつたものではない。だから價値ある實作物を示しては居ない。理論は言ひ易い。理論を實現することはむつかしい。さう言ふものが出來る爲には棄て石をうつやうに、いろ〳〵試みの作品を、あゝでもないかうでもないと言ふ風に、作らねばならないのである。江戸の短歌に、相當大きな棄て石を据ゑたのは、木下長嘯である。純文學の態度から見ると、問題になるものが多い。

かう言ふ時期に、相當な改革の實をあげる爲には、やはり底力になる教養が必要だつた。だから此長嘯の爲事を、時を隔て、ほんたうの形に實現したのが契沖である。まだ不足なものや、とりさるべき滓がずゐぶんあつたが、其でも「文學」を明らかに感じ、又其を捉へても居た。だから

と言つて契沖の作品にあまり期待をおいても失望するが、又普通考へてゐるよりも、此人の作物は價値の高いものである。學問としては廣い領域を持ち、大きな研究の迹を萬葉に殘したが、歌としての作物は、新古今和歌集がそのねらふ所であつた。此は長嘯は固より、彼の友、下河邊長流のとつて居る態度でもあつた。

文學を失つた歌に文學をとり戻すことは、今まで問題にならなかつた古典による外、爲方がなか

つた。改革せねばならぬことは感じてゐても、或準據がなくては、實現することは出來るものではない。場合によると、或準據にそつて、現在の狀態の誤りを知つたと言ふこともあるだらう。かうして起つた、新古今集を宗とした歌風も、此後江戸時代の學者たちの歌として、また〳〵文學を喪失することになる。其上以前から續いてゐる古今集風の歌をよんだ、教養淺い單なる歌人と言ふだけの人たちの歌、其二つの流れの侘しく絡みあつたやうなもの――、さうした歌の久しく行はれた後に、明治の短歌革新が起つて來るのだが、その時に、準據になつて來たのは萬葉集であつた。

さて江戸期の短歌史を大摑みにして話す場合には、とりあげて來るだけの、女歌人が居ない。女性が文學に携るには、此時代はあまりよい條件を具へて居なかつた。女性が一流の藝術家となる爲には、家庭に埋れた生活狀態が、第一にいけなかつた。家庭婦人の教養と言つた程度に扱はれた文學藝術では、之を吹き切つて、第一義のものにつき貫くことは出來ぬものである。其に文壇が女性を締め出して居た、といふより寧、互に沒交渉であつたのである。稀に珍しい才女の作物といふのが、風の如く世間に喧傳せられることもあるが、誰にも理會出來、騷がれるだけの要素を持つたものであるだけに、第一義の作物であるといふことは、はじめから望まれない。何れにしても、社會において、一流人として女性が認められぬ間は、其文學も、一流の水準にはのぼつて來ないのである。

眞淵や、景樹の弟子に、女流歌人として相當なものと謂はれた人もあるが、皆こゝに採りあげる程の、深い素質を示しては居ない。大名の姫君や武家の女房などが、如何に才があつても、一流の技術を固定して持つて居る程、底力があるものではない。結局女性は文學に關係がなく、文學も亦女性の生活に觸れなくなつてしまつたのである。

さうした江戸短歌の歴史の後に、ともかくも明治の女流歌人が出て來たのである。思へば、長い女性短歌の空虛時代であつた。

短詩形文學の革新

短歌俳句の如き、過去の深い根ざしを持つた文學も、新しい文學として明治にも生きついで行くべき順應性を持つて居た。そこに改めて、新文學としての出直しが行はれたのである。

明治のはじめ、短歌よりも寧、長歌の方へ文壇の情熱は向いて居た。今は正しい稱號におちついたと見てよい所の「詩」は、長く「新體詩」と言はれてゐた。此新しい日本の詩は、その出生の暗示を、讃美歌から受けた點が相當にあつた。さう言ふ所に、異鄕的な味ひもあり、人を厭はせる臭氣もあつた。之を嫌がる人々は、之に替へるに、古代の長歌樣式を復活させようと主張した。其よりもゝつと、實行的な人々は、「今樣」を新しい詩の樣式に採用しようとした。そんなこんなの樣式論が盛んに鬪うて後、やはり時勢の向ふ所は、せむもないものであつた。新體詩が日本

的な外裝の中に、新しい內容を出來るだけ盛つて現れて來た。

此運動の間に、やゝ立ち遲れて、短歌の內容を變更させようとする改新運動の試みがあり、若干の理論も伴つてゐた。池袋清風（イケブクロキヨカゼ）は、鹿兒島出身で、八田知紀（ハツタトモノリ）系統の景樹（カゲキ）派歌人であつた。同志社に關係があつて、勿論基督敎徒であつた。そして、基督敎式な題材や、又多少英詩の持つてゐる氣分を、歌に出さうと試みた。唯、今から見れば甚微弱なものだが、其でも時勢は、徐ろに之に牽かれて來た。與謝野寛（ヨサノヒロシ）――當時、鐵幹（テツカン）――や、正岡子規――元、越智處之助――などが、新聞や雜誌で、革新論を書きはじめた。「亡國の音」といふ鐵幹の論は、人々の反感を唆ると共に、又さうした反省をせねばならぬ處まで、歌が來てゐるのだといふことを、自覺させずにはおかなかつた。其は、論の力といふよりも、やはり「時」の問題であつた。

鐵幹が頻りに哮（タケ）び、子規また「歌よみに與ふる書」を幾度も書いた。其矢面に据ゑられた歌人は當時一番有力だつた景樹派の人々であつた。文學的に優れたものを持つてゐたといふ訣ではない。唯其流れの人々が、御歌所に位置を占めて居た爲に、かうした新運動をする人たちの目についたのである。眞を言へば、さうした低い歌人などを問題にすること自體が誤りなのであつた。だが此歌風を改革すれば、一氣に自家の言ふ所の歌が天下に行はれるものと思つたのであらう。

だが其當時、子規は固より、鐵幹もまだ一家をなすと言ふだけの歌風は示して居なかつた。さうして、その非難の對象になつて居た御歌所風の歌は言ふまでもなく、こゝに擧げるに足らぬもの

ばかりである。だが、女性の歌を問題としてゐるのだから、假りにさうした人々の中から、女流歌人をとり出して見よう。短歌改新の爲の結社「新詩社」が出來、「明星」が發行せられた明治三十三年に死んだ税所敦子（サイショアツコ）は、明治の紫式部と言はれた人だつたが、其作物を見れば、歌に求める文學が低かつた時代だ、といふことがわかるであらう。

朝戸出のにはとこの花　散りそめて、風なつかしき夏は　來にけり

この様な歌が二三十首もあれば、税所掌侍も、歌人として相當な地位に居るものと言ふことが出來る。其にしても「大」と言ふ點に不足はあるだらう。景樹の桂園一枝の「事につき時にふれたる」といふ部類に這入るやうなものである。下句は、單純化が出來たやうで、實は單純がる桂園派の缺點なので、何となくそら〳〵しい感じがせぬでもない。かう言ふ處に詞章の第一次印象の他に、今一まはりの印象の重るものゝあるのが、感じられる。これが短歌の傳統的意義なのである。其第二のものは、作者の生活・歴史・流派などの知識が、一つの解釋の方針となつて來ることである。之を否定することは、歌の意義をある點まで放棄することになるのである。上句は此時代として何か新奇なものを求めようとして居た意欲が窺はれるが、其はあつても厭はしい氣が起らない。清醇感を失つて居らぬ訣である。

をぐるまの道や　なゝめになりぬらむ。さしかはりぬる月の影かな

この歌になると、はや一種の問題になりさうな姿態が感ぜられる。「さしかはりぬる」といふ曲

折が其なのである。調子は抒情的になつてゐるが表現は、一種の異常報告――昔の語でいふ趣向――である。小さな計畫を藏して居つて、それに驚いたやうな驚かぬやうな表情を歌詞の持つ調に波打たせて來るのである。其が多くの場合、人生に何程の事でもない、一些事といふにも及ばぬことなのだから、我々は文學の驚きに、其を据ゑて考へることは出來ぬのである。物語の中の人が車をやりながら、さうしたある時の心持ちをつぶやいたといふのなら、その敍事的な背景において、抒情的な心境を表現したものとして、おもしろく感ぜられて來るのだが、此は此だけのことゝして過ぎてゐる。我々の生活の中に、たゞさう言ふ風に驚異を發したことの報告を述べてゐるばかりだ。さうなると、報告內容の價値が問題になつて來る。時代錯誤を咎めるのではない。古典的文藝なのだから、古風の構造表情によるのは當然であるが、古典文藝の中心に、不純・低俗なものを置かうとするところに、破綻があるのである。でも此すら、明治中葉宮廷派の歌人としては、不世出の才能だと騷がれた人の、騷がれざる佳作なのである。短歌盛んなりし頃の女房と、此だけの相違があるのである。此等の歌を見ても知れるやうに、新しいものを求めてゐることは、確かにわかる。たゞ如何なるものが新しいか。其を捉へることが出來ぬのである。

新詩社の歌風

新しいことを標榜して立つた鐵幹・子規だつて、簡單に、新しい短歌は出來て居ない。世間の歌

を罵倒してゐても、おのれもまた、其時から出發しはじめたり、又は強ひて世間を近よせないやうなものを作つたりしてゐたのである。

萬葉を準據とすることを、夙く名のつた子規門下の根岸派には、女子の參加するものは、殆、なかつた。與謝野氏は、はじめ、別に、これだといふ新短歌の準據すべき古典を示さなかつた。さう言ふこと自身が既に、厭ふべき舊い態度だと考へてゐたのかも知れぬ。強ひてさう言ふものがあつたと見れば、――やゝ後になつて姿を顯して來る新古今的なものが目に立つ。或はさう言ふ立ち場を持ち乍ら、其を韜晦して居たのかも知れぬ。ともかく、當時の鐵幹の作風は決して古典に力强い據り所を持つてゐるものとは見えなかつた。虎・劍・涙・血を常用語の樣にしてゐて、一方盛んにきりすと教文學の代りに、希臘・羅馬神話などの知識を閃かして、新奇な喜びを示さうとした。其だけに、近代文藝に近いものを感じて、青年男女の歌人が、多く雜誌「明星」を中心に集つた。

與謝野さま　うたひたまへと　撥とりて、燈かげにゑみし人の名　知らず　――鳳（與謝野）晶子

まだ人の世を知らぬ母の懷子が、詠む歌でこれがあつたらうか。かう言ふ風に、ない經驗を衒ふ樣な歌が作られた。無用の媚態である。三味線とる女の媚態を胸に、そのねたさを訴へる所に、而も其を事もなげな風にうつちやつた所に、一番よくないまじめさの缺けた處がある。かう言ふ風に、輕々と歌を作り捨てる風が行はれて來た。かう言ふ一方に新詩社では、かう言ふのが、男

性的な歌として、正統らしく行はれてゐた。

われ男の子　意氣の子　名の子　劍の子。詩の子　歌の子　あゝもだえの子　――與謝野鐵幹

女歌ではないが、明星の人々の、歌のある時代の代表とも見るべきものだから、簡單な解說をすると、自分は男性としての誇りに生きてゐる。人生意氣に感ず、功名誰かまた論ぜむと言つた東洋風の意氣を守る者である。何物にもかへぬ、名譽を重んずるものである。劍にかけて高き誇りを持つものである。あゝ而も半面、何とてかく、詩にうれひ、歌にやつれ處女の爲にかくも悶ゆる情熱の子であるのだらうか。

かう言ふ風に解けば、この內容は、圓滿に受け入れられる。だがこの形式の持つてゐる粗雜性を感じないものはなからう。此少し前には、

酒をあげて　地に問ふ。誰が悲歌の友ぞ。二十萬年　この酒冷えぬ

男の子らを　南の支那にやりしかど　かひなや。つひに瀏坤一起（リュウコンイツタ）たず　――與謝野鐵幹

と言つたものを多く作つてゐた人なのである。其が次第に軟くなつて來た。さすがに、女性はさう言ふ傾向の歌の方へは向はなかつた。却て鐵幹の方から軟くなつて行つた。併し女歌になつてしまはなかつた。多くの女性の門人を指導した爲、元の意氣の子らしい方面が、磨滅して行つたのであらう。門下に、多くの女流作家はあつたが、早く歌境から遠ざかつた山川登美子と、生涯を共にした妻晶子とが、女性短歌史の上にとりあげてよい人であらう。

登美子の歌

しら玉の數珠屋町とは　いづかたぞ。中京こえて、人に問はまし

これは流れる樣な氣分に、思ふまゝに隨順して作つたものである。歌壇には、三十三年頃から名を出し、直にその才を認められた。與謝野晶子と竝び稱されたが、結婚してから一時歌は中絶してゐた。後三十七八年頃から再、時に歌を作るやうになつた。三十九年・四十年は肺結核の爲、京都に籠居してゐた。その時分の歌は、心には常に、憂ひがみちて居た。以前は才のまゝに作つた人だが、此頃になると、片方の晶子は、歌壇的に大作家として認められて居て、女ながらも、深いあきらめを腹に持つことが出來た。其だけに、歌にも焦慮がなくなつてゐる。以前には晶子よりも歌の形においては、暢達したところがあつた。其が一層憂ひを持つたのびやかさになつて來てゐる。

數珠屋町へ何しに行くのか、又單なる空想なのか、其すら此歌では問題にして居ない。それでゐて、さう言ふ種類の歌の持つ浮薄味が少しもない。町名と言ひ、其に据ゑた枕詞風の「しらたまの」といふ語が、登美子の明るい憂ひを、我々に味はせる。「中京こえて」は下京に這入つてからの意味だらう。まだこゝは上京だと考へてゐることを示すのであらう。或はまだ中京を歩いて居る場合でもかう言へぬことはあるまい。下京の數珠屋町へ行かうと思ふのだが、こゝはまだ、

上京のことである。このまゝそつとして行つて、中京をはづれたら、人に問うて見よう、と言ふつもりになつてゐるのである。さうしたことを思うて見たところで、又其を表現して見たところで、意味もないことだが、歌として專ら氣分を出さうといふことになると、そこまでのり出して言ふことにもなるわけである。道を歩き乍ら、數珠屋町をまだか〳〵と思うてゐる。その氣分が、如何にも心ゆくほど出てゐる。今一歩で浮薄になるといふ境でとまつてゐる。最初の發表は第五句「人に尋ねむ」となつてゐたやうに記憶してゐるが、改造社版の現代短歌全集山川登美子集には、本文のやうになつてゐる。「問はまし」では、少し低調になるやうである。

御輿舁く白きころもの丁たち　藁沓はきぬ。いかゞとゞめむ

四十一年の作であらう。若狹小濱に父の危篤を看とりに行つて、おのれ亦病み臥した時の歌。滑らかな調の、ことにがつしりした男性的な格調の感じのあることが感じられる。所謂白丁を著て駕輿丁とでも言ふべき姿をした者たちが、いよ〳〵最後の門出と言ふので藁沓をはきはじめた。とめたい思ひに心一ぱいだが、其人々の自由に任せておく外はないといふのである。若い登美子は、言ひ過ぎる程、語を殘さず言つたものだが、もうさうした語も惜しんで言はなくなつてゐる。

山うづめ　雪ぞふり來る。かゞり火を百千とらせて　み墓まもらむ

おなじ時の歌。興味が少し外的——と言ふよりも、敍事的な處に置かれ過ぎて居る、と言ふ氣はするが、「山うづめ雪ぞふり來る」の率直な表現が、優れてよい。そこに表現しない悲しみが、十

分に出てゐる。三四句の古典味が現實感を失ひ易い嫌ひがあるのが惜しい。

若い時の歌を一つ擧げて、よい方面・わるい方面を、同時に見るのもよからう。

地にわが影　空に愁ひの雲の影　鳩よ　いづこへ　秋の日往ぬる

地にあるものは、憂ひに沈むわが影である。空にたなびいて見えるものは、われとひとしきうれひに充ちた雲の影である。かの空へ鳩は飛んで行つた。あの鳩よ。このうれひの秋の日去つて、何處に赴かむとするのか。ほとんど口から出たところ勝負に歌つた歌である。歌の內容などに顧慮なく作つたものが一首に纏つた後、內容らしいものを持つて來た、と言ふ類の歌である。第一義の作物とゆるすことは出來ぬが、かう言ふ乘り氣が出て來る才にも、一應は注意する必要がある。尙、少し擧げておかう。

椿咲く木原　朝冴ゆ。八瀨の川。垂氷のなかに　水車鳴る

家の南　若芽發したるからたちの　高藪けぶり　鶯の鳴く

この人などは、作歌動機が中斷することなく、壽命も今すこし長かつたらと、惜しまれるのである。

晶子の歌

夜の帳に　さゝめきつきし星の今を　下界の人の鬢の　ほつれよ

歌は價値の低いものである。が、晶子の處女歌集「みだれ髪」の卷頭にも再錄せられ、解釋困難なものとして、名高くなつた歌である。作者も、後年思慮深くなつてから思ひかへして、さすがに無理の多い表現だつたことの心にかゝることが屢だつたのであらう。私の知る限りでは、再度作り替へてゐる。

夜の帳に　さゝめきあまき星の今を　下界の人の鬢の　ほつれよ

夜の帳に、さゝめきあまき星もゐむ。下界の人は、ものをこそ思へ

なる程、第三の形ならば、殘る隈なく理會が出來る。唯古い作物を訂正することは、古い愛讀者を混迷に導くので、是も非もなく否定せられることが多いが、これなどはたしかに正しい手の入れ方である。其にしても、歌はおもしろくない。だからこゝには詳しくは言はぬが、「下界の人は」で下界に星空を眺めてゐる自分並びに同樣の人々を言ふよそ〳〵しさが、とりわけ輕浮に感じられる。だが、やがて優れた素質は出て來た。

たゝかひは見じと目とづる　白塔に　西日しぐれぬ。人死ぬゆふべ

空想ではある。が、日露戰爭の頃のある日の心に起つた印象である。どうかすれば、目にちらつく戰場の無慚なあり樣。見るに堪へず、見まいとして目をつぶると、あり〳〵と現出する滿洲あたりの喇嘛の白塔。その塔の壁に當る夕日。西日がさし乍ら、時雨となつて來る景色が、まざまざと、幻影に見えて來る。あの塔の見える野では、この夕、戰ひ死ぬる人があるのだ。あゝ死な

ないで居よ、人々よ。この歌の表現では作者も戰場近くへ行つて、戰場を見おろす塔にゐるやうにも解せられる。だが其では、空想が勝ち過ぎてよくない。非戰論者と言ふのでもなかつたが、後にも「君死にたまふことなかれ」で、この趣きは吐露した。人の世の戰ひの憂はしさは、作者が此を作つた當時、それから今も、此歌に對する心は一つである。

危かる嶮岨を　君と歩む日も、丹の頰してゐし若さに　復れ

山岨の難路を通つた、あの危かつたその時すらも、わが頰から赤丹の色の消ゆることもなかつた。あの若さ。瞬く間に過ぎて、今は若き日も遙かになつてしまつたといふのである。技巧には緩みはあるが、情熱はさながらに表されてゐる。歌そのものは未整理のまゝはふり出されてゐるが、讀者は自ら之を素朴化してうけとると言つた種類の歌である。

君まさず　葛葉ひろごる家なれば一くさむらと　風の寢に來し

思ふ人は顧みなくなつて、荒れはてゝ、野草の生えひろがつた秋のあはれさ。屋敷はたゞ一叢の草藪と見て、吹きとほる風すら通りすがりに宿り行く風の宿りとなつたことよ、と言ふので、あはれの持ち方は古典的だが、さびしいあきらめの近代人には堪へ難いものがある。言はゞ今の人に對して古典の持つ悲しみを、再教養しようとしてゐるやうなものである。

戸をひけば、にこやかにして君います。四月の山の木の花のさま

ゆくりなく繰りあけた今朝の朝戸。思ひがけもなや。そこに立つていらつしやつたのは、彼の人

であつた。明るい笑まひ——。心の晴るゝ笑顔。四月の山に咲く木の花——櫻を見る如き樣子をして。

歌の傳へる驚きが、まことに意外なことであつたやうに、かうした歌の出來た動機も思ひがけないことであつたゞらう。殆、作らうといふ計畫なく口の端に上つて、すら〳〵と纏つた詞章の自由さといふものが、十分にのび〳〵と出てゐるのを見ねばならぬ。先へ〳〵と延びて行くものが、意外な領域をひらいてゆくことの見えるのが、此歌のよさである。

山の埴　海にもて來て地をつくる　八千とせかけし心に　遇ひぬ

我が思ふ人の心深さ。我を思ふかの心の懇なるには、自分は快くうち負けずには居られようか。たとへば山の土を海にもち搬び、徐々にして絶ゆることなく、地を創る力の、何千年・何萬年かけてやまぬ樣、かの人の心長さ——かの人の忍耐——我が恣な氣隨も見ゆるし、すべての缺點も認容する、寛容なる男心に遇ひたることよ。誇張を感じさせ、その誇張感を轉じて、それを敢へてせねばならぬほど、かの人の志の深さに感動したことを示すのである。これも、古典的な感激から發し、近代の官能的なものに十分觸れてゐるのである。かうしたものにも、もはや男性・女性といふ障壁をとり拂つてゐる。だがそれだけに、女流文學として短歌は、その領域を失うて、男性の文學に出て行くことになるのである。

現代の歌

女性の歌が必しも、さうした傾向を專有してゐるといふことは出來ぬが、ろまんちつくであり、せんちめんたるであるといふことが、女流文學の一つの特徴であることは、日本の短歌文學では事實であつた。だから短歌の質に、さうした立ち場を持たぬものが有力になつて來ると、女性の短歌文學は衰へて來るわけである。

新詩社が昇る旭の如く榮えてゐる間に、眞に徐々として、潛勢力を蓄へ、「明星」が四十一年百號に達すると共に解體したその時、此に替つて出現して來たのは、萬葉を準據としてゐた正岡子規の根岸派である。此が、「馬酔木（アシビ）」を經て「アララギ」になつた。さうして堅固な寫生態度に立つ理性的な文學としての短歌の新しい方向を開拓して來たのである。觀照態度――卽、客觀描寫を、寫生といふ子規傳來の語で表して、其を唱導し續けた。ろまんちつくでせんちめんたるなものは、極度に排斥せられて來たのが、明治・大正更迭期以來、昭和二十年・二十一年に到るまでの、長く久しいアララギ時代である。寫生歌の時代である。さうして今は或は、その時代が過ぎ去らうとしてゐるのかとも思はれる。だが其に替る何の光りもまだ認められない。

女性の短歌は、寫生時代にも行はれてゐた。だが其は唯、婦人が作つてゐる歌といふに過ぎない。つまり男性の歌の口うつしに過ぎなかつた。其事實は、女性が女性の文學を失つた事になるのである。

日本における唯一の女性文學であつた短歌の一面は、今は完全に男性文學の方へ併合せられたやうに見える。新詩社以外、言ひかへれば與謝野晶子以後、驚くべき才のある女流歌人の出て來て、我等の渴望を醫（イヤ）さないことは、同時に、男女兩面を持つた短歌が一面だけになつてしまつた、といふことである。

歌の話

短歌の起り

短歌は、唯今では一般に、うたといつてゐます。けれども大昔には、うたと名づくべきものが多かつたので、そのうち、一番後に出來て、一番完全になつたものが、うたといふ名をもつぱらにしたのであります。

かういふと、不思議に思ふ方があるかも知れません。あなた方の御覽の書物には、たいてい短歌の起りを、神代のすさのをの尊のお作からとしてゐるでせう。もちろんこれは、古くからのいひ傳へで、あなた方が、古代と考へてゐられる奈良朝よりも、もつと〳〵以前から、さう信じてゐたのです。だからその點において、そのお歌が、第一番のものでなくとも、何も失望する必要はありません。

短歌の出來るまでには、いろんな形をとほつてゐます。第一に、世間の人は、短い單純なものが初めで、それが擴がつて、長い複雜なものとなるといふ考へ方の、癖を持つてゐます。ところが、

昭和五年一月「歌・俳句・諺」
アルス社刊日本兒童文庫64

物質の進化の方面と、精神上のことゝは反對で、複雜なものをだん〳〵整頓して、簡單にして行く能力の出來て來ることが、文明の進んでゆくありさまであります。短歌などもそれで、日本の初めの歌から、非常な整頓が行はれ〳〵して、かういふ簡單で、思ひの深い詩の形が、出來て來たのであります。

諺と歌と

今の人の、考へることの出來ないほど古い、遠い祖先の時代には、稱へ言（ゴト）といふものがありました。それが、も少し進むと、ものがたりといふものになつて來ました。さうして、この二つながら、竝んで、行はれてゐました。その稱へ言が、今日でも、社々の神主さんたちの稱へる、祝詞（ノリト）なのであります。この二つの言葉は、元、日本古代の神樣のおつしやつた言葉として、信じられてゐたのですが、そのうち、だん〳〵その言葉のうちに、もつと押しつめた短い部分を、神樣の言葉と考へ、その外の言葉を、輕く考へて來る傾きが出來て來ました。だから稱へ言のうちにも、神のお言葉があり、ものがたりのうちにも、神のお言葉が插まれてゐるもの、と考へ出したのであります。この稱へ言のうちのある部分が、諺となり、ものがたりの肝腎な部分が、歌となつたのであります。神樣と申し上げる方は、尊くもあり、また恐ろしくもある方で、われ〳〵の祖先におつしやつた言葉は、祖先の人たちが恐れ愼しんで承り、實行しなければならない命令であり

ました。ですから、稱へ言全體が、元は命令の意味を持つてゐました。その長い命令の言葉のうちに、それを押しつめたものが出來て來たことは、既に申しました。これが、たいてい古くは、大體二つの句に、纏まるものだつたやうです。ところが、その稱へ言から變つた、ものがたりのうちのうたも、その理くつをいへば、意味がはつきりして來るとおもひます。つまり、神様の仰せに對する、お答へであります。いひ換へて見ると自分の心がわかつて頂くやうに、説明をし、お願ひをし、お詫びをするもので、根本の精神においては、この通り、私どもは服從申してをります、といふ誓ひの意味になります。

ですから諺は、命令の意義から、だん〳〵變化して、社會的の訓戒、或は人間としての心がけを説くといふ方面に、意味が變化して來ました。それと共に、時代が移ると、言葉の意味や、昔にいひ習はしたわけが、わからなくなるために、後世では、なんの理くつもわからない『いひ習はし』となつてしまつたのであります。

さて歌は、どこまでも、自分の心を詳しく、相手の心を牽くやうにいひ出すものであります。そして、低い神様、或は位置の高い人間から、神様に申し上げる言葉が、次第に、人間どうしのいひかけいひあはせる、かけあひの言葉に、利用せられて來ました。さうして、神様の言葉すらも、やはり、歌で現されることになりました。それは大方、三つの句の形になつたものらしく考へられます。

歌のいろ〳〵

この三つの句の形の歌を、後には、片歌（カタウタ）といつてゐます。これは、歌の半分といふことでなく、完全でない歌といふことであります。中には片歌を、短歌の半分といふやうに思つてゐる人もあるが、これが完全になると、旋頭歌（せんとうか）（セドウカ）とは讀みません。習慣で、せどうかといふのです。）といふ形が出來ます。

片歌は、三句から出來てゐて、一番めの句が五音、二番めの句が七音、第三の句がまた七音、といふ〻ようになつてゐるのが普通で、その音數には、多少の變化があります。これは、歌ひ延したり、縮めたりしたからでせう。

神武天皇が、大和の國のたかさじ野といふところで、後に皇后様になられた、いすけより媛（ヒメ）といふお方に、初めてお會ひなされた時、お伴のおほくめの命が、天皇様の代理で、お媛さまのところへ歩み寄つて、ものをいひに行くと、いすけより媛は、おほくめの命の目のさいてあるのに氣がつかれて、歌をうたひかけられました。目をさくとは、眦（メジリ）を、刺（トガ）のやうなもので割いて、墨を入れて、黥（イレズミ）をすることをいふ、古い言葉であります。その文句は、昔の大學者たちも、わからないと申してゐる、むつかしいもので、これからさき、あなた方のうちから、説明して下さる人が、出て來るかも知れません。

あめつゝちとりましとゝ　何故（ナド）　黥（サ）ける　利目（トメ）　（古事記中巻）

お前の目は、なぜそんなに黥がしてあるのか。

といふ以上に、確かな説明の出來た人がないのです。

これに對して、おほくめの命は答へました。

をとめに　たゞにあはむと　わが黥ける　利目

あなたのやうな美しい、若いお嬢さまに會ふために、私が黥をしておいた、この眦の黥です。

なんのために、黥することが、さうした目的に適ふのかわからないが、歌の意味はともかく、さうに違ひありません。御覽のとほり、初めの句が、四音になつてゐるが、ともかく、5・7・7といふ三つの句の形を、基礎としてゐます。これが、われ〳〵で知れる限りの、歌の古い形で、このやうに五音でなく、四音であるのと反對に、五音・七音であるところを、音數を多くしたものもあります。現に、この歌と同樣に、おほくめの命と神武天皇とのかけあひに謠はれたといふ歌が、それであります。

やまとの　たかさじ野（ス）を、なゝ行く、をとめども。たれをしまかむ　（おほくめの命）

かつ〳〵も、いやさき立てる　長（エ）をしまかむ　（神武天皇）

この大和のたかさじ野を、七人通るをとめたち、そのうちの誰を、お后（キサキ）になさいますか。

ちつとばかり先になつてゐる、あの年長者を、后にしよう。

この二つの歌について見ると、片方は、4・6・4・5・7といふへんな形になつてゐるが、大體、短歌の5・7・5・7・7といふのと、句の數も似てゐます。それでは、これが短歌かといふと、第一、片歌の約束に叛きます。片歌は、片歌どうし合せるもので、けつして、短歌と一組みにはなりません。さうすると、おほくめの命の歌も、片歌の音數を增して、早く謠はれたものとおもふ外はありません。最初の一句は、『やまとのたかさじ野を』の十音から出來てゐます。二番めの句は、『なゝ行くをとめども』の九音が、七音の句の長さで謠はれた、といふことが考へられます。さうして見ると、この時、二對の片歌の、かけあひがあつたのです。けれども、うつかり見るとそのうちに、短歌の古い形のやうなものが、混つてゐるやうにも見えます。かういふ音數の多い片歌も、三句から出來てゐるのだといふことを忘れて、五句になつたところからも、短歌は、出來て來るのであります。だから、この長い片歌は、短歌の歷史の上から、疎かに出來ない材料であります。

やまとたけるの尊のこと。竝びに旋頭歌

おなじやうな片歌の話が、やまとたけるの尊にもあります。この尊が東國平定の時、甲斐の國酒折（サカヲリ）の宮（ミヤ）に宿られて、火を燃してゐた翁に、いひかけられました。

にひはり　つくばを過ぎて　いく夜か　寢つる　（古事記中巻）

あの新治の近邊の筑波をとほり過ぎて、今夜で幾晩寢て來たとおもふ、といはれたのです。

かゝなへて、夜には　こゝの夜。晝には　とをかを

指折り屈めて勘定して、今晩は、夜で申せば、九晩。晝で申せば、十日を經過いたしましたことよ。かういふお答へをしたのです。

これは、前の神武天皇樣方の御歌よりも、もつと名高く、傳はつてゐます。それは、この二つの片歌を連歌（れんが）といふものゝ初めだ、と信じてゐるからであります。ところが、さういふふうに考へるのなら、もつと時代の古い、神武天皇頃の片歌問答の方が、連歌の初まりだ、といつてよいわけではありませんか。まづ、日本の歌においては、長い形のものがたりから、次第に變化して、長歌（ながうた）といふものが出來て來た一方に、そのうちえきすとも、えつせんすともいつてよい片歌が、二つ合さつて、旋頭歌といふものに發達して行くと同時に、片歌自身が、短歌を作り上げるやうに、次第に、音の數を增し、內容が複雜になつてきました。私の話は、短歌のみならず、日本の歌の大凡に亙つて、知識をお附けしたいと思ふのですから、こんなことから、初めたわけです。それで一口だけ、旋頭歌について申しませう。この歌の形は、つまり、前の問答の歌を一つにすれば、それなのです。萬葉集から例をひいて見ると、

新室を蹈み鎭む子が　手玉鳴らすも。
玉の如　照りたる君を、內にと　まをせ　（卷十一、二三五二）

新築の家を蹈んで、屋敷のわるい魂を鎭め舞ふ女の子が、手に捲きつけた玉を、今鳴らしてゐることよ。その玉のやうに、輝いていらつしやる美しいお客樣を、どうぞ內らへ、と御案內申し上げてくれ。

このとほり、三番めの句で、かつきりと切れて、四番めの句から、新しく、同じ形をくり返してゐます。それで、頭の句に旋る歌といふ意味で、旋頭歌と名づけられたのでありました。中には旋頭歌がまだ片歌の一組であつた時の姿を、殘してゐるものすらあります。やはり萬葉集の、

水門の葦の末葉を　誰か　た折りし。
わが夫が振る手を見むと　われぞ　た折りし　（卷二、一二八八）

川口の、葦のたくさん生えてゐる、その葦の先の葉が、みんな折れてゐる。これは、誰が折つたのかと申しますと、それは、私です。私の夫なるあなたの、私を見つけてあひづに振つていらつしやるお袖を、よく見ようと考へて、私が折つたのです。

これなどは、一首のうちに、自問自答のやうに、歌つてあります。

すさのをの尊の短歌

やくもたつ　いづもやへがき。つまごめに　八重垣つくる。その八重垣を　（古事記上卷）

この名高い、すさのをの尊のお歌は、實は、よく意味がわからないのです。でも普通はかう說明

してゐます。

幾すぢもの雲が、どん〳〵と騰(ノボ)つてゐる。その現れてゐる雲の廻つて作つた、幾重の垣のやうな雲。私の妻を中に入れるために、幾重もの垣を作つてゐる、その幾重もの垣よ。これがわれ〳〵の結婚を祝ふ自然のしるしである。

細かいところになると、昔から多少、別々の意見はあつても、大體かういふゝうに、意見が一致してゐます。ところが、私にいはせると、意味が大ぶん違つて來ます。

出雲人の作つた、幾重にも取り廻す、屏風・張(トバリ)の類よ。われ〳〵、新しく結婚したものを包むために、幾重の圍ひを作つてあることよ。あゝ、その幾重の屏風・張よ。

このやくもたつといふ言葉が、歌の上でいふ枕詞(マクラコトバ)なのです。すなはちこの場合は、いづもといふ言葉を起すための、据ゑことばなのです。枕詞は、元の意味のわかるのもあり、わからないのもありますが、わかるのは、大體に、新しいものゝやうです。このやくもたつなども、古い書物の説明にさへ、幾すぢもの雲が立ち圍んだところから、いはれたものとしてゐます。けれども、それはいけないので、ほかに、いづもといふ言葉と、特別の關係があつたに違ひありません。これは結婚に先立つて、新しい家を建てる、その新築の室(ムロ)の讃め言葉で、同時に、新婚者の幸福を祈る意味の言葉なのです。それはともかくとして、この歌は、あなた方がお讀みになつても、大體わかるほど、意味がよく通じます。ところが、このお歌よりも、遙かに新しい時代のたくさ

んな歌が、けつしてあなた方ばかりでなく、大人の、しかも專門の學者たちにさへも、わからないものが多いのです。ちよつと考へても、時代が新しくなるほど、歌がわからなくなるといふやうな、不自然な事實を、あなた方はまともに、うけ入れますか。だからこの歌は、遙かに後世、短歌が盛んになつて後、行はれ出して、その作つた人もわからなくなり、また、非常に重々しい力のあるものと信じられた時代に、こんな歌だから神代の神様で、ことに出雲に關係深い、名高いお方のお作だ、と信じられたものに違ひはなからう、と考へてゐます。

大昔の歌には、この歌に限らず、歷史では傳へてゐても、作つた人は別であり、時代も違つてゐると見ねばならないものが、だん〳〵あるのです。

私はこのお歌が、神武天皇のお歌だといふ片歌(カタウタ)よりも、古いものだとは、或はもつたいないかも知れないが、信じるわけにはまゐりません。短歌の形といふものは、もつと〳〵、遲れて出來たもので、すさのをの尊はもちろん、神武天皇も、やまとたける(ヤマトタケル)の尊も、御存じにならなかつたに違ひないと考へてゐるのです。

景色を詠んだ歌

狹葦川(サキカハ)よ雲立ちわたり　うねひやま(ウネヒヤマ)　木の葉さやぎぬ。風吹かむとす　（古事記中卷）

さゐ川から、雲がずつと立ち續いて、この畝傍山(ウネヒヤマ)、その山の木の葉が、騷いでゐる。今、風

が吹かうとしてゐるのだ。

畝傍山。畫は雲と居（キ）、ゆふされば風吹かむとぞ　木の葉さやげる　（同）

畝傍山。それには、山の木の葉が、畫は、雲がかゝつてゐるやうに、ぢつと靜まつてゐて、日暮れが來ると、風が吹き出すといふので、その木の葉が騷いでゐる。

この二首の歌は、疑ひもなく、景色を詠んだ歌であります。畝傍山附近の、小さな範圍の自然を歌つた、いはゆる敍景詩といふものであります。ところが、この歌を讀んだゞけで、別の氣持ちが浮びませんか。それはなんだか、この歌のうちに、違つた氣持ちが隱されてゐる、といふ氣分の起ることであります。歌の表面は一種の譬（タト）へで、何か別のことがいつてあるのだらうといふ心持ちが、起りませんか。きつと起るとおもひます。それで昔の人も、このたゞ敍景の歌に過ぎない、二種の歌に對し、かういふ傳へを語つてゐました。

神武天皇がおかくれになつて後、先に申したいすけより媛が、自分のお生みになつた三人の皇子達を、殺さうとするものゝあることを、むきだしにいふことは出來ないから、かういふゝうに仄めかして諭されたのだ、と古事記といふ書物にさへ傳へてゐます。日本の古代の人々は、かういふゝうに、一首の歌についても、何か神の心或は、諭しが含まれてゐるのだ、といふ考へ癖を持つてゐました。その習慣が、久しく續いて來て、ごく近代に及んでゐます。だから偶然起つて來た、一つゞきの歌の文句にも、たゞ歌の表面の意味以外に、何か變つた內容がありさうな感じを

持つたのであります。

この歌は別ですが、多くさうしたふうにどこからともなく、風の吹き起るやうにはやつて來る歌を、不思議な氣持ちで、びく〳〵しながら、耳を立てゝ聞いてゐました。さうしてさういふ種類の歌を、一般に、わざうたと申しました。字では、童謠とあて字をします。が、ほんたうの意味は、神の意志の現れた歌、といふことらしいのです。たゞ多く子どもたちが、さういふ歌を、無心で謠ひ擴げて行くところから、あて字をしたのであります。

この二首の歌も、恐らく、いすけより媛のお歌でも、お作でもなく、またさうした惡人が、騷動を起さうとしてゐる、注意をなさい、といつた意味のものでもありますまい。それにしても、こんなに古い時代に、このやうな敍景の歌が、歌はれるわけはないのです。その證據は、これから以後、ずつと遙かな後まで、ほんたうに景色を詠んだ歌といふものが、出て來ないのであります。いくらか、さうしたものゝ見えるのは、或時仁德天皇が、吉備（キビ）のくろ媛といふ人を訪問せられたところが、青菜（アヲナ）を摘んでゐたのを見て作られたといふお歌であります。

山縣（ヤマガタ）に蒔ける青菜も、吉備びとゝ　共にし摘めば、たぬしくもあるか　（古事記下卷）

天子の御料の、畑のある山里に蒔いた青菜も、そこの吉備の國人と、二人で摘んでゐると、氣がはれ〳〵とすることよ、といふ意味のことをいはれたのです。

これなどは、まづ自然のものに對して、緻密に觀察をしたものゝ、書物に出た初めといつてよか

らうとおもひます。山がたといひ出して、土地の様子からその性質を述べて、そこに青々と芽を出した野菜の色を、印象深くつかんで、示してゐます。それ以前の歌は、皆表面は景色を詠んだやうに見えても、ほんたうに味つて見ると、たゞのうはつゝらだけのところで、實際景色を見据ゑたものだ、といふことが出來ません。

かういふゝうに、ごくわづかづゝ、自然に對する見方が据つて來ました。そして、ほんたうの敍景詩といふものが出來上るのは、奈良朝に近くなつてからのことであります。或は、もつと精確にいふと、奈良朝になつてからといはなければならないかも知れません。それにも拘らず、神武天皇の時分に、ちやんとあゝいふ調つた、景色の歌があるといふことは、どうしても、不自然なやうに考へられます。だから初めの二首のお歌も、實は後世のもので、なんだか、へんな暗示を感じさせるところからして、しぜん、畝傍山・さゐ川――さゐ川は、いすけより媛のお家のあつた所――などいふ地名から、歴史上の事實に結びつけて、考へられたものだとおもひます。

旅行の歌

それではどうして、景色を詠む歌が生れて來たかといふと、それはわれ〳〵の祖先が、よく旅行をしたからです。或は、旅行をした時と同じ心持ちで、歌を作る場合があつたからです。旅行をした先で、いつも新しく小屋がけをして、それに宿りました。さうしてかならず、その小屋をほ

め讃へる歌を詠んで、宴會を開きました。これを、新室の宴（ニヒムロ　ウタゲ）といひます。その習慣は、旅行をしないでも、一年のうちに、かならず一回以上は、自分の村にゐて行うたものでした。毎年、田の穫り入れがすむと、やはり家を作りかへ、或は屋根を葺き替へたりして、おなじく、新室のうたげを行ひました。かういふ場合にはかならず、建て物の内外にある物を、目に觸れるに從つて詠み出して、それが最後に、一つの喜びの氣持ちに纏まる、といふゝうな作り方になつてゐました。譬へば、萬葉集にある皇極天皇のお歌として、傳はつてゐるものがそれです。

我が夫子（セコ）は假廬（カリホ）作らす。かやなくば、小松が下のかやを刈らさね　（卷一、一一）

私の大事の方（カタ）は、假り小屋を作つていらつしやる。がどうも、葺き草がないので、困つてゐられるやうだ。そんなにかやがないならば、向うに見える、あの小松の茂つてゐる、その下のかやをば、お刈りなさいな。

これなどはいかにも、旅行中の新室の宴らしく、明るくてゆつたりとした、よいお歌であります。現在かやが、向うに生えてゐる、と教へてゐられるのではありません。尠くとも、さうして落ちついて宴會を開く數時間前までは、皆で苦勞して、かやを刈り集めてゐたのです。その勞力を思ひ出してのお歌なのですが、その席上にゐる人は、皆この經驗をつい今の先にしたのですから、このお歌を、きつと、自分自身の氣持ちを、詠んで貰つたやうな、愉快な氣がしたに違ひありません。家のうちにゐて、その内外の様子を詠むといふところから景色の歌が生れて來るのであり

ます。それが次第に進んで、旅行中の歌にはほんたうに自然を詠みこなした立派なものが、萬葉集になると、だん〳〵出て來てゐます。

いそのさき漕ぎ廻(タ)み行けば、あふみの海、八十(ヤソ)のみなとにたづさはに鳴く　（卷三、二七三）

岩はなをば、こぎ廻つて行くごとに、そこに一つづゝ展(ヒラ)けて來る、近江の湖水のうちのたくさんの川口。そこに鶴が多く鳴き立てゝゐる。

八十の湊といふのは、ひよつとすると、土地の名前で、今の野洲川(ヤスカハ)の川口をいつたのかも知れません。さうすると、歌の意味が、しぜん變つて來ます。がどちらにしても、いかにも鶴の啼いてゐることが、生き〳〵と寫されてゐます。これが、まだ奈良朝になつたかならない前の歌なのです。高市黒人(タケチノクロヒト)といふ人の作つたものであります。この人は、日本の敍景の歌の、まづはじめての名人といつてもさし支へのない人で、この後は次第に、かうした方面にすぐれた人が出て來ます。山部赤人(ヤマベノアカヒト)なども、この黒人に似せて作つたと思はれるものがあります。譬へば、

和歌の浦に潮みち來れば、潟をなみ、葦べをさして鶴(タヅ)鳴きわたる　（卷六、九一九）

和歌の浦に潮がさして來ると、遠淺の海の干潟がなくなるために、ずつと海岸近くに葦の生えてゐるところをめがけて、鶴が鳴いて渡つて來る。

これは、赤人の名高い和歌の浦の歌ですが、黒人に、既にそのお手本があります。

さくら田へ鶴鳴き渡る。あゆち潟。潮干にけらし。たづ鳴き渡る　（卷三、二七一）

さくらといふところの、田の作つてあるところへ、鶴が鳴いて渡つて行く。その手前にあるあゆち潟。そこは潮が退いてゐるに違ひない。それであゝいふゝうに、鶴が鳴き渡つて行くのだ。

どちらも今日から見ると、少しおもしろみが勝ち過ぎました。趣向を凝(コラ)してゐるところが露骨に見えるが、赤人の方は、よく讀み返して見ると、いかにもごた〳〵してゐるでせう。殊に、二番めの句、三番めの句に、注意なさい。おなじく趣向を凝したところはあつても、さくら田への方は、いかにもすつきりと、頭に響くやうに出來てゐます。これはやはり、親と子と、師匠と弟子と、先輩と後輩とゝいふほどの違ひが現れてゐるのであります。でも、この赤人といふ人は、かういふ傾向の景色を詠む歌ひてを亡くして、だん〳〵自分の進むべき領分を見出して行きました。そしてつひには、日本の歌が、赤人の風のものになる時期を、待ち屆けたのでありました。そのことをお話するのには、今一人、赤人の先輩とも、先生ともいはなければならない、柿本人麻呂(カキノモトノヒトマロ)のことを申さねばなりません。

日本短歌の第一人者、柿本人麻呂

今度のお話では、短歌と竝び稱せられてゐる長歌のことは、省きたいとおもひます。がこれは、大體前のところで述べてある物語の歌から、變化して來たものと見てさし支へありません。

柿本人麻呂は、平安朝の末になると、神様として、祀られる程の尊敬をうけるやうになりました。それは、短歌の上の成績によつてゞありますが、人麻呂が生きてゐた時分、或はその後、久しく人麻呂の評判の高かつたのは、この長歌を作る力が非常にあつた點でありました。だがそれと共に、人麻呂が短歌にすぐれてゐたといふことも、誰も疑ふものもなく、更に私などからいふと、長歌よりは寧、短歌の方で、立派なものをたくさん殘してゐます。が、この人の功勞は、それには限りません。實のところは、人麻呂が出て、短歌といふものが、非常に盛んになつたのであります。人麻呂の歌を見ると、なるほど天才といふものはえらいものだといふ心持ちが、つく〴〵します。あなた方にも、たゞ昔からのいひ傳へだからといふ以上に、ほんたうに、人麻呂のねうちを知つてほしいと思ふのです。

實のところ人麻呂が出るまでは、短歌は、まだ海のものとも山のものともきまらないありさまでありました。この人が短歌といふ形を、はじめて獨立さしたものと見て、まづさし支へはないと考へます。あんまりえらい人だつたので、人麻呂が死ぬとまもなく、いゝ歌であれば人麻呂の歌だ、と考へるやうにさへなつて、今日殘つてゐる萬葉集の人麻呂の歌といはれてゐるものにも、どこまで、ほんたうに當人の作物か、判斷のつかぬところがあります。それと共に、人麻呂の歌だと傳へられてゐないもので、人のために代つて作つた、この人の歌も非常にたくさんあるやうにおもひます。こゝには大體、まづ人麻呂に違ひないと信じられてゐる歌によつて、少し申しま

せう。

あらたへの　ふぢえが浦に鱸釣る海人とか見らむ。旅行くわれを　（卷三、二五二）

あまさかる　鄙の長道ゆ　戀ひ來れば、明石の門より、大和しま見ゆ　（同、二五五）

外にも、とほつてゐる舟がある。自分も舟に乘つて、旅をしてゐる。あゝして、向うをとほつてゐる舟から見れば、われ〳〵をばこの藤江の浦で、鱸釣りをしてゐる海人の村人と見てゐるだらうよ。この旅行をしてゐる私であるのに。

こゝのあらたへのといふのは、やはり枕詞です。たへは著物といふことで、手觸りの粗いものが、あらたへなのです。さうした著物は、山の藤の纖維で織つたものが多かつたので、藤江のふぢを起すために、あらたへのといふ言葉を、据ゑたのであります。次の歌、

われ〳〵は、遠い都を離れた地方の長い距離をば、焦れてやつて來た。そして、今この時に氣がつくと、この明石の海峽から内らに、畿内の山々が見えてゐる。

あまさかるは、やはり枕詞で、ひなのひといふ語を起してゐます。意味は、天に遠くかゝつてゐる日といふことなんです。それから、ひなといふ言葉には、意味の上では無關係で、たゞ音の上に、續けて來たのであります。

やまとしまといふのは、天皇の御領地、或は自分の親しい國のことを、しまといつた時代に、やまとの國或は、畿内の國をさして、やまとしまといつたのです。けつして、海中の島をさしたの

ではありません。

かういつて來ると、歌が非常に、おもしろくなく聞えるかも知れませんが、一度この意味を頭に入れて、その後度々讀み返して見て下さい。さうすると、自然に訣つて來るでせう。譬へば、こんな歌になると、さうしなければ、けつして味ひを知ることが出來ません。

印南野も、行き過ぎかてにおもへれば、心戀しき加古の島見ゆ　（卷三、二五三）

なんだかはじめての方には、外國語でも聞いてゐる感じがするかも知れません。印南野といふのは、播州の海岸に廣く亙つた地名で、加古川を中心として、印南郡・加古郡に擴がつてゐます。そして、歷史上名高いところとなつてゐます。この歌では、人麻呂が都から西へ下つたのか、それとも遠い國から都へ戻つて來たのか、その事情がわかりませんが、この歌を考へる上には、別にさし支へはありません。私はまづ、遠い國へ行く時のものとして見ておきませう。

だん〳〵とほり過ぎて行く。どこも皆なごり惜しいが、今とほつてゐる播州の海岸の印南野も、とほりすぎきれないほどになつかしく思つてゐると、ちやうど向ふの方に、なんだか、近よつて行きたい心を起させる、加古川の口の、加古の島が見えてゐる、といふ意味です。この人の歌は名高かつたので、歌によつて、いろ〳〵に文句が變つて傳はつてゐます。この歌にも、五番めの句が、『かこのみなと見ゆ』といふゝうに書いた本もありました。そしてその方が、歌としては遙かに勝れてゐると考へます。

沖を通つてゐて、印南野の草原を、遙かに見てゐる。そのうちに、遠く加古川の川口が見えて來た。あの川口は、知つてゐるんだ。なつかしい舟泊りのあるところだ。

心細い氣持ちで眺めてゐるのです。さあこれで、も一度、讀み返して下さい。

こんな歌をあげて來ると、人麻呂といふ人は、かなしい歌ばかり詠んでゐた人のやうですが、なかなかどうして、どつしりとした強い歌を、たくさん殘してゐます。寧、この方が得意であつたのかも知れません。

おほきみは神にしませば、あまぐもの　雷が上にいほりせるかも　（同、二三五）

この歌は、持統天皇が雷の岳――また、神岳ともいふ。――へ行幸なされた時に、お伴をした人麻呂が奉つたものなのです。

天皇は、神樣でいらつしやる。それでこそ普通ならば、空の雲の中で鳴つてゐる雷、その雷であるところの山の上に、小屋がけをして、お泊りになつてゐることよ。えらい御威勢だ。

かういふゝうに、天皇を讃美してゐます。この人の歌は、自然物を寫す場合にも、自分の感情を述べる抒情詩といふものゝ場合にも、實に見事に出來てゐるので、どちらがよいといひ切ることは出來ませんが、世間では、人麻呂は感情をうたふのに達してゐた人だ、といふことにしてゐます。私はさうも思はないが、先に申した黑人と較べて話すのに便利なため、まづ普通の考へを採用しておきませう。

山部赤人

この二人の先輩の歌を手本にして、だん〳〵自分の本領を出して來たのが、先に述べた山部赤人なのです。この人の歌では、特別に名高いものとして、

み吉野の象山の際の木ぬれには、こゝだも　さわぐ鳥のこゑかも　（卷六、九二四）

ぬばたまの　夜のふけ行けば、楸生ふる清き川原に、千鳥頻鳴く　（同、九二五）

これなどは人も認め、また實際にねうちもあるものです。

一體文學などいふものは、一人がよいといひだすと、いつまでもその批評が續くもので、誰も彼も、前の人の言葉から離れて考へることのできないものであつて、存外つまらないものでも、昔の人が讃めたのだからといふので、安心してよいものだと思つてゐることがたび〳〵あります。赤人で例をとつて見ると、先の、

和歌の浦に潮みち來れば、潟をなみ、葦べをさして鶴鳴きわたる　（卷六、九一九）

のやうなもので、これがよいと思ふやうでは、あなた方の、文學を味ふ力が足らないのだと反省して貰はねばなりません。他人がよいといふからよいと思ふのは、正直でよいことですが、さういふのを中國の人はうまくいひました。それは、耳食といふ言葉で、人がおいしいといふのを聞くとおいしいと思ふのは、口で食べるのではなくて、耳で食べるのだ。見識がないといふ意味に

使つてゐます。書物はたくさん讀まなくても、耳食の人にならない用心が必要です。歌を解釋して見ると、

吉野川の傍にある象山の山のま、すなはち空に接してゐるところの梢を見上げると、そこには、ひどくたくさん集つて、鳴いてゐる鳥の聲、それが聞える。

これなどは、高い山の上を見つめて歌つてゐるので、口から出放題に作つたものでは、けつして、かうはうまくはゆきません。つぎのは、

ぬばたまのは、黑いものゝ枕詞。それで、夜にも關係があります。

夜がだん〳〵更けて來ると、晝見ておいたあのきさゝげの木のたくさん生えてゐる、そして、景色のさつぱりしてゐたあの川原に、今この深夜に、千鳥がしつきりなく鳴いてゐる。

これも夜靜かに室のうちに籠つて、耳を澄し、眼には、その鳥の鳴いてゐる場合の光景を明らかに浮べてゐるのであります。こんな歌になると、赤人は、人麻呂にも黑人にも負けることはありません。ところが、だん〳〵變化していつたと見えて、世間から騷がれてゐるかういふ歌を作つてゐます。

文學のねらひどころ

春の野に　すみれ摘みにと來し我ぞ。野をなつかしみ、一夜寢にける　（卷八、一四二四）

あすよりは　春菜摘まむと標めし野に、きのふも　今日も　雪は降りつゝ　（同、一四二七）

かういふ歌が、先にいつたとほり、後世持てはやされて、これを學ぶ人が多かつたのであります。後の歌からいひませう。

二三日前に、私はかういふ計畫をした。あしたからは、こゝで春の若菜を摘まうと自分の場所だと繩張りをしておいたこの野に、いよ／＼摘まうと思つて、朝出て見ると、雪が降つてゐる。きのふも、降り／＼してゐた。今日も、降り／＼してゐる。

ちよつとおもしろいとおもふでせう。そのおもしろいと思ふ心が、文學から緣遠いものなのです。この歌の興味は、ごく際どい工夫にあるので、若菜を摘まうとしてゐた心に、自然が適つてくれないといふことを、自分勝手に、つがふよく作り直したものであります。或はさういふゝうな趣向で作れば、人がおもしろがると考へて作つてゐる痕が、あり／＼と見えてゐます。でもこの歌などは、まだよろしい。はじめの歌などになると、とてもいけません。

ゆふべ、實はこの春の野へ、れんげ草を摘みにと思つて來た、その自分が、あんまり野のなつかしさに、家へも歸らないで、つい／＼、そこで一晩寢て暮した、といふ意味です。

この頃のすみれは、今のれんげ草、もつと普通に、げんげといつてゐる花で、あの紫のすみれではありません。

そんなことはさておいて、この歌の考へてゐるところは、ほんたうのことではありません。あな

た方のうちには、すでに風流といふ言葉を御存じな方がありませう。かういふのが、風流な歌といふのであります。

けれども實際、われ／＼の生活とは關係のないことを歌つてゐるので、文學者だから、普通の人とは違つた考へをしなければならないと思つて作つたものです。ほんたうにげんげを摘みに來て、野に寢る人がありませうか。狐にでもつまゝれなければ、さういふことをするはずがありません。かういふのがよいと考へるのは、實際の生活から離れたところに、文學があるのだとする考へで、もう今の人とは關係のない、優美といふ趣味であります。だからこの歌は、全然嘘の歌だといはねばなりません。かうした嘘を重ね／＼して來た日本の歌が、だん／＼悪くなつて來るのは、もちろんのことであります。で先にいつた平安朝の古今集の一番お手本になつたのは、赤人のかういふゝうのもので、そのために歌は、次第に空想的になり、實際を離れ、それとゝもに悪くなつて來ました。文學といふものは、われ／＼の實際の生活から離れたものが、よいのではありません。

萬葉集には、まだ／＼上手な人が、たくさんにゐます。だが日本の歌の歷史は、とても私のために與へられた紙數では書き盡すことは出來ないので、このへんで切り上げて、つぎの時代に移ります。

古今集頃の歌

つぎに名高い歌の書物は、萬葉集が書物になつて後、百年以上經つてから出た、古今集といふ歌集であります。これは御存じの醍醐天皇の御代に出來たもので、普通、天子の仰せでつくつた歌集の第一番のものだといふことになつてゐます。かうした歌集を勅撰集といひます。勅撰集の第一のものであるために、古今集の歌が、それ以後の歌の動かすべからざる手本となつてしまひました。

この古今集を見ると、不思議なことには、古今集の出來た當時に生きてゐた人の歌は、たいていよくなくて、死んで久しくなつて、名さへ傳はらない人の歌、或は宮中でのお祭りに傳へられてゐた歌などが、とびぬけて勝れてゐます。それは一たいどういふわけでせうか。つまり古今集の時分には、歌はかういふものだと小さな標準をきめてかゝつて、それにあてはまるものを集めたから、規模の小さい、方向を誤つたものが、多く出たわけであります。

古今集を撰んだ人は四人あるが、そのうちもつとも名高いのは、あの紀貫之といふ人であります。この人は、さういふ歌を詠むことが上手だつたけれども、本式の文學らしいものを作ることは、ほとんど出來ませんでした。さうして見ると、やはり下手といふより爲方がありません。

一、近江より朝たち來れば、うねの野にたづぞ鳴くなる。明けぬ。この夜は（卷二十、一〇七一）

二、まがねふく吉備の中山。おびにせる、細谷川の音のさやけさ　（同、一〇八二）

三、みさぶらひ。み笠と申せ。宮城野の木の下露は、雨にまされり　（同、一〇九一）

（一）朝（只今の朝の意味とは少し違つてゐます。まだ夜のあけない時分をいふのです。）立つて、近江の國をばやつて來ると、このうねの野に、鶴が鳴いてゐることだ。あゝ明けた。この夜は。

いかにも暗い夜の、朝に代つた喜びが、『あけぬこの夜は』といふ簡單な句のうちに、漲つてゐるではありませんか。そして暗がりから明るくなつて來て、今まで歩いてゐた道のほとりに、鶴の寢泊りしてゐた沼地のやうなものゝあつたことに、氣のついた樣子が、明らかに感ぜられます。ほとんど、なんのやかましい思想も強い感情もないが、明るい、にこ〳〵した氣持ちが、われわれを心の底からゆすり立てるやうに感じないでせうか。

（二）（まがねふくは、枕詞。）吉備の國の中山——美作にある——よ。それが腰にひきまはしにしてゐる、細谷川の音の澄んで聞えることよ。

あなた方は、この歌を見ると、內容がからつぽだと感じるかも知れません。しかしさういふゝうに早合點してしまふやうでは、日本の歌はわかりません。日本の歌には、意味や思想から離れて、また特別のねうちを持つたものさへあるのです。そしてその代表的なものがこの歌です。まづ第一に、調子の高いことを感じるでせう。のびやかで、ひつぱり上げるやうな調子が、ある點まで

行つて、ぴつたりと落ちつきよく納まつてゐるではありませんか。

かういつても、あなた方が考へて見てくれなければわからないことだが、幾度もくり返して讀んで貰ひたく思ひます。意味からいへば、川の音がよいといふだけのことです。そして吉備の中山が帶にしてゐるといふやうなことは、別に珍しくもなんともないのであるにも拘らず、われ〳〵はそれに對して、朗らかな氣持ちを受けずにゐられません。この歌は、萬葉集にも似たものがあつて、

おほきみの御笠の山の帶にせる、細谷川の音のさやけさ　（萬葉集卷七、一一〇二）

となつてゐます。だが私は、前の方が好いとおもひます。なぜなれば、『おほきみの御笠の山』といふところに、人の頭が、もつれを感じます。純粹に單純にすつきりとはいつて來ないのです。まがねふくは、鐵を吹きわけるといふ元の意味を忘れてゐて、こゝでは、單に吉備を起すための枕詞にすぎません。こんな單純なうちに、われ〳〵の心を豐かにする文學の味ひが、歌にはあるのです。かういふ味ひは、祖先以來與へられてゐる大事なものだから、それを失はないやうにするのが、われ〳〵の務めといふよりも、われ〳〵の喜びと感じなくてはなりません。

三番めになると大ぶん複雜で、

（三）　お附きの人よ。お笠であると申し上げい。この宮城野の木の上からふり落ちる露は雨

以上である。

これは、自分の大事に思つてゐる人に對する篤い心の現れで、何もわざ〳〵お附きの人を呼んでいつてゐるのではなく、かりにさうしたありさまを、胸に浮べたゞけです。獵に出かけた人が、露に濡れてお出でになるだらう。お附きの人が、お笠をさし上げてくれゝばよいのにと感じてゐるのを、直接いひかけたやうに、詠んだのであります。

この歌になると、あなた方にもおもしろみがわかりませう。だがなほこの歌について、注意せねばならぬのは、みさぶらひのみ、みかさのみ、みやぎののみが重なつてゐる點であります。もつといふと、みの音と關係の深いま行音の、まをせ・まさるのまがあります。これを頭韻（トウヰン）といつて、日本の歌では、豫め計畫してかういふことをするのは尠いが、偶然こんな形の出來ることがあります。この歌の快い調子も、似た音の重なつてゐるところから來てゐるのであります。けれどもこれは、始終くり返されると、あき〳〵するものだといふことを考へなければなりません。

その外に、まう二三首、古今集から勝れた歌やら、變つた歌を附け加へておきませう。

在原業平

平安朝のたくさんの歌人のうち、ことに名高く、また實際ねうちもあつた人の一人は、在原業平（アリハラノナリヒラ）といふ人であります。この人の歌は、大人でなければわからない氣持ちをあまり詠みすぎてゐるので、今度は説明をすることは出來ないが、一例をあげると、自分の親しくつきあつてゐた人が、

行くことも出來ぬところに隱れてしまつて後、その人のゐた家を訪問して一人悲しんだ名高い歌があります。

月やあらぬ。春や昔の春ならぬ。わが身ひとつは、もとの身にして　（古今集卷十五、七四七）

ちよつと見たゞけでは、わかつたやうでわからぬ歌です。同じやうな句が重なつてゐると、自然片一方の方は、一部分略する習慣があります。この一句・二句は、『月や昔の月にあらぬ。春や昔の春ならぬ。』といふのがほんたうなのです。歌でなく普通の文章なら、さう書かねばとほりません。それをかういふゝうにして、意味を表す間に、外れ易い氣分を保存しようとするのが、歌の上の工夫であります。工夫でなくとも、自然にその作者の心が燃え立つてゐると、かういふゝうにつがふのよい氣分風な現し方が、口をついて出て來るのであります。

春は昔の春ではないか。月は昔の月ではないか。月も春も、昔のまゝのものである。自然はさうして變らないでゐるに拘らず、自分の身だけは元のまゝにして、さうして……

と後は誰にも感ぜられることだから、いひ盡さなかつたのです。これはわざといひ盡さなかつたといふより、いひ盡したゞけでは滿足出來なかつたので、かういふ尻切れとんぼのやうになつてゐるのですが、かへつて讀む人の心に、深い印象と聯想とを起させるものなのです。つまりこの後へ來る言葉を補へば、私の知りあひの人は元の身ではない、といふ言葉にすぎません。さうした言葉を入れるのと、讀む人の氣持ちに任せるのと、どちらが好いと思ひますか。

私はこの歌が譬へば百點の歌だといふ程には、讃める氣にはなりません。が尠くとも、平安朝の短歌のうちでは勝れたものであるといふことだけはいひたいとおもひます。いかにもねばり强い、あきらめにくい悲しみの心が、ものゝ纏ひついたやうに、くね〳〵した調子に現れてゐるのが感じられませう。かういふ歌が、この後また、一つのお手本となつて來るのであります。しかしながら、完全にこの手本をまねおほせ或はのり越したといふものは、さうありませんでした。

ついでに、秋の歌のうちから、二首ぬいておきませう。

作者のわからぬ歌に、よい物のあること

蜩（ヒグラシ）の鳴きつるなべに、日は暮れぬ。とおもふは、山のかげにぞありける　（同卷四、二〇四）

木のまより漏り來る月の　かげ見れば、心づくしの秋は　來にけり　（同、一八四）

これは二首ながら、よみ人知らずといつて、作つた人のわからない歌となつてゐます。ところが、先にもいつたとほり、古今集のよみ人知らずの歌のうち、勝れたものが多いので、これなどはどこへ出しても恥かしくない立派な歌であります。

蜩が鳴いたと共に、日は暮れてしまつた、と自分がふつとさう考へたのは、山のかげが、家の方へさして來て、うす暗くなつたゝめだつたのだ。

かういふ歌になると、先の話の調子でいふと、或は趣向をもつていつた歌だとおもふ方があるか

も知れません。『日はくれぬとおもふは』などいふところがよくのみこめなければ、さういふゝうな感じがしさうです。けれどもこの作者の中心として詠んでゐるのは、そんなところでなく、何事もないごく退くつな生活をしてゐる人が、けふもまた暮れて、蜩が鳴いてゐるとかう思つてゐて、暫く經つて後よく〳〵見ると、それはほんとに、日が暮れたのでなかつたといふことを、説明でいつてゐるのでなく、氣持ちから讀む人の心に觸れて行つてゐるのであります。

あなた方がこの歌から受ける感じは、確かにさうした方面が主なのだと考へて貰はねばなりません。とおもふはなどいふ調子は、いかにも日を暮しかねてゐる退くつな人のあくびでもしたいやうな氣持ちが出てゐるとおもひます。

今の人は、秋だつて春だつて、さう變つた心持ちを持ちません。それがほんたうはよろしいので、あなた方が、特別に秋は悲しいものだといふゝうに感じてゐてはいけないのです。しかしながら昔の歌人は、秋は悲しいものだと感じることの出來るのは、自分の歌人としての大事の資格だとおもつてゐました。秋のさびしさ悲しさのわからぬものは、文學者でないと恥ぢてゐたのです。それはかういふ歌がいくつも積み重なつた結果、秋は悲しいものだ、といふ約束が出來てしまつたのです。だがさういふ不自由な約束の出來ない前の歌を見ると、譬ひ秋は悲しくさびしいものだと詠んでゐても、それが各個人の實際の感じとして人々の胸に強く觸れるのであります。強制せられて爲方なしやつてゐるのと、自ら進んでやつてゐるのと違ふわけであります。

いつも、秋になるといふと、心をめちやくちやにする、その秋はまたやつて來たとおもふ。

木立ちの間から、漏れてさして來る月の光が、色が變つて感じられる。それを見ると、あゝまた寂しい秋だ、とかうおもふ、といふ歌です。

あなた方の若い心には、かういふ歌の興味はわからないかも知れませんが、日本の文學には、かういつた靜かな味ひが、よい作物にはずつとゝほつてゐます。それを物を單純に考へる人は、悲觀的だ涙脆い氣持ちだといつて、いけないものとしてゐるが、人間はいつもにこ〳〵笑つてゐるものばかりのものではありません。さびしく或は悲しい氣持ちになつた時に、はじめてほんたうの自分といふものを考へて見るものです。だからかういふ歌も、強ち(アナガ)に排斥することは出來ません。もちろんかういふ歌をまねたものが多いからといつて、日本の文學は悲觀的な文學だなどゝよくも道理を知らないで、一概にばかにしてかゝるのはいけない癖だとおもひます。外國の譬へにも、金持ちが天國へ行くのは、大きな象に針の穴をとほらせるよりもむつかしいといつてゐますが、さういつた滿足しきつた氣持ちばかりでゐては、人間にはしみ〴〵と、自分を省みる時が來ないのであります。

歌の見方

今一つ、古今集の名高い歌をあげて、評判と實際とはこれ程違ふといふことを證明して見たいと

おもひます。

勅撰集第一番の古今集の春のはじめにあるものといへば、そのうちでも第一番の歌といふことになるから、自然、人はそれを重く見ます。在原元方（アリハラノモトカタ）といふ人の歌で、『舊年（フルトシ）に春立ちける日よめる』といふ題で、

年のうちに、春は來にけり。一年（ヒトセ）を、こぞとやいはむ。今年（コトシ）とやいはむ　（卷一、一）

この歌、偶然よいものゝやうに考へられてゐます。ところが明治になつて、古い歴史のある日本の短歌を改正して、新派和歌といふものを唱へ出した一人の正岡子規（マサヲカシキ）といふ人は第一にこの歌を笑ひました。こんな歌がよいのならば、またかういふゝうに詠んでも歌だといふことが出來るといつて、

日本人と、西洋人とのあひの子を、日本人とやいはむ。西洋人とやいはむ

といふのでした。

これは子規が、説明のわかり易いやうに作つて見たゞけで、固より譬へにすぎません。子規のは三十一字のたゞの文章で、歌ではありません。いくらまづくともつまらなくとも、『年のうちに』の方には、多少意味以外に安らかな、そして子どもらしい氣持ちになつて起した氣分が出てゐます。その點はもちろん考へねばなりませんが、さうかといつて、この歌がよい歌だとおもふのは、たいへんいけないことです。

ふる年といふのは、新年に對する舊年であつて、昔の暦では年の明けないうちに、立春の節といふ暦の上の時期がやつて來ることもあつたのです。普通の考へでは、春と正月とが一致するものとしてあります。これは、習慣から出て來る心持ちであります。ところが時とすると、暦の上にさういつた行き違ひが出來て來ます。年の變らないうちにもう春が來たといふ氣持ちは、文學的ではないけれども、確かに文學の生活の上では、一種注意をひくことであります。それでこの歌が出來たのでありました。

まだ、年の變らない舊年の間に、あゝ春がやつて來たことだ。して見ると、この一年が二つに分れて、きのふまでを去年といはうか。今日から後を、今年といはうか。

それも理くつからはをかしいが、考へればなんでもないところに、わづかな興味を起したにすぎません。だからけつしてよい歌ではありませんが、子規のいふやうな、あひの子の歌見たやうなものでもありません。しかしながら、かういふ歌が後々、だん〳〵はやつてきて、數へきれないほどたくさん、同種類のものが出來ました。つまり一種とぼけた歌といはなければなりません。

西行法師と新古今集

古今集の後、たくさん勅撰集やらいろんな歌人のめい〳〵の家集といふものが出てゐるが、歌のほんたうの性質といふものは、だいたい、古今集の讀み人知らずの歌、すなはち先に解釋したや

うなものにあるといふゝうに考へ出されました。

古今集の歌は、全體としてはいけない歌がありますが、短歌はどんなものかと考へると、古今集の歌がまづ頭に浮ぶのであります。その後二百年あまりの間に、だん〳〵歌といふものゝ、かういふものでなければならないといふ、漠然とした氣分が出來て來ました。さうして皆さんも知つてゐる鎌倉時代に近くなると、京都の貴族たちの歌が、目に立つて變つて來ました。それは、新古今集といふ歌集を見ればよくわかることです。

後鳥羽上皇は、非常に御熱心でもあり、ごく稀なほどの名人でもいらつしやいました。いはゆる目の寄るところに玉で、この新古今集の時ほど、日本の歌の歴史の上で、名人・上手といふべき人が、たくさん揃つて出たことはありません。唯皆、あまり仲間づきあひが盛んに行はれたゝめに、歌は、お互ひによい影響ばかりでなく、わるい流行を起すことになりました。文學の上によい人がたくさん出たから、かならずしもよい文學が出來るといふわけのものではないといふ事實を、この時ほど、はつきりと見せたことはありません。つまり上手どうしが、皆肝腎の點よりもごく枝葉（エダハ）にわたるところに苦勞をして、それをお互ひに誇りあつたゝめに、それが重なり〳〵して、いけないことが起つて來ました。それでも中には、よいものがずゐぶん出來てゐます。なんといつてもすぐれた人の作つた文學には、よいものが出ないではゐないわけなのです。

樗咲く外面（ソトモ）の木かげ　露おちて、さみだれ霽るゝ風わたるなり　前大納言忠良（卷三、二三四）

樗は、普通『せんだん』といつてゐる木で、紫がゝつた花が夏頃に咲きます。それが家の外側の木立ちの中に、交つてゐるわけであります。それを作者がさみだれの頃に見てゐる歌で、

樗の咲いてゐる家の外側の木立ちの下蔭に、ぽた〳〵と露が落ちる程に、風が吹きとほる。

それは、幾日か降り續いてをつた梅雨が上る風である、といふ意味です。

かういつたところで、味ひは、あなた方がめい〳〵に、幾度もくり返し讀んで見なければ起つて來ないとおもひます。

この頃の先輩に、名高い西行法師（サイギヤウホフシ）といふ人があります。御存じのとほり、世捨て人として一風變つた、靜かな、さびしい歌を作つたといはれてゐます。そしてこの人の歌が、新古今集の歌の風に、非常な影響を與へたとも見られてゐます。だがこの人の歌全體に、かならずしも世間でいふやうなものばかりでなく、やはり當時流行の、はでなこせ〳〵したものもないではありません。だがこの人のものでいゝのになると、かういふものがあります。

吉野山。櫻の枝に雪散りて、花おそげなる年にもあるかな　（同卷一、七九）

雲かゝる　遠山ばたの、秋されば、おもひやるだに悲しきものを　（同卷十七、一五六〇）

吉野山は、古くからずゐぶん長く、坊さんその外修道者（シユダウシヤ）といつて佛敎の修行をする人が籠つてゐたことは、明らかな事實でした。その經驗から、はじめの歌が出來たのであります。

吉野山よ。その吉野山の櫻の木の枝に、見てゐると、雪がちら〳〵降りかゝつてゐて、これ

では、花がいつ咲きさうにも思はれない。今年は、花の咲くことの晩く思はれる年よ、といふのです。

さびしい修道者の仲間の尠い山家の暮しのうちにも、何か待ち設ける心があつて、たのしみになつてゐるものです。もう春になつてゐながら、せめて樂しみにしてゐるその花さへも、とても咲きさうに見えない。さういふ靜かな人の物足りない心持ちを、さびしいとも悲しいともいはないで、それかといつて雪のふりかゝつてゐるのを怨むでもなく、自然の景色をそのまゝ眺めてゐる氣持ちがよく出てゐます。わりあひいゝ歌の多い西行にも、これほどの歌は、さうたくさんにはありません。後の方は、これに比べるといくらか露骨に、西行の氣持ちを出しすぎてゐるが、ここまでつゝこんで歌つた人がないものですから、一例としてあげました。

『雲かゝる遠山ばた』といふのは、雲のかゝつてゐる景色が、見えてゐるのではありますまい。恐らく西行の知つた人が、西行と同じやうに、遠山にかすかな修道の生活をしてゐる。それが、秋になつて來た時分に思ひ出される。その遠山ばた――このはたは、山の傍といふことでなく、やはり、山の畠でせう。――雲が絶えずかゝつてゐるはずの、遠い山家の畠のあるところが、秋が來るといふと、たゞ想像して考へて見るだけでも、その生活が悲しく、胸に感じられる。まして、このさびしい秋を、山畠のあたりに住んでゐる人は、どんなに悲しからうといつたものらしいのです。

この歌の特徴は、想像してゐる景色が、實際にあり〳〵と目に浮んで來るやうになつてゐるところにあります。これを文學の上で把持力といつて、自分の經驗をいつまでも忘れずに、握りしめる力があつて、機會があると、それを文章に現す能力をいふのであります。

一句・二句の景色は、西行にその強い力のあることが窺はれます。それによつて、その以下の、『おもひやるだに悲しきものを』といふやうな、むしろありふれた言葉まで、いき〳〵と人の胸に、なんだか堪らないやうに迫つて來るのであります。

ほんたうに優美な歌

同じ新古今集に、藤原良經（フヂハラノヨシツネ）といふ人があつて、攝政太政大臣にまでなつた人ですが、よほどの歌よみでありました。

うちしめり、あやめぞかをる。ほとゝぎす鳴くやさつきの　雨の夕ぐれ　（卷三、二二〇）

この歌などは、そんなにたくさん類例のないほどよいものであります。ものゝ感じ方が非常に鋭敏で、鼻・耳・肌などに觸れるものを鋭く受け取ることの出來た、珍しい文學者であつたことを見せてゐます。

五月の雨の降つてゐる夕ぐれのことです。どこからともなく、あやめの咲いた花のかをりがして來ます。それが、かをりがするといふ程でなく、なんとなく感じられるといふ程度に匂

つて來るのです。それを雨のために、匂ひが和らげられて、ほとんど、あるかないかのやうに、しんみりとしたふうに香つて來る、と述べてゐます。

説明したゞけではなんでもないことですが、この時代に、これほど細かく捉へがたいことを現した人はないのです。

『ほと〻ぎす鳴くやさつき』といふのは、何もそのときほと〻ぎすが鳴いてゐるのではありません。さつきといふために、習慣的にほと〻ぎすが鳴くところのといふ言葉が附いて來たのであります。いはゞ一種の枕詞で、かういふ風に靜かな歌では、少しでもいひすぎたり內容が殖えすぎると、全體の調和が破れて來ます。むしろ、內容のないものを入れなければならないのです。それでかういふ言葉が利用せられてゐるのです。けれどもどうしてもほと〻ぎす鳴くやといふと、ほと〻ぎすが鳴いてゐる實際の樣子が浮びます。これがこの歌の少しの瑕であります。

この歌を作りかへて、別に變つた領分を開いたものがあります。それは明治になつて死んだ京都の蓮月といふ尼の作で、

朝風にうばらかをりて、ほと〻ぎす鳴くや　うづきの志賀の山越え

これになると、ほと〻ぎすは、實際に鳴いてゐるやうに詠んでゐます。けつして枕詞でなく、四月を意味するうづきの、自然の景色の一部として見ると、どうしても良經の歌から、暗示を得て作つたに違ひありません。そして良經の歌の氣分をすつかり、取

つて、一種の歌に纏めてゐます。更に今少し、さつぱりとした感じが出てゐるやうです。

四月頃には、野茨の花が咲くものです。この匂ひがまた非常によろしい。風などにつれて匂つて來ると、なんだか新鮮な氣のするものです。『志賀の山越え』といふのは、昔から歌にたび〳〵詠まれた、京都から近江へ越えるところです。

この歌は恐らく空想でせうが、この場所、或はさうした景色は、蓮月が始終見てゐたに違ひありません。だから空想であつても事實と同じであり、むしろ事實より力强く人の心に響くのです。

野茨の匂ひがして來て、自分の行く道の傍に、ほと〻ぎすの鳴く聲のするところの志賀の山越えよといふのです。かういふ風な作りかへが、また短歌の上にたび〳〵行はれました。けれども、わざ〳〵作りかへようといふ考へを持つた時には、たいてい失敗して、元の歌から獨立したねうちのない、文學的にはだめなものが多いのであります。蓮月尼の歌などは、作る時には恐らくうちしめりの歌のあることも忘れてゐながら、どこかに記憶が殘つてゐて、その調子、その氣分が、現れて來たものでありませう。

調子の立つた歌

後鳥羽上皇のお歌は、その現し方が非常に手がこんでゐて、ちやうど腕のよく利いた人の作つた、工藝品を見るやうでありますから、あなた方に、そのおもしろみを感じて貰ふのは、むつかしい

と思ひます。こゝにはごく平凡なものをあげておきませう。

秋ふけぬ。鳴けや。霜夜のきり〴〵す　やゝかげさむし。蓬原(ヨモギハラ)の月　（同巻六、五一七）

秋が深くなつてしまつた。この霜空の晩に鳴いてゐる、聲かれ〴〵のきり〴〵すよ。もつと出來るだけ鳴け。空から照す光も、冷く感じられる。その蓬原のやうになつた家を照す月よ。その下で、きり〴〵すが、ほのかに鳴いてゐる。

きり〴〵すといふのは、こほろぎだといつてゐます。

かういふ風にくろうとらしい歌をお作りになつたので、歴代の皇族方の中では、文學の才能から申して、第一流にお据りになる方です。けれども、時代が先に申したやうですから、そのお作も、自然おもしろさが片よつてゐて、完全なものとは申し上げることが出來ません。

天皇さまをはじめ、皇族方のうちで、圓滿な歌を作られたお方を探して見ると、それから時代が下つて、南北朝のはじめ頃の伏見天皇、それからその皇后さまの永福門院といふお方、このお二方が、まづとびぬけていらつしやると思ひます。勅撰集でいふと、新古今集が八番めの歌集、それから後(アト)六つめすなはち、古今集から勘定して十四番めの玉葉和歌集、十七番めの風雅和歌集、この二つのものに、特別に關係が深いのであります。

發達しきつた歌

ゆふぐれの雲飛びみだれ、荒れて吹く　嵐のうちに、時雨をぞきく　（玉葉集巻六、八五五）

いつはとも　心に時はわかなくに、をちの柳の　春になる色　（風雅集巻二、八三）

これが伏見天皇のお歌です。後鳥羽上皇から、も一つ進んで、更にその一種の癖を拔いた素直なお歌になつてゐます。

夕方の空には、一ぱい雲が亂れてゐて、あちらこちらに早く飛び廻つてゐる時に吹きおろす山風が、あら〴〵しく吹いてゐる。その目にも耳にも、すさまじい景色。殊にはげしい風の音にも打ち消されずに、靜かな時雨の音のしてゐるのを自分が聞いてゐる。

これはちよつと見ると、『雲飛び亂れ』・『荒れて吹く』などいふ言葉が、ごた〴〵してゐるやうであるが、私の解釋したやうに荒れて吹くから別に考へて見ると、空模様に更に加へて、はげしい風の様子が感じられます。このお歌は靜かな時雨の音を、さうした間に耳に留めてゐたといふところに、變つた興味を起されたので、かういふ詠み方の歌は、これ以前にもこれ以後にも、まづ類例のない新しい、さうしていゝものだといふことが出來ます。あらしといふのは山おろしのことで、暴風ではありません。

今は、冬か春か心の上で迷はずにゐられない時分である。心ではいつとも時候の區別がつかないのに、目に見るものは、すでに尠くとも、一つだけは春らしいしるしを示してゐる。これは遠方に立つてゐる柳の木の、いかにも春景色になつて行く色あひがそれである。

『春になる色』といふのは、まだ春になり切つてゐるわけではありません。春の様子が調つて行つてゐることをいふのです。

色といはれたのは、漠然と、どこか春らしい様子・色あひの見えることを、氣分式に示されたのです。をちの柳といふのも、はつきりと、何本あるとも、どの位の距離にあるともいはれないで、まづほのかな色あひで、幾本か竝んでゐるといふ感じを起させるためなのです。いつはといふのはいつといふのとかはりがないと見ておいてよろしい。

やまもとの鳥の聲より明け初めて、花もむら〳〵　色ぞ見え行く　（玉葉集卷二、一九六）

何となき草の花咲く野べの春。雲に　ひばりの聲ものどけき　（風雅集卷二、一二二）

これが永福門院のお歌です。御覽のとほり、物の色あひ・組み合せが、非常に美しく作られてゐます。

山の麓の方に、鳥の聲がする。その鳥の聲のするあたりから、だん〳〵夜が明けかけて、あちらに一かたまり、こちらに一かたまりといふゝうに、山の櫻の花も色が現れて、だん〳〵明らかになつて行く。

『花もむら〳〵色ぞ見え行く』などいふところに氣のついたのは、やはり時代がずつと新しくなり、人の心が自然物に對して、敏感に動くやうになつて來たからです。しかし普通の人は、文學の上では、やはり昔のまゝの型どほりに作つてゐるに拘らず、勝れた人は、その時代の人らしい

眼で、物を見、感じるものであります。さうして新しいとはいひながら、柔らかで穩やかなよい氣持ちを破らないで、上品さを持ちながら歌はれてあるのが、この歌などのよいところです。殊に二番めの歌などになると、ほとんど、只今の人が作つたものか、とうつかり思はれるやうなお作であります。まづ普通の人ならば、名のない雜草の花などは詠みません。ところがこの門院樣は、その雜草の花に興味を持つてゐられます。なんといふことのない變つた點もない草の花、この咲いてゐる野の春景色、とぱつと廣い樣子を現して來て、下の句で、自分はどこにをつて、何をしてゐるかといふことを、はつきりと現してあります。その草の花の咲いてゐるところに据りこんで空を仰ぐと、雲が出てゐる。その雲のあたりへ鳴き上つて行く雲雀の聲に氣がついて、そして、今かうしてゐることの外に、なんの爲事の煩はしさも心がゝりもない、豐かな氣持ちを感じてゐることを、『のどけき』といふ言葉で示されてゐます。

この頃にも、このお二方を取りまいて、名人といつてよい人々が大ぶんゐるのですが、そのお話は、只今いたしません。こんな勝れた歌が、しかも非常に貴い方々のお作に出て來てゐるに拘らず、世間の流行は、爲方のないもので、だん〳〵、惡い方へ〳〵と傾きました。さうして、この玉葉集・風雅集などの歌は、いけないつまらない歌だ、とねうちをきめてしまふやうになりました。これは世間の評判と、ほんたうの物のねうちとは、たいていの場合一致してゐないそのもつとも適當な例であります。これから後、室町時代から時が過ぎて江戸の時代に到るまで、そんな

に勝れた歌人は、多くは出てまゐりませんでした。つまり平凡なお手本を敷き寫しになぞつて行くものですから、だん〳〵つまらなく、その作者の特徴を出すことが出來なくなつたわけであります。

江戸時代の歌

ところが江戸時代になると、德川氏の政治の方針がさうであり、また世の中が治つて來たゝめか、學問が盛んになつて來ました。そして支那の學問から更に進んで、日本の學問・日本の文學の研究が行はれ出して來ました。さうして學者も文學者も、かならずしも上流社會の人々ばかりでなく、かへつて低い位置の人の方に中心が移つて來るやうになりました。

昔の文學・昔の短歌を研究した結果、今までやつてゐたのはいけなかつた。五百年も千年も前の歌の方が、自分たちのものより遙かに新しく、もつと〳〵熱情が籠つてゐるといふことに、皆が心づくやうになりました。さういふよい影響を與へたのは第一に、萬葉集が新しく讀み返されたことであります。それから學者・文學者の間に、一足飛びに、よい歌に刺戟せられて、新しい歌を作る人々が殖えて來ました。

さういふ人たちは、數へ上げることの出來ない程たくさんありますから、こゝにはごくわづかの代表者だけを出しておきませう。

歌人としての國學者たち

よくいふ國學の四大人（シタイジン）のうちで、一番文學者らしかつたのは賀茂眞淵（カモノマブチ）であります。そしてそれ以前にも、だん〳〵萬葉ぶりの歌を作つた人があるが、この人から一つの主義として、さういふ方面に進む歌が出來て來ました。でもこの人の歌は、評判ほども勝れたものではありません。だから一首だけ引いて置きませう。

秋の夜のほがら〳〵と、天の原照る月かげに、雁（カリ）鳴き渡る

ほがら〳〵といふと、夜明けの空のあかるさを示す言葉です。それを、月の照つてゐる空の形容に用ゐたので、いかにも晝のやうな明るい天が感じられます。

隅から隅までからりと明るく、廣い空に照つてゐる秋の夜の光線のさしてゐる中に、雁が鳴き渡つて行く、といふ歌です。

感じてゐるところはよろしいが、上の三句がごた〳〵として、感じた氣分がすつきりと現れてゐません。けれどもこの人は、まづ大體かういふ調子に、一筋に歌ふのが得意だつたと見えます。

おなじやうな歌を竝べて見ませう。上田秋成（ウヘダアキナリ）といふ人は、眞淵の孫弟子に當る文學者ですが、この人も、歌はその散文ほど上手ではありませんが、かなり作れた人であります。

照る月に、雁のまれびと鳴き渡る。わが待つ友は、こよひ來なくに

こんな歌になると、この人の方が、遙かに勝れた才能を持つてゐたことがわかります。

空に照つてゐる秋の夜の月。その月光のさしてゐる空を遠方からやつて來た雁が、列をなして鳴きとほつて行く。こんな晩には、一しよに親しむ友だちの訪問が待たれる。けれども私の待つてゐる仲間は、今晩はやつて來ないでゐるのに、さうして私一人で明るくほがらかな天地に照る月に對してゐるのに、その上を雁が鳴き連れてとほる。

といつた滿足はしてゐながら、ある點に、自分の感じをいつて聞かせたい仲間のゐない、もの足らなさを述べてゐるのです。

しかしそれも、けつして理くつらしくは出てをらずに、このほがらかな調子に、玉のやうに包まれて、たゞ月の光に、及び雁の列に動かされた氣分として、胸に觸れて來ます。かういふのが、ほがらかな、たけ高い調子といふものであります。先の歌に比べて見ると、こんな形の出るまでは、それでも相當に見えたものが、なんだかつまらなく感じられるでせう。

まれびとといふのは、お客さまといふことですが、ごくたまに來る珍しい人といふのが古い意味です。渡り鳥なる雁をば、この珍客に見立てたのであります。それを譬へのやうにいはないで、直接にまれびとなる雁といふゝうにいつたところに、濁りがなくなつてをります。

加納諸平

眞淵の弟子の本居宣長、その弟子の夏目甕麿、この人の子で、紀州の醫者の家の養子となつた加納諸平といふ人があります。小さな時から父の伴をして、諸國を歩いて攝津の國へ來た時に、酒飲みの父親は、月を捕へるのだといつて、歌の友だちなどが止めるのもきかずに、池の中へをどり込んで死にました。それからすぐに和歌山へ引き取られて行つて、久しく國へ歸ることもしませんでした。加納家に住みこんでから、はじめて遠江の母のところへ歸省したことがあります。かういふ傳記の一部を知つて諸平の歌を讀むと、誠に思ひ深いところが感じられます。

歌や俳句の上では、その形が短く小さいだけに、はしがき——また、詞書きともいふ——や、その歌を作つた事情などを知るといふことが、外の文學とは別で大事なことでもあります。つまりその作物の背景になつてゐるものをのみこんで、眞に歌なり俳句なりを味ひ知るといふことが、どうしても必要なのです。

旅衣わゝくばかりに　春たけて、うばらが花ぞ、香に匂ふなる

青年が一人旅をしてゐるといふことを、頭に持つて下さい。わゝくといふのは、きれや著物のぼろぼろになつて來ることで、長旅をしたゝめに、摺り切れて來たりしたところがある樣子です。

著てゐる旅行の著物が、わゝけるほどに、春早く出た旅も、すでに春深くなつて、道傍に雜草のやうに咲いてゐる野茨の花が、匂ひ立つて感ぜられる、といふ意味です。

がそれはもちろん、實際以上に歌らしい味をつけようとしてゐます。理くつゝぽくいへば、和歌

山を出て遠江までの間に、旅ごろもがわゝけるといふ程のこともあるまいし、また早春に出たのが晩春になつたといふ程のこともありますまい。けれどもそれほどのことは、文學上の一種の誇張といふもので、いくらか輪をかけて感じ深くいひ表すのが、文學のほんたうの爲方だ、と今ですらも考へてゐる學者・文學者が多いのですから、これくらゐのことは、昔の歌としてあたりまへだと見ていゝとおもひます。この頃の人はすべて、あまり自分の生活が歌に現れるといふことを嫌つたので、さういふゝうなのを無風流だとしりぞけてゐました。この中にこんなのが出て來ると、さすがにちよつと胸をうたれる氣がするのです。

ゆふ月夜（ソクヨ）　ほの見え初めしあぢさゐの花も　まどかに咲きみちにけり

これはちよつと見ると、いかにも紫陽花（アヂサヰ）の花の様子を細やかに寫してあるやうに見えますが、實は紫陽花を見て作つたのでなく、見慣れてゐる花の模様を空想に浮べて、美しく爲立てたに過ぎません。だから近頃の歌や文學の上からは、かういふ態度はよいとはいへないが、それにしても作つたものが相當によければ、やはりよいといふより外はありません。空想で作りながらこれまでに作り上げたのだから、その作者に力の十分あつたことがわかります。この人は學者であり文學者ですから、言葉のあやを十分に心得て、少しのむだもしないでゐます。それがかへつて、今では邪魔になるのです。譬へばわれ〳〵の時代には、夕づく夜ならば、ほんたうに夕方のお月さまが出てゐると感じるだけで滿足するのに、この人の歌では、昔の習慣に從つて、『ほの見え初め

し』の枕詞なる『夕づく夜』といふ言葉を、まづ据ゑたのです。もちろんたゞの枕詞だけでなく、夕月の頃にほんのり見えかけたといふ意味にはいつてゐるのですが、學問的にもこの二つの句の連絡をつけてゐるわけなのです。昔はかういふことの自由に出來るのが名人だと思はれたのですが、今ではかへつて、文學を味ふ上の足手纏ひとして、避けねばならぬことであります。夕月夜といふのは夕月の夜といふことでなく、月夜は月のことです。で、夕月の頃といふと、新月の出た時分といふことになります。

その頃にはまだ、ほんのり見えかけてゐた紫陽花のその花も、もう今では、まどかにまんまるく、圓滿に咲いてゐることだ。

紫陽花の花のだん〳〵咲き調つて行くありさまが、よく詠んであります。その上に、いかにも紫陽花に適した氣分が出てゐます。たゞそれだけで滿足せずに、新月の頃から注意してゐたのが、こんなに大きく立派に咲いたといふやうなおもしろみを附けたのは、ほんたうはよくないのです。今こゝで細かに說いてもむりですから、もつと長く歌に親しんで貰つて、自分自身の批評が出來るまでは、まづよい歌だと考へて置いて下さい。その上この歌では、まだ〳〵言葉の外にいひ含めたものがたくさんあります。

あぢさゐの花もとの字を使つてゐるのは、空のお月様がちやうどまんまるになつてゐる頃、あぢさゐもまんまるになつた。かういふことを感じさせようとしてゐるのです。なか〳〵昔の人は

苦勞したものです。がそんなことは、文學の上ではむだ骨折りといふものです。それをまた、おもしろいと思つてゐてはいけないのです。

思ひを抒べる歌

この人には歌の上に、まだいろ〳〵の試みがあつて、おもしろいことをしてゐるが、その一例をあげると、

月に吹く市の植ゑ木の風　高み、塵も殘らず　晴れし空かな

月に聞く波の響きも　更けにけり。誰か　うきねの袖絞るらむ

月にうつ大城（オホキ）の鼓　しばし待て。くだちゆく夜を、誰か、惜しまぬ

かういふ一續きの歌が、まだ〳〵あるのですが、これだけにして置きます。

月の照つてゐる所に吹いてゐる、町のとほりに植ゑてある木に、當るところの風の音の高さに、なるほどひどい風だと思つて空を見ると、吹き上げられた塵も、どこへ行つたかわからぬほど澄みきつて、晴れきつてゐる月の空よ。

月光の照す下（モト）に聞えて來るその波の響きも、思へば夜の更けた感じのすることだ。かうした晩に、この海に舟旅をして、船の中で目の覺めてゐる人もあらう。そして水の上に浮いて寢てゐる袖を絞るほど、涙で濡らしてゐるだらう。

月の輝いてゐる空に響くお城の太鼓。それは、もう門限（モンゲン）だといふ知らせなのです。だがまう暫く、打つのを待つてくれと感じるのは、現在の心持ちのなくなるのを惜しむ心なのです。それにも拘らず、太鼓はどん〳〵鳴つてゐます。それに對して、なるほど夜はだん〳〵更けて行くが、この更けて行く夜を惜しまない人が、誰一人としてあらうか、といふ心持ちです。全體月に何々といふゝうに、頭に句を置いてゐるために、幾分歌が上調子（ウハテウシ）になつてゐるが、眞底にはやはりよいものがあります。市といつても、今の市場ではなく、商人の店を列ねてゐる町通りで、そこには、今の街路樹に似たものを植ゑたのです。それは古いことで、この歌人のゐた時分のことでないが、歌の上ではかういふゝうに、現代を古いものに爲立てゝ作ることもあつたのです。まあ、あなた方にわかり易いためには、東京の銀座その外、街路樹の植つてゐる商店街の、夜ふけて騷いでゐた人も、寢靜まつた後の月光を思ひ浮べて見ればよからうと思ひます。

浮き寢といふのは、水鳥が、波の上で寢ることから移つて來て、人間にも、舟旅の夜泊りの場合に用ゐます。それにも、うきねといふ言葉に憂きといふ厭な、情ない悲觀すべき意味の言葉が、音から感じられる習慣になつてゐます。この歌も內容よりは、調子が流れすぎてゐるのですが、作者が月の晩に、さびしい心になつて、外にもかうした人があるといふことに思ひ及してゐる心持ちが、この人をなつかしく感じさせます。大城の鼓といふのは、和歌山城の『時（トキ）』の太鼓です。この歌は別に深く思ひこんでゐるのでもない樂しみを、ぢつと續けてゐたといふだけの物ですか

ら、調子と意味とがぴつたりとしてゐます。さうしてこれらの歌は、皆歌つて氣持ちの好いやうに、調子が調つてゐます。

沖さけて浮ぶ鳥船。時のまに翔(カケ)りも行くか。いさな見ゆらし

熊野の山めぐりをした時の歌ですが、沖遠く離れて浮んでゐる鳥のやうな船、それが今、そこにをつたかと思ふと、瞬間の目も及ばない遠いところにかけつて行つてゐることよ。それは鯨が見えたに違ひない。

こんな歌になると、自由で浮かれるやうな調子が、ぴつたりともりを衝く鯨船のすばやい動作を表すに適當してゐるではありませんか。鳥船といふのは大昔の國語で、船の名前でもあり、同時に舟についていらつしやる神様のお名前でもありました。あなた方ならば、船が早いから鳥に見立てたのだと思つて置いてさし支へありません。熊野の鯨つきの歌です。

香川景樹

この諸平のゐた時分に、近世でもつとも名高い香川景樹(カガハカゲキ)といふ歌人が京都にゐました。非常に上手の評判があり、門人も多く、その一門は榮えて、今までも續いてゐるほどの人でありました。明治天皇のお師匠番になつた人も、この流れのものであります。そのためにたいへん名人のやうに感じられてゐますが、これもまた、評判と實際との價値の違ふ生きた手本で、この人の歌には

ほとんど文學としてねうちのあるものは見えません。まづ一例を取つて申しませう。

春日野に若菜を摘めば、われながら　昔の人のこゝちこそすれ

これはこの人のものでも、いゝ部類の歌です。けれども、先の諸平(モロヒラ)に似た歌があるのと竝べて見ませう。

引馬野(ヒクマノ)の木の芽はり原。入り亂れ　春日くらすは、昔人かも

景樹(カゲキ)のは、『歴史的にいろ〳〵な記念のあるこの春日野で、自分が若菜を摘んでゐると、昔の人も、かうして若菜を摘んでゐたのだから、うつかりすると、自分でゐて昔の人のやうな氣がする。』といふのです。おもしろいと思ふでせうが、これは説明でおもしろく見えてゐるので、歌その物は、たゞさういふおもしろさを考へて見たゞけで、ほんたうに氣分の上にまで、昔の人になつた心持ちが出てゐません。これを知識の上の遊びといひます。それとゝもに、氣分が少しも伴はないのですから、散文的な歌といはねばなりません。殊にわれながらといふのは、いかにも常識的で、自分で知つてゐて、わざとそんなことをいつたゞけだといふことを見せてゐます。

それと比べて見ると、諸平のはさすがにもつと熱情が出てゐます。自分が昔の人か知らん、とかう疑つてゐるので、その疑ひの起る導きとして、『引馬野――萬葉集などに見えてゐる土地で、濱松から北へかけての平野地方――の木の芽が新しく出てゐる。――そのはると、はりの木のはりとをひつかけて歌つたもの――はりの木原にめちやくちやに入りこんで、この春の日を一日遊ん

でゐるのは、あの萬葉集に出て來てゐる人たちなのか知らん。』と疑つたので、その一人として、諸平自身も含めていつてゐるわけです。

景樹の歌の方が、皆にわかりやすからうと思ひますが、そこが散文と詩との違ふところで、意味の上からおもしろいことが、きつと詩や歌の完全なねうちをきめるものだといふわけにはいかないのです。世間のものを見ても、誰にもわかるものが、きつとよい文學藝術であると思つてゐる人もあるが、それは大へんな間違ひであるといはねばなりません。景樹のことはこれでよします。

橘曙覽

景樹などが騷がれてゐたかげに、評判にならずにゐた人が、まだ〳〵ありました。その一等目につく人は、越前福井の橘曙覽（タチバナノアケミ）であります。この人は明治以後の新派の和歌といふものに、非常な影響を與へた人ですが、それまではあまり人から騷がれなかつたのです。

江戸の末から明治の始めにかけて生きてゐた人です。いひ傳へでは、大へん貧乏な暮しをしてゐて、しかも國學や歌の樂しみを捨てなかつた人であります。この人にも、諸平同樣同じ句をはじめに据ゑて詠んだ歌があります。

中でも、『獨樂吟（ドクラクギン）』といふのは、五十首からもあります。名高いものだから、そのうち、六七首竝べておきませう。

樂しみは、草のいほりの　むしろ敷き、ひとり　心をしづめをる時
樂しみは、すびつのもとにうち仆（タフ）れ　ゆすり起すも知らでねし時
樂しみは、めづらしき書（フミ）人に借り、はじめ一枚（ヒラ）　ひろげたる時
樂しみは、妻子（メコ）むつまじくうち集（ツド）ひ、頭竝べてものを食ふ時
樂しみは、心に浮ぶはかなごと　思ひつゞけて、たばこ吸ふ時
樂しみは、晝寢めざむる枕べに、こと〳〵と湯の沸（ニ）えてある時
樂しみは、乏しきまゝに人集め、酒のめ　ものを食へといふ時
樂しみは、童（ワラハ）墨するかたはらに、筆の運びをおもひをる時
樂しみは、神のみ國の民として、神のをしへを深くおもふ時

かういふゝように、最後の句を皆『時』でをさめてゐます。恐らく口から出任せに、大して苦勞なしに作つたとおもはれますが、それが皆下品でなく、あつさりほがらかに明るい氣持ちで詠み上げられてゐます。この外、樂しみの歌はありますが、年の若いあなた方にはわかりにくいものは省きました。これらの歌ならば、あなた方にも大體わかりませう。そして年が行くと共に、これらの歌の味ひが、變つて感じられて來るのです。だからまづ暗記しておいてほしいとおもひます。一番はじめの歌は、莚（ムシロ）を敷いて、そこに坐りこんで、ぢつとしてゐる心の寬ぎを喜んでゐるのです。

たばこの歌で、はかなごとゝいふのは、考へなくてもよいやうな、なんでもない、輕いことゝいふことです。これはやはり、大人でないとわからない氣持ちです。第一あなた方にはたばこを吸ふ人の氣持ちがわかるはずがないのです。貧乏ながら、こせつかずに暮してゐたことは、乏しきまゝの歌を見て、いかにも人なつかしい、善良なこの歌人の性質が思はれます。

やはりあなた方にはわかり難い興味かも知れませんが、わらはすみするなどの歌は、ぢつくりと落ちついた、そしてなんともいへない心のはずんでゐるのが感じられるものです。

最後の歌は、よく世の中の人の作りさうな道德的な歌ですが、この人は眞底から、さう考へてゐたゝめに、人から賴まれて作つたといふやうな浮いたところを見せてゐません。ことに、神のをしへを深くおもふ時、などいふ味ひは、これから先、あなた方にだん〳〵わかつて來るだらうと思ひます。

この人は、また物の名前ばかり集めて、一首の歌を作つてゐます。

木樵り歌　鳥のさへづり　水の音　ぬれたる小草　雲かゝる松

山中といふ題です。山中目に見、耳に聞えるものを五とほり竝べて、そしてもの靜かな山の樣子を考へさせようとしたのです。けれどもこれは、和歌ではまづ出來ない相談で、恐らくこの人が、かういふゝうな思想の表し方をする俳句にも、興味を持つてゐたから出來たものなのでせう。どう考へても、この五つの現象が、一つの完全な山のありさまに組み立てゝ感じられては來ません。

こんな人ですから、時々おどけた歌を作つて、人を笑はせようとしました。そしてやはり、下品すぎるといふ程でなく出來てゐるのは、人格によるのです。

著る物の縫ひめ〳〵に、子をひりて、虱の神代はじまりにけり

わたいりの縫ひめに頭さし入れて、ちゞむ虱よ。わがおもふどち

やをら出でゝ、ころもの首を這ひ歩き、我に恥ぢ見する虱どもかな

昔の人は、虱となじみが深かつたゝめになんでもなく、かういふ歌を作つてゐます。そして汚らしいあの昆蟲を憎んでばかりもゐません。

最初の歌は、少しおどけ過ぎて、下の句などはわるいとおもひます。二番めの「わがおもふどち」は、おれの仲よしだといふくらゐの意味で、おれだつて虱とおんなじことだ、とまるで、綿入りの著物の縫ひめに、頭をつゝこんで縮かんでゐる虱ばかりを笑ふことは出來ないといふのです。それを深くおもひ込んだやうにいはずに、輕く詠みすてゝゐるのです。「やをら出でゝ」といふのは、少し說明しすぎてゐますが、下句の方になると、いかにも自分の人からうけた恥かしい經驗を、そのまゝ輕い心で歌つてゐるところが見えて、わるい歌ではありません。この人の先生は、加納諸平と同門の田中大秀といふ飛驒の國の學者でした。その師匠を訪うた時の旅行の歌。

旅衣うべこそさゆれ。乘る駒の、鞍の高ねに、み雪つもれり

旅裝束をとほして、寒さが身に應へると思つてゐたが、なるほど冷やついたはずだ。あの向

うに見える、乘るこまの鞍といふ名まへの乘鞍（ノリクラ）の高山に、雪が積つてゐる。

この人は、この山を甲斐の國乘鞍山と書いてゐるが、これはやはり只今の飛驒山脈（日本あるぷす）の中のあの山でせう。この歌はどうかすれば、馬に乘つて旅をしてゐて、それをすぐさま枕詞として、鞍の高ねといつたやうにも思はれるが、さう考へてはいけません。

大隈言道

尙明治より前の歌人として、忘れることの出來ないのは、福岡の人、大隈言道（オホクマトホミチ）であります。この人も曙覽のやうに輕く明るく、あまり考へないで、自由に歌を作つたらしい人であります。やゝおもしろさにつり込まれて、下品な歌もないでもありません。けれども、歌よみとしては勝れた人といふことが出來ます。ことに子どもらしい氣持ちを歌に自由に詠みこんだ人で、そんなのになると、つい〳〵よいわるいを忘れて、同感せずにゐられません。しかし曙覽の歌で、さういふ種類の歌をあげすぎましたから、こゝでは、まじめなものを二三首竝べるだけにしておきませう。

うちわたす　をち方人（カタビト）の、道おそく行き果つまじき　野の景色かな

これも、歌には少い材料で、春の野の霞んで果てがなく感じられる上に、皆の心のゝんびりしてゐる氣持ちが、よく出てゐて、しかも非常に古風に上品に出來てゐます。

うちわたすは、見渡すといふくらゐの意味。をち方人といふのは、向うの方を歩いてゐる人。道

おそくとは、足がはかどらないでゐる樣子を少々變つたいひ廻しでいつたのです。つまりさうしないと、平凡に上すべりがすると思つたのでせう。だから、直譯して、道がはかどらないでと取つておけばよいでせう。とても今日一日では行きゝるまい、といふ氣持ちを、行き果つまじき野の景色かな、とかういつたのです。

今までの歌と違つて、重くるしいけれども、やはりよい感じがするのでせう。

かへり來て、寢たるわらべの袂（タモト）より、頭出だせるつく〳〵しかな

かへる雁、かへりて春もさびしきに、わらはのひろふ小田（ヲダ）のこぼれ羽

この人は子どもがすきだつたゝめに、同時に、子どもが讀んでもわかるやうな歌、或は自分が幼い氣持ちになりきつて作つたものが、たくさん出來たものらしく思はれます。

春になると雁が、北の方へ歸ります。その後に、雁の羽が、田圃などによく殘つてゐます。それを子どもが拾つておもちやにして遊んでゐるのを作つたので、さういふ材料をごく重々しく爲上げてゐるのです。春に歸る雁が、歸つてしまつた後、花は咲いても、子どもは雁の姿が見えないので、『がん〳〵竿になれ棒になれ』といふ童謠を謠ふことも出來ないでゐるその子どものさびしい氣持ちを、春もさびしきといつたので、大人の作者自身の氣持ちを述べたのではありません。

さういふ場合に、そんな子どもが、田におりて行つて、雁のこぼして行つた羽を拾つて喜んでゐる、といふ歌です。それをすつかり、大人の側から見て作つてゐるのです。

も一つ、子どもを種にしながら、重い歌をあげておきませう。

わが身こそ何とも思はね。めこどもの　憂(ウ)してふなべに、うきこの世かな

これも、あなた方にわかりにくい氣持ちかも知れません。が、お父さんお母さんの年ごろになると、家の生活が、よくてもあしくても、なんだか社會的の暮しといふものが、重荷に感じられて來るものです。さういふ年ごろになると、この歌を詠んだ言道の心持ちがわかるでせう。言道もやはり、曙覽同様の貧しい暮しをしてゐました。けれどもそれについて普通の人でありませんから、大して氣にかけたりあせつたりはしてゐなかつたのです。が時々、もつとよい暮しがしたいといふ氣持ちが起らなくもありません。それは多くは家族のものたちが、主人に訴へる場合、或はさういふ心持ちを顏に現してゐる場合に起つて來る氣持ちなのです。

自分はそれはなんとも思つてゐないが、しかし、時々悲觀すべき世間だ、とおもふ氣がする。

自分の妻や子が、厭だ〳〵と世の中のことをいふにつれて、厭に思はれるこの世よ。

といふのです。

少しもの足らないところもありますが、家の主の持ちさうな氣持ちをよくいつてゐます。なべにといふ語は、それと共に・と同時になどいふ意味ですが、この頃の人は、輕くゆゑにといふくらゐの意味にも用ゐたのです。以上の人々で、江戸時代の歌人を代表させたつもりです。

正岡子規短歌抄

『竹乃里歌全集』による

明治三十年

愚庵和尚より、其庭になりたる柿なりとて、十五ばかりおくられけるに

（六首中錄二首）

みほとけにそなへし柿の　のこれるを—我にぞたびし。十まりいつつ

柿の實のあまきもありぬ。柿の實のしぶきもありぬ。しぶきぞうまき

明治三十一年

百中十首　其一　（白露選）（錄三首）

とばり垂れて　君いまだ覺(サ)めず—くれなゐの牡丹の花に　朝日さすなり

緣先(エンサキ)に　玉卷く芭蕉—玉解けて　五尺(ゴシャク)のみどり　手水鉢(テウヅバチ)を掩(オホ)ふ

霜防ぐ　菜畑の葉竹―はや立てぬ。筑波嶺おろし　雁を吹く頃

百中十首　其四　（碧梧桐選）（錄一首）

古庭の萩も　芒も　芽をふきぬ―。病癒ゆべき時は　來にけり

百中十首　其五　（虚子選）（錄二首）

榛の木に、鴉芽を嚙む頃なれや―。雲山を出でて、人畑を打つ
城中の千戸の杏はな咲きて、關帝廟下　人市をなす　―金州

百中十首　其六　（鳴雪選）（錄一首）

菅の根の永き春日を　端居して、花無き庭を　ながめくらしつ　―病中

百中十首　其八　（戯道選）（錄二首）

病みて臥す　窓の橘　花咲きて―、散りて　實になりて　猶病みて臥す
武藏野の冬枯芒　婆々に化けず―梟に化けて―、人に賣られたり
―庭先にぶらさげたるものを

百中十首　其九　（竹柏園選）（錄一首）

寢靜まる里のともし火―皆消えて、天の川白し―。竹藪の上に

百中十首　其十　（露月選）（錄一首）

はらはらと　もろこし黍を刈く音に、しばしばさむる　山里の夢

百中十首　其十一　（遠人選）（錄二首）

菜の花に　日は傾きて、夕雲雀―しきりに落つる。市川の里
酒醒むる夜半のともし火―風吹きて　雁が音低し―。雨にやなるらん

春　雨　（八首中錄一首）

驛路の桃のはな散る。春雨にからかささして、旅人の行く

雲雀十首　（錄三首）

空高み雲雀の聲に―日はさせど、里まだ明けず―。山陰にして
野の空の　ゆふぐれ寒み風荒れて、武藏の雲雀　下總に落つ
麥植うる小島を近み　たまたまに　雲雀鳴くなり―。帆檣の上に

春の水十首　（錄一首）

御園生の―花にながるる春の水―。内濠に落ちて、外濠に出づ

雜　歌　（八首中錄一首）

筒井筒―。井筒は朽ちて、古柳―柳みどりしぬ。のぞく子もなし

初　夏　（九首中錄三首）

ふるさとの梅の青葉の―下陰に、衣洗ふ妹の、おもかげに立つ
鉢二つ―。紫ときはをだまきか―。赤きは　花の名をわすれけり

夕顔の苗　賣りに來し雨上り―。植ゑんとぞ思ふ―。夕顔の苗

時　鳥　（十首中錄一首）

時鳥　ただ一こゑに夜は明けて―、ほのかに青し―。江の上の山

端　午　（八首中錄一首）

菖蒲湯の菖蒲にかをる　妹が手を―こよひの床に　誰か　卷くらん

病間あり、郊外を見めぐりて　一首

車して　戸田の川邊をたどりきと―、ふるさと人に　言つげやらむ

大神宮炎上の事を　（八首中錄二首）

いたづらに　しづめまつりし風の宮―。向ふほのほを　吹きもかへさず

夏桑の畑に雪ふり　わたらひのいすずの宮に、火は飛びまよふ

病中夢　（八首中錄三首）

亡き友と　ありし昔をかたらひて―泣かんとすれば、夢さめにけり

おそろしきものは―、小道のきはまりて　あとより牛の追ひせまる　夢

われ　昔　學びのわざのにぶくして―叱られしことぞ、夢に見えつる

閑　適　（十首中錄二首）

里とほき　門に車の音もなし。晝寢の床に散る　棕櫚（シュロ）のはな

川かみに―鷄鳴く里の、名も知らず。山青くして　家五つ　六つ

日頃のつれ〴〵を慰めんと、ある夕、車に載せられて、兩國・向島などう

ちめぐるに、見る者皆、珍らかなる心地しければ　（八首中錄一首）

風起る―隅田の川の上げ汐に、夕波かづき　およぐ子等はも

故郷を憶ふ　（八首中錄一首）

故郷の御墓荒れけん。夏草のゑぬのこ草の　穗に出づるまでに

海　水　浴　（八首中錄一首）

薄色（ウスイロ）の潮あみごろも―風になびき、小磯に歸る妹　今日も見つ

獵官聲高くして、炎熱日に加はる戯れに、蒼蠅の歌をつくる　（九首中錄三首）

日の照す晝こそあらめ―。烏羽玉（ウバタマ）の夜を飛ぶ蠅の　にくくもあるか

馬の尾につきて　走りし蠅もあらん。とり殘されし牛の尻の蠅

屎蟲の臭きを笑ふ―。わらふものは、同じ厠（カハヤ）の屎の上の　蠅

徒然坊　箱根より、寫眞數葉を送りこしける返事に　（九首中錄一首）

足たたば―箱根の七湯　七夜寢て、水海の月に　舟うけましを

わが庭　（八首中錄一首）

一桶の水うちやめば、ほろほろと　露のたま散る。秋草の花

われは　（八首中錄三首）

いにしへの　故郷人のゑがきにし―墨繪の竹に、向ひ坐す―。われは
人皆の、箱根　伊香保と遊ぶ日を―庵にこもりて蠅殺す。われは
吉原の太鼓聞こえて　更くる夜を―、ひとり　俳句を分類す。われは

日暮里村諏訪神社の茶店に遊びて　（八首中錄一首）

三かかへの樅の下かげ　坐をしめて、筑波の山に　われ向ひ居り

石壕吏　讀杜詩　（七首中錄四首）

石壕の村に日暮れて　宿借れば―、夜深けて　門を敲く人　誰そ
牆踰えて　をぢは走りぬ―。うば一人　司の前にかしこまり泣く
三郎は―城へ召されぬ。いくさより　太郎文こす―。二郎死にきと
生ける者―命を惜しみ死にすれば―、又かへり來ず―。孫一人あり

新婚別　讀杜詩　（八首中錄一首）

もののふにとつぐ娘を　許さむは、路のほとりに捨つる　まされり

灼くが如き暑き日に、雪の圖を掛けて　（八首中錄三首）

夏の日を―風も通はぬ伏廬に、ひとり見る―雪　森を掩ふの圖
壁の畫を―涼しき風の　うごかして、林の雪の　散るかとぞ思ふ

繪を掛けて、夏を靜かに觀ずれば、風冬の如く　雪壁に滿つ

蕈　狩　（十首中錄一首）

茱萸の實の―とををの一枝かざしもち、蕈狩り男　山馳せくだる

清人に代りて志を述ぶ　（八首中錄二首）

さしなみのやまとの國は　狹けれど、民ゆたかなり―。のりにとるべく
國のため死にする我を―日の本のやまとの人よ。あはれとは見よ

明治三十二年

繪あまたひろげ見てつくれる　（十首中錄四首）

なむあみだ―佛つくりが　つくりたる佛見あげて、驚くところ
もんごるのつはもの　三人―。二人立ちて　一人すわりて、楯つくところ
あるじ　馬に、しもべ四五人行き過ぎて、傘持ひとり　追ひ行くところ
うま人の裾濃のよそひ　駒立てて、遠くに　人の琴彈くところ

春雜歌　（二十八首中錄七首）

菅原や　伊久米伊理毘古―伊理毘古の陵こめて　立つ　霞かも

静かなる　此の家陰の朝陰に、うぐひす來鳴く。竹藪にして
春風に　立ちいでて見れば、上野や—黒髪山に　雪のこる。見ゆ
ところ〴〵　つつじ花咲く　小松原—。岡の日向にきぎす居る。見ゆ
霞む日を　うてなに上り山を見る—。山遠くして　心はるかなり
三條の橋のたもとの絲やなぎ—しだれて長し。擬寶珠の上に
わが庵に人あつまりて　歌詠めば、鉢の菫に　日はかたむきぬ

垣　（十一首中錄一首）

借りて住む　磯の家居は、海見えて　白帆行くなり—。葦垣の外に

病牀喜晴　（十一首中錄二首）

臥しながら　雨戸あけさせ、朝日照る上野の森の晴を　よろこぶ
あたたかき日を端居して、庭を見る—。萩の芽長きこと　二三寸

把栗新婚　（十一首中錄二首）

米なくば　共にかつゑん—。魚あらば　片身分けんと　此妹　この背
君が庭に植ゑば、何花—。合歡の花。ゆふべになれば寢る　合歡の花

短歌小會　（四首中錄一首）

ふりつづく　さみだれ時となりにけり—。草長うして　葵咲く庭

短歌第二回　（十四首中錄一首）

夏の夜の月をさやけみ、ひとり居る裸に、露の置く思ひあり

浴泉雜記を讀みて虛子に贈る　（十首中錄二首）

おのが身しいたはしければ、病みこやす君が床邊を　とひがてぬかも
田舍路の馬車に日暮れて—、御者折々馬を勵す聲の　寂しも

書　（四首中錄一首）

ともし火の光靜かに—、鷄鳴きて、讀みつくしぬる　つくり物語

始めて杖によりて立ちあがりて　（一首）

四年寢て　一たびたてば、木も　草も　皆眼の下に、花咲きにけり

短歌第四回　（十首中錄一首）

柿を守る吝き法師が　庭にいでて、ほう〳〵といひて　鴉追ひけり

本郷まで　（十三首中錄二首）

水莖の　ふりにし筆の跡見れば、いにしへ人は　善く書きにけり
にぎはひの大路をはさむ　高殿の二階三階　灯　山の如し

小石川まで　（十首中錄二首）

亡き友の亡きをかなしみ　思ひをれば、車の上に、涙落ちけり

我口を觸れしうつはは、湯をかけて　灰すりつけて　みがきたぶべし
　寧齋へかへし　（二首中錄一首）

起きて泣かば　心やる方もありぬべしー。伏して泣く身を　あはれと思へ

明治三十三年

　鶴物語　（十七首中錄一首）

馬ほこる玉の車を　指さして、一の人ぞと　人のいふなり

　笠　（七首中錄二首）

旅行くと　みやこ路さかり　市川の笠賣る家に　笠もとめ著つ

菅笠の小笠かぶりて　下總の市路を行けど、知る人もなし

　茶　（十首中錄二首）

テーブルの足高机　うち圍み、みどりの蔭に、茶をすする夏

夜をこめて　物かくわざのくたびれに、火を吹きおこし　茶を飲みにけり

　森の歌　（三十首中錄七首）

森ふかみ　山鳥鳴きて、たまたまに人に逢ふさへ　寂しかりけり

杉むらに　白き幟のほの見えて―、天狗をまつる　社ありけり

楢の實をひろひに行けば―、楢林　むしろ圍ひて、かたゐ住みけり

道のべの楢の林に　うぐひすの二つ來て鳴く―。あけ方にして

上野山―夕越え來れば、森暗み　けだもの吠ゆる　けだものの園

森越えて　隣りの村へ歸るちふ―車に乘りぬ。くたびれし故に

夜をこめて驛路ゆけば、荒磯の松の木の間に　波のよる見ゆ

　ガラス窓　（十三首中錄一首）

いたづきの閨のガラス戸―。影透きて、小松の枝に　雀飛ぶ見ゆ

　陶　器　（三首中錄一首）

すゑものの釜を開けば、百あまりならびて立てる　女人形

　梅の歌　―夜梅―　（二十首中錄一首）

とざしたる園の外面の　うす月夜―梅の林を見て　過ぎにけり

　愚庵和尚のもとへ　（三首中錄二首）

歌をそしり、人をののしる文を見ば、猶ながらへて世にありと思へ

折にふれて　思ひぞいづる―。君が庵の竹安けきか。釜悲なきか

　三月四日例會　（六首中錄一首）

古鉢に植ゑし青菜の花咲きて―、病の牀に　起きてすわりぬ

牛　（十首中錄一首）

牛が引く　神田祭の花ぐるま―。花型もゆらぐ。人形もゆらぐ

艶麗といふ題にて　（十首中錄三首）

山川を埋めてふれる―雪の中に、咲ける牡丹の花　たゞ一つ

くれなゐのとばり垂れたる窓の内に、薔薇の香滿ちて　ひとり寢る少女

美人問へば　鸚鵡答へず―。鸚鵡問へば　美人答へず―。春の日暮れぬ

春　雨　（五首中錄二首）

かつしかの小梅の里の　小田ぞひに―、春雨小傘行くは、誰が妹

ともし火の光に照らす　窓の外の牡丹にそそぐ　春の夜の雨

病　室　（十首中錄一首）

武藏野のこがらししぬぎ　旅行きし昔の笠を　部屋にかけたり

四月一日例會　（七首中錄三首）

くさまくら　旅行く君をおくり來て、橋の柳の下に　別れぬ

すがの根の　長き春日を　言問はぬ小鳥と　我と　只向ひ居り

夕日かげ照りかへしたる　山かげの桃の林に、煙立ちたり

獄中の鼠骨を懷ふ　（十首中錄五首）

大御代のまがねの人屋　ひろければ、君を容れけり。盜人と共に

御あがたの大きつかさを　蔑りて　罪なはれぬと聞けば、かしこし

ひとやなる君を思へば、眞晝餉の肴のうへに　涙落ちけり

ある日　君わが草の戸をおとづれて、人屋に行くと告げて　去りけり

君が居る　まがねの窓は狹けれど、天地のごと　ゆたけく思ほゆ

週間記事　―三月三十一日、淺草公園失火の新聞―　（七首中錄一首）

翁さび　火鉢かへして、猩々が火事おこしきと聞けば、可笑しも

病牀七日　―四月十六日―　（七首中錄一首）

常臥の病のひまの　つれづれに―、土をつくねて　人をつくりぬ

自作土像　―秀眞へ―　（六首中錄一首）

土型に、うつしかたどる我顏の　すこしゆがみて　猶面白し

悟不悟の歌　―左千夫に贈る―　（六首中錄三首）

本庄の四ツ目に咲ける　くれなゐの牡丹燃やして、惡しき歌を焚け

寒山拾得　豐干　皆非なり―。鉢栽の小櫻草の花　ほころびぬ

一もじの葱の青鉾　ふり立てて、惡歌よみを　打ちてしやまん

櫻の歌　―週報募集課題選者吟―　（三十首中錄七首）

八ちまたの　ちまたの櫻―はな咲きて、都の空は　夕曇りせり
雨にして　上野（ウヘノ）の山をわがこせば、幌のすき間よ　花の散る見ゆ
小夜ふけて　櫻が岡をわが行けば、さくらぐもりの　薄月の暈（カサ）
さくら咲く上野の岡ゆ　見おろせば―、根岸の里に　柳垂れたり
雨そゝぐ　櫻の陰のにはたづみ―、よどむ花あり。流るゝ花あり
年ながく病みしわたれば、花を戀ひ―、上野に行けば、花なかりけり
ガラス戸の外に　植ゑおける櫻花―。ふゝむ。咲く。散る。目も離（カ）れず見き

小金井遠乘　（六首中錄二首）

司等がむさぼる笥飯（ケヒ）の　こなれがたみ　花を見て來（コ）の御言（ミコト）　かしこさ
うま人が馬踏みはづし　落ちにけん―、その跡どころ。しめ立てゝおけ

前庭即景　―四月二十一日作―　（十首中錄四首）

山吹は　みなみ垣根に、茱の花は　ひがし堺に、咲きむかひけり
くれなゐの　二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに　春雨のふる
汽車の音の走り過ぎたる　垣の外の萌ゆる木末に、烟うづまく
杉垣をあさり　青茱の花を踏み、松へ飛びたる　四十雀　二羽

一日一詠　（四首中錄一首）

かな網（アミ）の鳥籠（トリカゴ）ひろみ　嬉しげに飛ぶ鳥見れば、われも樂（タヌ）しむ

龜戸まで　（十三首中錄三首）

我庭の萩の上葉に、秋風の吹くらん時を待てばー、くるしも
つつみある身の、さかしらに遠く來て、そぞろに寒き　藤の下風
げんげんの花咲く原の　かたはらに、家鴨（アヒル）飼ひたる　きたなき池あり

芝　居　（三首中錄二首）

花道の橋かけ道ゆ　出できたるわざをぎ人の名を　呼びはやす
ますらをを　くはし少女によそほひて、情（コヽロ）の多き人を　泣かしむ

牡　丹　（三首中錄一首）

病み臥せるわが枕邊に　運（ハコ）びくる鉢の牡丹の花　ゆれやまず

體溫日記　（十首中錄三首）

五月一日　（體溫三十九度六分）

山吹は散り、茱の花は實になりて、五月一日（ゴグワツイチニチ）　われ厄（ヤク）に入る

五月六日　（體溫三十九度四分）

鉢植に　二つ咲きたる牡丹の花―。くれなゐ深く　夏立ちにけり

五月七日　（體溫三十八度五分）

はしきやし　少女に似たるくれなゐの牡丹の陰に、うつうつ眠る

曇　（五首中錄三首）

わが庵の檐端にかけし　鳥籠の鳥さへづらず―。春の日曇る

ひさかたの曇り拂ひて、朝日子の麗らに照す　山吹の花

ふる里の御寺見めぐる　永き日の栄の花曇　雨となりけり

鼠骨入獄談　（八首中錄四首）

同じ朝―。縄ゆるされしぬす人と　人屋の門をいでて　別れぬ

かげろひのはかなき命―。ながらへて　人屋をいでし君　痩せにけり

人屋にて　君が磨きしたぼばさみ―。たぼに挾まん少女子　いづら

春鳥の巣鴨の人屋―。塀を高み　青き麥生の畑も、見えなくに

煙の歌

おくつきに供へし花の　古花を集めて燒けば、青けむり立つ

舟中作　（十首中錄二首）

船長の船部屋狹み、すがたみのかがみの前に　薔薇の鉢置けり

眞北さし　八百日　八汐路行く船の帆桁の上に、北斗を仰ぐ

五月二十一日雨中庭前の松を見て作る　（十首中錄一首）

玉松の松の葉毎に　置く露の　まねくこぼれて、雨ふりしきる

ほととぎす

ほととぎす―。その一聲の玉ならば、耳輪にぬきて　とはに聞かまし

讀平家物語　（十七首中錄六首）

ぬばたまの　黑毛の駒の太腹に、雪解の波の　さかまき來る　―宇治川

宇治川の早瀨よこぎる―いけじきの馬の立髮　浪こえにけり

橘の小島が崎の彼方より―、いかけ　引きかけ　武者二騎來る

先がけの功たてずば　生きてあらじと―誓へる心。いけじき知るも

よろづ代をいはひて折りし―松が枝に、二ふさ垂るる　藤浪の花　―嚴島行幸

大君の御前に　しぼむむらさきの藤浪のはな　棄てまく惜しも

六月七日夜病牀卽事　（十首中錄二首）

ガラス戸の外に据ゑたる―鳥籠のブリキの屋根に、月映る見ゆ

夜の牀に―寢ながら見ゆるガラス戸の　外あきらかに、月更け渡る

風　（十首中錄一首）

常病みの病のひまを　端居して、さ庭べ見れば―、草に風あり

折にふれて

赤木格堂が、平賀元義の歌送りこしける返り事に

上にして田安宗武―。下にして平賀元義―。歌よみ　二人

血を吐きし病の床の　つれづれに、元義の歌見れば、たのしも

菊の花　（十首中錄二首）

朝ながめ　夕ながめして、我庭の菊の花咲く　待てば、久しも

わが心いぶせき時は、さ庭べの黄菊白菊　われをなぐさむ

雪　―旋頭歌―　（十首中錄一首）

ガラス戸の　外白妙に　かがやける雪

小夜ふけて、上野の森の　あきらかに見ゆ

明治三十四年

藤の花　（十首中錄四首）

瓶にさす藤の花ぶさ―みじかければ、たゝみの上に　とゞかざりけり

瓶にさす藤の花ぶさ―一ふさは　かさねし書の上に　垂れたり

藤なみの花のむらさき。繪にかゝば、こき紫に　かくべかりけり

瓶にさす藤の花ぶさ。花垂れて、病の牀に　春暮れんとす

山吹の歌　（十首中錄三首）

水汲みに、往來の袖の打ち觸れて、散りはじめたる　山吹の花

まをとめの、猶わらはにて　植ゑしより、いく年經たる　山吹の花

歌の會―開かんと思ふ日も過ぎて、散りがたになる　山吹の花

しひて筆をとりて　（十首中錄六首）

いちはつの花咲きいでて―、我目には　今年ばかりの春　行かんとす

病む我をなぐさめがほに　開きたる牡丹の花を見れば、悲しも

世の中は常なきものと　我愛づる山吹の花　散りにけるかも

くれなゐの薔薇ふゝみぬ―。我病―いやまさるべき時の　しるしに

若松の芽だちの綠―長き日を、夕かたまけて　熱いでにけり

いたづきの癒ゆる日知らに、さ庭べに　秋草花の種を　蒔かしむ

心弱くとこそ人の見るらめ（五月四日）

ほととぎす　（十首中錄一首。詞書略す）

ガラス戸におし照る月の　清き夜は　待たずしもあらず。山ほとゝぎす

明治三十五年

紅梅の下に土筆など植ゑたる盆栽一つ、左千夫の贈り來しをながめて、

朝な夕なに作れりし歌の中に　（七首中錄一首）

まくらべに　友なき時は、鉢植の梅に向ひて　ひとり伏し居り

與謝野寛作歌抄

『與謝野寛短歌全集』による

『鐵幹子』より　（明治二十九年より同三十三年まで）

父と云へば、なほ人の世の別れなり。また逢ひ難き佛とぞ　思ふ　（父の臨終に）

『紫』より　（明治三十四年三月刊行）

なさけ過ぎて　戀みなもろく、才(サイ)あまりて、歌みな奇なり。我れをあはれめ

ほのぼのと　山の榛原(ハリハラ)かすむ日に、鶯なきて　小雨そぼふる

琴のあたり　しら菊ひと枝生けて見れば、侘しくもあらず。我が四疊半

ついばみて、孔雀は殿にのぼりけり。紅き牡丹の　尺ばかりなる

霜さそふあらしの末に　山畑の豆がら鳴りて、この日も暮れぬ

そのむかし　泣くなと我れを諫めけん―泣かでやー。君は墓の下(シタ)なり

『埋木』より　（明治三十四五年）

なにごとぞ―。男の子　道には恥無きに、大ごゑ擧げて泣くを憚る
武藏野に、片緣附けし竹びさし―槐樹ふたもと―秋の富士濃き
盲にて　物も云ふなと据ゑられし石ならなくに―。地に默しゐる

（藤枝慧眼師の忌に）

『毒草』より　（明治三十四年より同三十六年まで）

瀨の音や―火桶かこめる七人に、山は夜となり―霧うかびきぬ　（赤城山の湯の澤にて）

『相聞』より　（明治四十三年三月刊行）

大空の塵とは　如何が思ふべき―。熱き涙の　ながるるものを
大名牟遲　少那彥名のいにしへもすぐれて善きは、人嫉みけり
常世物。はなたちばなを嗅ぐ如し―。暫し絕えたる戀　かへりきぬ
君おもひ　え堪へぬ秋に―、こほろぎも　細き音に出づ。石のひまより
いにしへも斯かりき―。心いたむとき、大白鳥となりて　空行く

東海の夜明と　君がくちびると　我が思ふこと　おほかた赤し
馬の背に、わかき男と　戀人を縛りて―、荒き切崖に追ふ
石ひとつ―。ひとつ　山より川に落つ―。心うつるも　はたおのづから
な侘びそと、さかしらだちて云ふは、誰―。人と生れて歎かぬは、誰
うまごやし―。踏めば濡れつつ、香を立てぬ―。霧にまじれる朝月夜かな
かき乘せて　ひしと鞭うつ。黑髮の香におどろきて、馬は馳せ出づ
わが妻は、藤いろごろも　直雨に　濡れて歸り來―。その姿よし
百合の根に赤き雉臥す。よしゑやし。人は見るとも―。君が傍ら
酒ゆゑか、心よりかは、分きがたし。また憂き戀を　一つつくりぬ
山のかぜ　凍りて寒し。草燒けば―、青きけぶりに　薄みぞれ降る
醉ひぬれば泣きて誇らく、片腕は　津輕の海の鱶に奪られき
寶とは　缺くることなき名なれども―、我れは　乏しき戀を貯ふ
根無し言―、またも空笑―。この憎き口よと云ひて、吸ひにけるかな
湯は酒を燒かんと鬪ぐ―。しら鳥のうなじの瓶は、浮きて歎きぬ
本棚の蠟燭に來て、小鼠が　白く淸らに附けし齒のあと
古歌のきよき調べを　次ぐごとく、昔の戀に　また逢へるかな

高光る　日のいきほひに―思へども、心は早く　黄昏を知る
寂しくも　全く祕密を無くしつる虚ろに臥して、物をこそ思へ
青雲のたなびく空に　あるごとく、二人かづきぬ―。水色のきぬ
わが宴なかに咲ぎぬ―。勇魚とり　大海ゆきて　銛打つ子らも
津の國の御影の石を切りならし、我師の御名を　あらはし申す
兩臂を疊につきて、口ずさむ姿ばかりを　師にぞ學べる（師の五年祭に）
馬は皆小屋にもの食ひ、七かかへある杉へだて、月のてらしぬ
馬の食ふ豆もて飼はれ、うつくしき天くだり人　痩せにけるかな
藤さきぬ―。我れの裂けたる心にも、わか紫の色を　うつして
後遂げん願はあれど―、年たけて、我があるゆゑか、目のうるむのみ
屠兒きて、まだらの牛の皮ほしぬ―。出水の後の　秋草のうへ
めらめらと　薄き都は崩えなんず―。大獅子吼して　汽車街に入る
わが族よ―。人とならずば、伊勢の宮　かをる白木の御柱となれ
海を觀る樂しさ二無し―。若し云はば、己がこころを　我が觀るに　似ん
しくしくと　海の浪泣く。恐らくは心にのこる我が愁　泣く
黑雲に入日にほへり―。その下の志摩の國邊に、白き浪よる

丹塗舟。錨。帆の綱。鱶の鰭―。にほふ日向に、はまゆふの咲く
橘の蔭に朝睡す―。八咫がらす。熊野の烏　さは　な呼びそね
（新宮にて清水氏の家に宿る）

面白きゑそらごとをも　書きまぜつ―。其處とさだめぬ旅ごころより
川かぜに屋鳴りきしめき、灯の消えて、濡れたる髪に　煤こぼれきぬ
萩の花　はつはつ咲きて、蟀啼く―。九月の二日―母の日は來ぬ
こころざし　我れは小さし。少女らに　みなよき衣あれ　と願ひぬ
天地を憂しとぞ思ふ。わづかにも　君を見ぬ日の氣まぐれにのみ
しづかなる　精舍の秋の朝じめり―。朴の廣葉の鬱金　ちり敷く
たそがれの神戸の街の　山の手の白塗を見て、大船の泣く
五人の子らが冬著に縫ひ直し―さもあらばあれ―。親は著ずとも
峰はみな　雪す。しら毛の放ち馬。高原わたり　信濃にぞ入る
歌は　われ猶およぶべし―。羨むは、その後へより、少女したがふ
うつくしき春の今宵と　またなりぬ。君がころもの　薄あかねより
あめつちを闊く手力―。かなしくも　抛ちがたし。頬のうへの皺
なほ　君と歌おほく詠み、夏は來ぬ。戸にも　卓にも　罌粟の花おく

消息は、野分の後の大空の　青みわたれる明方に　きぬ
床ちかく鏡は居ゑじ―。我が歎く太息の　白く觸れもこそすれ
春の雨　三日降るほどに―、木草咲く―。ひと日見し子に　我が心咲く
この悪しき　燭を執るゆゑ―あさましく　獸に似たる　黒き影引く
大阿蘇の　古きくだけの一角を　天に捧げて―、香の爐とする
阿蘇平―。風なき晝も、御空より　薄を壓して、白き灰降る
阿蘇ゆけば―、悲しき　愛しき人の世も　我が全身に汗して　忘る
みさかえを　我れに賜へり―。そのあかし　三十路に近き戀にあらはる
むかしびと名すら覺えず―。殘れるは、泣くことありし　その片頰のみ
わが手より　空にのがれぬ―。嘴紅く　啼く音身に沁む　鳥なりしかな
起きよ　起きよ。人もこそ見れ―。いさな船　砲座のもとの　そのひと夜妻
わが露臺　下ゆく馬車に、少女たち、扇つかへり―。艶なる月夜
あめつちの我れを生みしを　讃へまく思ふ日あらば、戀をまたせん
歌優に引き入れ聲す―。髪長けて　よき撓つくる　若人のむれ
かたはらのなでしこを摘み　髪にさし云ふ―。そのあとを讀み次げよ―君
君戀ふる心は直し―。これをもて　わが生涯のあかしにぞ　する

ひと張の琴かき鳴らし―中人もなくてめとりし―あはれ　我妻
われ　一つ石を投ぐれば、十の谷　百の洞あり―。鳴り出でにけり
鶯は　何かなしきぞ―。藪に來て　笛を吹くなり―。ほおりよ　ほおりよ
才高く　歌もて我れをおどろかす　惜しき二三子―。あやまちをせよ
春の風―。五欲おもはぬ世の外の消息なれや―花の開きぬ
我が投ぐる痛矢串をば　負ひ給へ―。我が吸ふ時に　やがて癒えんぞ
筆とれば、すぢなきことを書きつらぬ―。悪しきは　戀の癖にこそあれ
蛙づれ―立てば　後ろに目ぞ竝ぶ。うべ　云ふ空は、高くしも無し
大木ら―。尾を引く星を追はんとし、白き根を上ぐ―。暴風のゆふべ
大海が―痛手を負へる祕密なる蛇體を出だし、のたうちて泣く
橙子と　赤き醋甕と　干鱈に、蠟の火射すを嗅ぎて　眠りぬ
人の子のうすき衣を　透りたる光を愛でて　めしひとなりぬ
暑き日の屋根に立つ草―。ゆふぐれの雨を待つごと　君をこそ待て
なたまめの煙管のやにを、じいと吸ふ―。この氣持をば　油蟬なく
わが和尚―。寒き瓦にわれ居させ、牛のやうなる太き舌　吐く

（天龍寺の峨山師に參ぜし頃）

干せるまま單のころもそぼぬらせ―。蓬かをりぬ―。垣のむら雨
な取りれそ
君なきか―若狭の登美子―。しら玉の　あたら君さへ、碎けはつるか

―山川登美子君のみまかれる時。明治四十二年四月。（錄六首）

しろ百合の花は碎けつ―。言にこそ百合とは云はめ―。あたら清し女
十とせこそ下に泣きけれ―。天飛ぶや　歸らぬ君を　聲あげて泣く
天地の有りのことごと――春秋の有りのことごと―見難くなりぬ
うらわかき　君が盛りを見つる我れ―。我が若き日の果てを見し　君
わが心すずろに亂る―。天つ風吹けるあたりに　君や　袖振る
くき赤きゆづり葉うづめ、たわたわと　ゆたかに降れる　山のしら雪
そそはしり　木の葉いづちへふためくや―。我れは　女の謀より逃ぐ
わが嫌ふ人は　背廣の胸あけて―、海豹　海を見るすがたかな
手をとりて　悲しと泣きぬ―。天地に一人の君を　人も戀ふれば
ひと鉢の花を移すと　バルコンに出づるを　今日の合圖とぞする
桃が散る―連翹が散る―。まして　人　わかき二十は靜ごころなし
星ひかり　萬木ふるふ山のかぜ―。牧の馬　みな翅生ひぬべし

（赤城山に遊びて詠める。明治三十七年八月）

うまれつき我れはあなどる―父母を―。ものの敎を―。ましてふるさと
雁を聽く―雁の羽音も近く聽く―。河邊の畑に　黍を守れば
をちかたに―薺の如く　むらがれる低き木立の　むらさきの色
くるしくも―女の友に文せざること　百とせになりやしぬらん
松原の晝の屋かげに　雪ありぬ―。その雪に似る　さびしき別れ
かなしきは、樂むところ異りぬ―我は刹那を―。君はとこしへ
かなしきは―白き濱邊の　直線に並びて長き　松のむらだち
わが家の八歳の太郎が　父を見て描ける似顔は、泣顔をする
初秋の比伊の岬の　船に見る―みづ色の空―。しろき燈臺
筑紫なる沙丘の上に　啼きかはす―白き月夜の　天つかりがね
一大事―國の無得をわすれ居き―。三月　半とし　歌よまぬ我れ
大空の　打默したるさびしさを　時に我が持つ―。我が妻も持つ
大空を　隱れ笠にぞ著て遊ぶ―。さてこそ　見知る人なかりけれ
垣ごしに　桐の木立てる古き園―、たんぽぽの穗の　白けたるかな
磯の上の白き斜面に、日を避けて待ちたる人の　くれなゐの傘
或時のわが喜劇には、かの人のつれなき文も　用立ちしかな

長崎の盆の供養に、行きあひぬ―。一つ流さん。紅き燈籠
白き犬―行路病者のわきばらに　さしこみ來り、死ぬを　見守る
神無月―。伊藤　哈爾賓に狙撃さる―この電報の聞きの　よろしき

（伊藤博文を悼む歌。明治四十二年十一月）

『槲之葉』より　（明治四十三年七月刊行）

わが影の　赤く亂れて踊りつる―昨日の庭の、白く乾けり
うなだれし我が横顔に　沙を打つ―二月の風も、浮世なるかな
あはれにも　捨身となれる彼れを　見よ―。女の前に　泳ぐ眞似する
三階のなでしこ色の窓かけを　少ししぼりて、海かぜを嗅ぐ
小床には、黄ざくら色のきぬ掛けぬ―。春くれがたの　若き獨寢
あめつちも　親も　すべ無し。臣の子を海に沈めて　見つつ殺せる

（六號潛航艇員の變死を悲みて。錄二首）

わたつみに、貝の葉のごと命死ぬ―。いくさを好む　ひんがしの人

『鴉と雨』より　（大正四年七月刊行）

自らを嗤ふ歌

行方なき人と云ふこそ　悲しけれ―。天つしら鳥　飛ばましものを

（以下明治四十二年より三年までの作）

酒がめをくつがへさずば、酒盡きじ―。君を捨てずば　君を忘れじ
俵より　小豆なんどのこぼるゝも―港は悲し―。神無月きて
思はじな―。輕はずみとも　漫りとも―。我が事は　皆わがおのづから
君が馬車二月の森にとどろけば、枯木をすべる　雪のかたまり
清水の塔のもとこそ悲しけれ―。昔の如く　京の見ゆれば
靜かなる銀のかんざし―睡蓮を摘まんとすれば、水にすべりぬ
われの齡やゝ長け―斯かる朝を愛づ―。靄のなかなる　藍色の山
花のまま枯れて　黑める山あざみ―二尺の莖に　淡雪の降る
石土手に―身をのしかけて物云ひぬ。赤き傘さす　船の少女と
青やかに　二月の朝の海明けて―赤ききりぎし　雪をいただく
妻を見て寒く笑ひぬ―。貧しきは　面を合せて泣く暇も　無し
實の黄ばむ　橙の樹に―鶏を追へば、のぼりぬ。山里のごと
しら露を―秋かぜ吹けば、蟷螂も　青きころもを擴げつつ　飛ぶ

石臼のもとに　藁もてしばりたる蕪の光る―薄月夜かな

悪しき名は　子等がためにも遺さじと　念ぜし父にならはぬやー。誰れ

無造作に　蠟燭の火を吹き消して、巣のごと被くー。屋根裏の床

珍らしく―この男こそ　哀れなれ。生きぬる程は　専ら嫌はる

蠟石の四角の卓に　肱つきて、うすくらがりの秋風を　聽く

うつり香は、醉ひの如くに殘るかなー。一昨日の夜と　早くなれども

世のなかに　思ふ男をたのまずてー、何を見上ぐる　黑き上目ぞ

樺の木に　朝日の射せる停車場ー。掛樋を落つる　秋の水おと

おばしまの前の水にも　霧ふれば、襟の濡れんと歎く　舞姫

大海を　長く限れる白き沙ー。君と　この朝踏みて　歸らじ

大風に　鴻の鳥鳴くー。二方に吹き分けられて、見難し　と鳴く

彼らみな　ないがしろにぞ我れを見るー。然か見ることを教へしも　我れ

三味とりて、磯の畫にも彈きにけりー。別れがたしと　歎つ心を

しら菊の倒れて咲くをー悲みぬ。小き素足の　土を踏むかと

しよざいなさー。動物園の木の柵に　面出だしたる駱駝ならねど

（駱駝十首。明治四十二年作。錄一首）

師を見れば　私ごとを云ひし癖―いまさぬ世にも　殘りたるかな

（萩の家先生の例祭に。明治四十三年）

宿無しの子は皆死ねと　追ふ如く、吹雪ふりきぬー。橋の下まで

（以下明治四十三年の作）

われら皆　父の父より飢ゑつれば、食はんことのみ　力とぞする

たのみなき世にはあれども　眞しき事一つありー。飢ゑて人死ぬ

西那須に　日の落ちゆけばー、秋のかぜ　雜木が原に隱れつつ泣く

三尺の薊のくきの　立ち枯れて、鹽原の山　石に霜ふる

木枯の夜　（明治三十六年十二月）

在せばこそ　かたはに生ひし　ひとり子もー、悔いず　憎まぬ世とは　思ひし

（落合先生の御柩を守る夜）

追ひ書きにかへて

——明治の新派和歌——

一

明治の短歌滅亡論は、尾上柴舟先生が口火を切られたのだが、私もしり馬に乘つて、歌が亡びる、亡びると言つた。亡びるものと見きつたら、夙くにやめたらよからうに、など〻ひやかす人もなくて、時がたつた。戰爭に入つて、滅亡どころか、から元氣はひどく盛んで、作者の數だけは、大いに殖えた形に見えた。そこでまた、第二藝術論が出た。歌を正面の敵として言つた議論ではなかつたが、いづれおはちが廻つて來るだらうといふので、わが事のやうに辯難をする人が、相當にあつた。かういふ事をくり返してゐる中に、藝術的な動機などは、歌からなくなつてゆくのだらうと思ふ。

まだ今の處は、何と言つても、議論に對して、中身のある作品で酬いてゐる歌人もゐるのだから、細々ながら、命脈は續いてゐると言へる。だが此二三人が死んで了へば、後繼者が藝術的に滅亡

した文學の悲しさを、實證して見せることになるのではないか、と思ふのである。桑原氏の論難が過ぎると、愈、其背後に控へた世間の一部の姿が露出して來た。今度は詩にも抒情傾向のあるものを否定しようとする氣風が著しくなつて來た。ついでは小說にも、一人稱的な立ち場を採る「私小說」を却けよう、とする議論が出て來た。

此は言ふまでもなく、抒情主義を排除しようとするのである。もう明らかに、抒情詩傾向にある、在來の日本文學の主題を棄てさせよう、とする遠謀なのである。文藝は流行を以て左右することは出來るが、文學の本質は、流行や流行を促す議論だけでは、どうにもならぬのである。抒情態度を亡さうとするのか、短歌その物を滅却しようと考へるのか、そこの處を露骨にしてかゝらぬ兵法を以て、ともかくも、尠くとも千五百年は繼續してゐる文學を壞滅させようとする樣な考へ方は、如何に滅亡論者でも——又滅亡論者であるだけに——そんな單純な論理を以てする人々と、一樣にものを考へて居るのでないことを、明らかにしておきたい。

古典的である事によつて、生命が保障せられて行くべきはずの明治二十年代の歌が、古典の教養の乏しい人たちによつて、引き廻されてゐた。其傾向が次第に著しくなり、そのはつきりとした現れが、宮內省御歌所の主調を、桂園派——香川景樹の門流——の歌風の占めたことでわかる。その頃既に、滅亡論が出てゐる。短歌が滅亡するとは言はなかつたが、當時の短歌の現狀を憤つた議論は、もつと情熱的に行はれた。『ほんたうの短歌は、もつと優れたものである筈だ。今の短

歌はどうだ、末流時代に墮してゐるではないか。歌の持つ姿態を唯一つと考へて、何でも彼でも、千篇一律に處理しようとする。軟弱な歌風をしらべと稱して、其に偏倚してゐる。其に制約せられ、誘導せられて來る内容は、低級、無反省な悲觀的な發想に過ぎない。』

かう言ふ風にはつきりとは言はれなかつた。が、之を言はうには、時代がまだ歌の本質を明らかにして居なかつた。だからかう言ふ結論を、導く方法も、歸結點にすらも、相當に錯誤を含んで居たのである。が、まつすぐに言へば、かう言ふことになつたのに違ひない。

「亡國の音」などいふ議論を、二六新報その他に出した與謝野鐵幹なども、當時若かつた。だが、今ならば必、かうした表現の爲方を諾ふに違ひない。越智東風、伊豫人である所から越智氏を筆名に冠し、彼方を熟語化してこち（此方）と續け、字をもぢつて假稱した正岡子規なども、其に稍遲れて、必しも歌論ばかりではなかつたが、律文に關聯した議論を、早稻田文學や、新聞日本などに書いた。尙、此より以前に池袋淸風があつて、桂園派乍ら、新しい題材をどう言ふ風に、歌の姿態の中に引きこんで行くか、と言ふことを解決しようとした。宮内省派の人々も、實は其をしようとしたのだが、古典の教養の乏しさから、其が一々低俗になり、又新しさも卑俗な程度にとゞまり、其に附隨して奏でる調子も、陳套を極めたものであつた。爲に、益輕蔑せられることになつた。桂園派ばかりでなく、古典的な歌を作つた筈の學者などにも、其實、大して、古典的な光輝を發した人はなかつた。

二

子規は鐵幹に、どこまでも降らうとしなかつた。和歌改革の議論も、實作も、鐵幹に遲れて居ないといふ風に主張し、世間も子規を信じるがまゝに、其語を全然認容して來たが、子規には主張と、情熱との一つになつた、何か大きな混亂を伴うてゐた。作歷から見ても、子規の歌は古いのだが、古い時代の歌は、全く自覺した作風ではない。だが、古くから作つてゐたと言ふことゝ、古くから新しい歌を作つてゐたといふことゝ、發表はしなかつたが、歌に情熱を持つてゐたことと、發表して世間の啓蒙運動を行つた、といふことゝを一つにして、感じてしまつてゐた痕がある。

私などは、系統から言へば、根岸派に誼みが深いのだが、事實は抂げられない。今日靜かに見ると、新派和歌に關する自覺と、正式な公表は鐵幹の方が先んじてゐると信じてゐる。だが時の前後を爭ふことは、科學者なども屢、其に情熱を持ち、其を正當化して考へてゐるが、學問の本體から見れば、笑ふべき幼稚である。だから文學藝術では殊に、おりんぴつくすぽうつに先著を爭ふやうな姿は、意味がない。私はそんな事で、先人の爲事の意義は見たくない。

子規には敵がなく、而も俳句革新の既成成績に對する信用があつた。鐵幹には、近い失敗の履歷を知つた人はあつても、尊信してよい古い經歷は、知る人が少かつた。蓮月や、曙覽のやうな純

粹な文學質を持つた人を知人とし、あれだけの製作力を持つた與謝野尙絅を父にしたことなども、後には皆が明らかに知つて來た。最初はさういふことも、鐵幹は寧恥とする程、過激な新しい情熱を抱いてゐたのであらう。一方子規には、適度の時代的標準を知つた常識があつた。だから鐵幹の樣には、世間の常識的判斷を超越してふるまふ事は出來なかつた。だから彼の對象は、當時の所謂良識ある識者階級・紳士たちだつた。さうして與へる文學には、自信があつた。彼が俳句において經驗ずみであつた所を、歌の上で實行すればよい訣だつた。だが、其とて容易なことでは、勿論ない。鐵幹はさうした中老・初老階級などは問題とせず、ひたすらに青年の情熱に向つて、ものを言はうとした。師匠といふより、青年の友であつた。子規の同意者には、作者階級でない、文學愛好者が多かつた。鐵幹の方は、自身既に文學青年であつた。

最初の鐵幹は、男性的な聲をあげることが、從來の短歌の缺點を衝く、正しい的だと考へた。が此は大きな過ちであつた。此までの短歌の缺陷のへろ〳〵調は、たけの優れて居ないところにあるとした。たけが劣つてゐるのは、女性調だと考へた。當時は誰もさう考へたのだが、此は、大きな誤りであつた。しらべの落ちて居るのは、しらべを高くする精神の高さがなかつたこと、低俗な技巧以外に關心を持たなかつた點がさうさせた、といふことに氣がつかなかつたのである。此點で、もつと早く萬葉を見出すべきであつた。が殘念なことには、さうは行かなかつた。古い經歷にさう進むべきものを見せてゐながら、近い履歷が、鐵幹の判斷力を曇らした。萬葉集に對

する正當な理會がなかつたのである。

初期の作物集だといふ「萬葉廬詠草抄」を見ると、如何にも成熟した古典調であるが、此は遙かに成長した後、改作した處の多いものと認めてよいものであつて、新派の歌を作る爲に、之を一擲して、新境地に這入つて行つたとは考へられない。其ならば、如何に若かつたとはいへ、優れた而も新しいものを棄てゝ、不熟な舊風の多くつき纏うた歌風に、立ち戻つたことになるのである。ともかく「萬葉廬詠草抄」から轉身したとすれば、其は明らかに、誤つた道に蹈み込んだことになる。其後十幾年にして、初めて其に似た本道へ還つて來たことになる訣である。

ともかく鐵幹は、子規ほど簡單に新短歌へのり出したのではなく、古かれ新しかれ、其までの造詣を投げ出してかゝつたものに違ひない。その頃の學者として、古典教養を負うた歌風を示した人々は、新古今風を考へ、又唱へてもゐたやうである。だが、此とて、新古今の本格を得たものではない。新古今時代は、歌壇に才子充滿して、互に影響を交してゐた時代である。明治二十年代の萎微した歌人たちが、企て及ぶ所ではなかつた。たゞ古今でなく、萬葉でないものを、新古今風と感じたに過ぎない。鐵幹の師落合直文なども、文才は相當にあつたが、惡い時代に出て、改革をなし遂げる程の才ではない。唯、稍清新なと言はれる程度の題材のとり扱ひをしたに過ぎない。鐵幹以外に、久保猪之吉・服部躬治（モトハル）・尾上柴舟などがあつて、いかづち會を結んでゐた。鐵幹はその別働隊の觀があり、拔け驅けをしたとも見られる。

男性的な題材を選んだ爲に、半島や大陸生活を詠じて、近代日本漢詩風な慷慨調を出さうとした。虎や壯士が、作物の間に隱見して、短歌の素質に融合せぬやうなものがあつた。その間に青年雜誌の短歌選者などして、若い投書家の歌から、暗示を受けることが多かつたらしく、歌境は次第に移つて行つた。此時分、久保猪之吉は「妹は　軒の葡萄を指して、熟せむ日まで　とゞまれと言ふ」と言ふ一首を作つた。此頃、大なり小なり新しい歌に興味を持つた者は、此歌を知つて、歌に朗らかな世界の、開けさうな喜びを覺えた。

三

子規は次第に萬葉に近づいて行つた。福本日南を知つた。日南は、子規より何歩も前に、萬葉語を使つた歌を作つてゐた。その外にも、存外早く橘曙覽の歌を知つてゐたらしい。方針も、歌體に對する見當もついて來た訣だ。「志濃夫廼舍歌集」は稍遲れて見た。其頃既に、子規の萬葉ぶりは確立してゐたことになつてゐる。子規にしても、鐵幹にしても、明治初年の國士教育を受け、政治運動の世をゆする時代に、青年期を經過した人である。だから、其後の者から見れば、何としても英雄主義があり、又從つて後輩が、簡單に脫却出來た虛構の意氣を棄てることは出來なかつた。新派短歌についてのゆきたても多くの客氣をまじへて語られてゐる痕がある。子規が萬葉をとり入れたのも、必しも正道からとばかりは言へない。古語が近代生活を表現する

ことから來る、矛盾とゆうもあの輕みが、歌に一種の飄逸味と、作者のよい風格とを感じさせる所があつた。だから、子規の門下からへなづちぶり、後にへなぶりと言つた狂歌に行つた坂井久良岐が出た位だ。曙覽にも其があり、子規にはもつと濃厚に其傾向があつたのだが、輕く言語の末梢の救ひに止めて、歌全體を無內容な言語遊戲化しようとしなかつた處に、曙覽及び子規の歌の正しさがあつた。それによつて固定したものから脫却した。と同時に、俳諧が既に一度通つて來て、實績を示したやうに、ゆうもあを以て生活の眞相にふれて、ひそかに人間の生を自得する、と謂つた境地に入ることが出來たのであつた。

子規は、曙覽の得たものゝ上に、俳句を以てしたから、思ひの外氣樂に、日本の文學がとる一つの文學調和境――聲調が生活相を破らぬ處――に達したのだ。之をしらべと歌では言ふ。どぎつくなく、泣きあげ過ぎず、しやべりまくると言つた過剩な生活情調を抑制する形式要素が、其であつた。さうして、明治二十――三十年代にはまだ、えきぞちつくで、やゝなじみの薄かつた萬葉式の語句を使ふことの、一種の輕い空々(ソラゞ)しさが、又人をはぐらかす樣な味が、滑らかに日本的文學味を浮び出させたのである。子規の歌は屢、此によつて救はれて居り、之に眞實性が孕まれて來ると、優れた歌になつた。「若松の芽だちのみどり」でも「瓶にさす藤の花房」でも、皆かうした、しづかな語の湧出につれて流れ出た內容である。此流れ出る連語の餘韻が之につぎ、又更に、その向うにありさうな連語を想像させた。其を又此語句の調和の上に、更に適切に持ち來た

さうとした。さう言ふしらべを追求する感覺においては、子規は極めて優れてゐた。此が彼に律文學における大きな地位を與へたので、外の力量はともあれ、此はさうあるべき重大な資格だつたのである。

鐵幹は寧、之に逆行しようとする傾きすらあり、強ひて之から面を逸らすことが、新しい歌の道であると言ふ風にすら、考へたやうな形が見える。結局かうした行き方は、既に完成したもの、又完成して居なくとも、新しげのない結果に到達するものなることはわかつてゐた。其を避けようとしてゐた鐵幹である。だが藝術は、內容の新古は大問題だが、樣式の與へる新古の感覺などは、致命的なものではなかつた。其でこそ、古典派はいつでも、生氣を持つてゐるのであつた。其に歌には、一首のしらべの整頓といふことが、重大であり過ぎた。此が歌の生命點のやうにすら見えた。此が缺けてゐることは、他のどんな成功をも無意味にさせるほどである。此が、歌の本質的の缺陷であり、內容の進步の煩ひとなつたのである。だが之を出拔ける時、歌は、從來の本質的事實をふり替へるのである。其を忍んで通過することは、新しい本質を築くといふことになつて、到底一人一時代に、なし得べきことではない。

其で、あれほど勇猛心を以て身を挺した鐵幹も、結局は歌の本質に隨順することに歸して、完全な從前的な、併し價値多い、幾多の作品を完成することになつたのである。此が「相聞」時代の古典的な作品であり、鐵幹の最大價値に上つた時代である。さうしてその後に、「萬葉廬詠草抄」

の作品を、假りに置くとすると、適當な排列になるのである。

四

子規は、純近代作家でもなく、同時に純古典作家でもなかつた。結局はろまんちつくな作風を以て、近代相を描かうとした。併し、俳句の場合は、日本近代文學の安易なろまんちしずむの弊を、其だけに明らかに、認め過ぎてゐた子規である。其で其を脫却する爲に、寫實論を唱へ、又自己の作風を決定した。だから、小說・小品文その他新體詩の類を見ると、制馭を受けないろまんちしずむが橫溢してゐる。其よりも更に、平俗に歸したろまんちしずむを避けようとした寫生態度に、ある時は觀照を意味するものがあつたが、又ある時は、啓蒙的な寫實であつた。も一つ飛躍してものを考へる人で、彼があつたとしたら、觀照から更に、主客觀融合境地をも「寫生」としたらう。「若松の……」がさう言ふ處に這入るし、「瓶にさす」に到つては、殊に、その考へに這入りさうなものである。だが子規は、さうした混迷した用語例を使はなかつた人である。そして、子規は、進步しても、變化はしなかつた。

子規といふ人は、健康であつたら、可なりうるさい人であつたらうと思はれる。併し作物の上には、不思議な單純性が出てゐて、その點が、その作物を一擧に文學的な作物にした。此は俳句でもさうであつた。だから今日でも、この單純で、ちよつと見に無內容に見える聲調に整頓せられ

た内容を、見ることの出來ぬ人が多い。子規の句を價値の低いものに見る風があるのは、間違ひである。之を顯著化しようとするのが、虚子の新傾向流行後に見せて來た句風であつたと謂へる。かういふ單純性と聲調質を持つた子規は、芭蕉に期待する所はなかつた筈である。芭蕉が悲劇的な精神を持つたり、平俗な中によい人生を表現してゐたのなどは、結局それを表す爲でなく、さうした特徴が導く所の、騒音を超えた單純音に意味があつたに過ぎない。やはり、聲調的要素が主となつてゐるのである。だから、芭蕉のそこへ達する道程の消極生活に對する憧れなどは、彼にとつては意味はなかつたのである。歌はわりに苦しまずして、歌の本質的な價値を掴んだ。だから又、題材は狹く、變化に乏しかつた。唯、子規ばかりを見、その優れた作品のみを見てゐる時は、それでも滿足出來るが、たとへば鐵幹と比べて見ると、自由な鑑賞の出來るものには、慊らぬ所が感じられるであらう。

此は一つは子規の同情者が、俳句の場合とあまり變らなかつた爲もある。段々俳句圈以外にも、根岸派の作者は殖えて行つたが、俳句と同時に歌を作るか、俳句をやめて歌に行くか、今まで彼の俳業を眺めてゐて、其に赴かなかつた人が、新しく立てた旗じるしの下に馳せ參じたと言つたやうなのが、彼の追隨者の上に見られる形であつた。さうして、まる〳〵新しく根岸派選歌に、短歌人として歌を投じた者も、「新聞日本」的な傾向を、全體的に肯定してゐた人々であつて、子規をして反省させるやうな、新味を携へての參加者はなかつたものと見てよい。だから、子規は

安じて、恣に、自身をふるまうた。虚心に見れば、題材が同じであつて、様式が別である爲に、著しく氣分が違つて出てゐる。おの〳〵獨立の價値を持つて來た、といふべきものである。彼が尙暫時生きながらへて居たとしたら、當然起つて來る問題は、題材の擴張・變化といふ事だつたと思ふ。

藝術上の事は、大成功も小成功も、結局一つである。多數の傑作をなすことも、少數の佳作を公にすることも、名作を殘したといふ點では一つである。一つ〳〵の價値が變る訣ではない。鐵幹に比べれば短命であつた子規、題材の範圍の狹かつた子規、彼が佳作を殘すことが少かつたのが當然であり、其が又、彼の價値を鐵幹より低めなかつた理由である。高市黑人の作物は、十數首に過ぎないが、殆、すべて名作であり、この爲に傑作の多い人麻呂に比べて、どちらが高い作家だとは定められないのと同じである。

五

初期の鐵幹は、誤つた方針に進んだ。だから價値のない歌を多く作つた。男性的であるから、文學的によいといふ理由は初めからなかつた。つまり、時代的にさうした主張が持たれたゞけで、其が意味ありさうに見えたのも、時代であつた。

だが、鐵幹は新文學を求める意欲に燃えてゐた。多少新しい文學に理會があつても、其を自身の

文學の出發點にしようといふ事は容易でなかつた。其には飜譯文學の移入が最、力を添へることになつたらしい。基督敎聖書は、新體詩の爲に大きな地盤になつたが、さうした詩の行き方が、少しづゝとりこまれて來た。

子規にも新體詩の作物が相當にあつた。「佐保神の別れ悲しも。來む春に　再あはむ我ならなくに」など、佐保姫によせた惜春の情だと思ふだらうが、此は彼の詩を參照すれば明らかだ。希臘の女神を、心の上で譯したものであつた。鐵幹と其おなじ道を行きながら、互に相關せざる立ち場を持つたのである。

唯、男性的な歌を唱導した彼の立ち場から、其にのりかへることは、容易にしにくかつたに違ひない。が、次第に其方へ移つて行つた。だから、彼は蹈み出したばかりに、別の道が行手へ向けて竝行してゐるのを見た訣で、其道へ移るのに、何となくきまりの惡い時期が續いた。自然に移つた樣な形で、變化してゆく外はなかつた。それでも、彼の荒らかになつた題材から、虎の鐵幹などゝ、渾名を與へてゐた人々は、其變化にあきれる時が來るのである。鐵幹の躊躇してゐる方へは、彼の下に馳せ集まつた男女の同人たちが、まづ進んだ。彼は、さう言ふ指導をするのが、正しいとしたに違ひない。

短歌と聖書との關係は、新體詩を間において見える。がもつと古く、池袋淸風が自身の桂園流の歌にとりこんだ內容は、明らかに、直に、ばいぶるや、基督敎式なものであつた。短

歌作家は新體詩人と違つて、古典的な憧憬を離れることが出來ない。だから、若干耶蘇敎雰圍氣になじみきれなかつた。其で新體詩人らが向つてゐた、まう一つの方向、希臘羅馬の神話を主とする西歐の古典趣味をとり入れようとした。今日から見れば、單に愛の花語と言つた程度の引用であつたが。東洋主題の鐵幹の門下竝びに彼自身が所謂、ばた臭いといはれる文學境に這入つて行つたのは、不思議に見えて不思議ではない。

短歌の現代に卽しての、新しい文學を追求する心が、女性的なものを破却することに、生命標があるものとしたのだが、結局短歌は文學を失つてゐたのだ、といふことを發見したのであつた。だから、其に西洋古典をひき込むことによつて、改革を遂げようとするに到つたのであつた。此時代には誰とても、深い知識を西歐文學に持つてゐなかつた。だから、日本主題の中に、東洋氣分・希臘羅馬情調・基督敎趣味をひき入れるだけで、其新しさも、まことに早く萎れた花のやうなものであつた。

早期の同人窪田空穗——當時、文名、小松原春子——なども、「文庫」における鐵幹の選歌に拔かれたものを見ると「……この小鼠を神つくらせり」と謂つたものであつた。明治三十年代の早い頃、ある不調和な印象のあつたものが、今日、尙、小鼠である點が耳立つて、融和せない。此は歌の本質らしいものが、その後の古典運動の爲に、今尙、頑固に殘つてゐる爲に、之をなじませないのだ。祈りの氣持ちが異なつてゐる爲に、歌の本髓に入りかねて居るのである。早期に成熟

したと見える窪田氏すらさうであつた。だがかう言ふ周圍や、近い環境にある久保猪之吉のやうな歌風などが、徐々に鐵幹の歌を、指標の方へ誘うて行つたことは事實である。

六

江戸時代の歌の古代・中世初期のものと違ふ所は、單なる文學であつて、生活に關聯のなかつた點、女性が殆、遊戯以外に之に近よらなかつた點、抒情詩としての作品を失つた點などであつた。古代・中世には、公家は公家、武家は武家、女房は女房、僧侶は僧侶といふ風に、その生活に卽した歌があり、その階級意識も歌に現れ、歌が生きた生活文學といふ姿を持つてゐた。江戸になると、抒情詩殊に戀愛歌に特殊技能を持つた女性が、短歌壇に現れなくなつた。出る者があつても、女流の歌、又は抒情詩として、特に人の心をひく所がなくなつてゐた。

さう言ふ形では、子規の周圍は、江戸時代とあまり變つてゐなかつた。唯、從來のものと違ふ點は、生活の反映らしいそれが、多少でも出てゐる所であり、文學を喪失してゐなかつた點である。ところが新詩社は、若い參加者が、鐵幹の男性歌に行かずして、抒情詩に赴く者ばかりだつた。其に第一、女性の同人が日に增し殖えて行つた。かう言ふ點では、古代・中世の歌の持つた外的要素の外輪は備つて來たことになる。唯、新しい歌は著しく宮廷的でなかつた。併し明治の宮廷ぶりは、却て宮廷ぶりから遠い、低俗な指導者の歌風であつた。だから歌に文學は、多く望まれ

なくなつたのだし、又其がなくなつたのが、歌のごうすとから解脫することが出來た訣でもあつた。鳳晶子・山川登美子その他の女性が加つて來たことは、鐵幹の歌を變へた。新詩社の歌風を一變した。のみならず、新派短歌の風貌を變化させることになつた。

根岸派は此影響を受けようとせなかつた。其は當時の出版事情や、購買力に關係してゐて、「明星」は全國に行きわたらなかつた。更に潔白だつたとも言へる黨派觀念が、自分の尊敬しない主義を持つ文學の、機關誌を見る氣にならせなかつた時代である。だから新詩社の運動は、根岸派に對して、積極的には微弱だつたが、消極的に强力な背反する力を與へた。つまり自分を流行の鐵幹から、區別する方面へ〳〵と進ませた訣だ。

さうして、さう言ふ方面に向けての子規の指導力は强く、確乎としてゐた。子規歿後、子規の門派は、子規を守るか、子規の中にある新しいものを開發して生きて行くかであつた。それには何としても、新詩社とは全然觸れることなく、行く外はなかつた。だから、ある人には、子規の萬葉から自由であつたものを、もつと、各自が萬葉ぶりと思ふ方面へ近づけるか、或は外觀の古風を言ひながら、內容を新しくして行くかより外なかつた。子規の門流には、子規ある故に、子規に接することの愉しみの爲に、歌を作つて居たといふやうな人も、相當にあつた。此等は子規歿して、次第に歌を廢して行つた。さうした人々には、雜誌を持つて、少しでも進まうといふ欲望を持つ人に對して、反對の立ち場に出る人が可なりあつた。此等の人は子規に留まるといふより

もつと古風になり、生命のない唯、古典に過ぎぬものを作つたりした。

根岸派には、子規以來、謂はゞ散文詩運動ともいふべきものがあつた。從來の俳文でもなく、新俳句と律を一つにするものでもなかつた。唯、子規調とも言ふべき飄逸味と、優越と、清潔を感ぜしめるものと、音律から感じさせるやうな、短い文體の寫生文なるものが練習せられて、子規に近い人々の間には、俳句以外に一つの創作的享樂の方面を開いてゐた。自然描寫だけの間は單なる文章遊戯の形を持つてゐたが、人間や、社會を寫すやうになると、思ひがけないものを發揮して來た。

寫生文ほど描寫をきびしく言つたものはない。小說における描寫論が自然主義文學の內部に起る以前に、其を實行してゐたのである。短篇小說の極度に壓搾せられた掌篇とも言ふべきものが、子規以下の俳人ならびに、四方太・漱石などの人々の間に遊ばれてゐた。此が寫生文以外に出まいとする制約を守るのでなければ、誰しも當然短篇小說に蹈み入るのである。根岸派の歌人も、指導者を共にする點で、俳人その他子規周圍の人とは、感情相通じるものを持つてゐた。寫生文の人々が、小說に進み入つて、自然主義の小說に對抗する力を持つて來た時に、歌人の間にも、之と動きを一つにする者が出て來た。元來子規自身は、物わかりのよい、遊ばざる通人といふ處のあつた人だが、世間に對する指導者意識は相當にきびしかつた。俗世間を肅淸しようといふ意識を離れては、文學運動も彼にはなかつた。俳句・短歌の運動も、さうした處に情熱があつたの

だ。子規門流においても、俳人は、なほ客氣ある子規壯年時代からの態度を知り、子規も其を改める訣には行かなかつた。

短歌の方は、子規が大家となつて後のことだから、自ら指導意識の中に、倫理觀念を含んで來てゐた。だから根岸派の人々は、ある道義を以て、他派の歌人に對して、嚴格性を持つて來た。其に俳句は、子規に對抗するだけの勢力ある敵はなかつたが、歌の場合は、强敵新詩社があり、子規在世時代から、之と爭はなければならなかつた。此意識がどちらが正、どちらが否をきめなければならぬ處まで、つきつめてゐた。其改革意見發表の前後を爭うたのも、實に是か非かの爭ひの變形したものに過ぎなかつたので、二人乍ら、發表の前後を爭ふほど未熟な人間ではなかつた。新詩社の行き方を絕對に否定する立ち場は、多く常識的なものをまじへてゐたが、どちらにしても、高い文學論から出た理論はなく、結局は技工論であつた。新詩社は羽ぶりよくなり上つて行く時代だつたから、子規門流の議論に、一々應答はしなかつた。

その間に、左千夫・節など、行く〳〵小說を書くに到る素質を持つた人たちは、自ら新文學に對する理會も進み、又創作の動機も動いて來たのである。自然主義に對立しながら、自然主義技工をとり込んでゐた寫生文派の小說の、靜的な人生は、その歌にも旣に歌はれようとしてゐた。此が新詩社と根岸派の第二世時代に入る前の樣相である。

七

晶子は鳳姓から與謝野氏に變る頃になると、今までの才と華との文學から、短歌の本格的なものと見える處に這入つてゐた。「みだれ髪」「小扇」は謂はゞ鳳晶子時代であり、「舞姫」からが、與謝野晶子期に這入つたものと見ることが出來る。其だけ此集は、前期・後期の姿が、相半してゐる。此頃言ひ出されたことは、晶子、既に鐵幹を凌駕すとの評判であつた。晶子の藝に脂がのり、同感者の殖えて來たことを意味してゐる。最早く、晶子を讃美したのは、大町桂月であり、山崎紫紅であつた。

併し鐵幹果して晶子の下風に立つたのであらうか。私はどの時期においても、晶子は鐵幹の敵でなかつたことを知つてゐる。此は晶子が、一番よく知つてゐたに相違ない。晶子の最盛期「夢の華」をとつて見ても、鐵幹の「相聞」の大きさに達してゐない。情熱及び醇粹性において、晶子は鐵幹より高いものは見られるが、歌を作す技工においては、晶子はやはり鐵幹に讓つてゐる。鐵幹は歌に溢れる情熱において、晶子に屆かぬ所があつても、作品には適度な情熱が、歌の形式を氾濫しないで湛へられてゐる。青年少女のやうな純潔に充ちてゐて、様式を制約して、何處までも清楚な作品にしあげる明星最盛期の鐵幹には、及ぶ晶子ではなかつた。

「相聞」の鐵幹は技工において、殆、及ぶ人の稀な處まで、短歌史上の位置に上つた。赤彦より

空虛なところはあるが、技工のおもしろさは、確かに根岸派第一の赤彦の腕も、此だけ水際だつてはゐない。人生的であるよりも、藝術的ではあるが、爽快な様式の美しさは、誰よりも、人を誘くものを持つてゐる。詩においても、彼は技工第一といふ評判を得たことがあつた。たゞ模倣的な所を同じ難く言ふ評者もあつたが、歌の方では人を模する必要が、彼にはなかつた。人から受けた示唆は、其を幾倍にもして酬いることが出來た。古歌・古謡を對象においた古典的作物になると、彼は一擧に、其語句の價値をおき易へてしまふ。神樂・催馬樂の歌の、彼に與へた様式的感興は、さすがに昔の本歌どりの技工などゝは違つて來てゐる。

子規は何にしても早く世を去つた。彼なればこそ、早期において、相當な作物をのこしたのだけれど、何分脂の乘らうとする時に、亡くなつたのである。名歌といふべきものゝ數が多くなくて死んだことになる。藝術作品は、名作の多寡に繫らず、作者の才能を見るべきものだが、名作が多ければ多いほど、讀者の滿足と、信頼が深い訣である。

唯、日本の習慣として、一首で永久に生きる、といふやうな歌人の實在を信じてゐる。それから言へば、ともかくあれだけ力作を留めた子規だから、その作家として、價値は十分示されたものと言ふことが出來るのである。

子規の作品中、我々の心に浮ぶ數首は、全然鐵幹にもないものかと言ふと、さうでもない。われわれの様に子規を尊敬してゐるものでも、鐵幹にさういふ作物のあることは認める。その上に優

秀な作品を多く殘したといふことは、鐵幹の方が、文學に惠みを多く受けてゐるといふことが出來るのである。

近代短歌

再板序

昭和十五年二月この本の初板を出して後、戰爭期に入つた。こんな書物でも、すべもないいくさの間に、氣ばらしに、自分で讀み返してゐた記憶がある。出來のよい本とは言へぬが、その後まだ、此ほどの物でも書けるだけの肚が出來て來ないでゐる。再板に當つて、別に改訂を試みなかつた理由である。何と言つても、恥しい。

作者

この本のはじめに

近代短歌の歴史敍述は、既に幾人か計畫し、幾人かしあげた問題である。其に私も手をそめて見る。すれば幾分かはつた方法を以て、何かの點で、新しい考へ方を學界に寄せることなくば、何にもならぬことである。其で、最古い形の列傳體の短歌文學史を綴つて、多少歌人の生活内容を出して見ることにした。だが、其もはじめて見ると、一人々々の分に澤山の紙數がかゝり過ぎて、枚數の知れた此本の上では、どうにもあがきのつかぬことになつて來た。其で思ひきつて、近代短歌の上で問題になりさうな數人の列傳を中心にした物のやうな姿を、連ねるに編年を以てして、どうにか辻褄をあはせて、書きつゞめて見た。かうして見ると、學問としては頗をかしくない書き物になつた。だが、爲方がない。幾年か後に、また興味が、今日と同じ方角に向いた時、殘りの草稿に書き足して、順序立てゝ行かう。その第一計畫として見れば、まんざらむだでもないやうな氣がし出した。

ことわつて置きたいのは、とり出した人々が、必しも文學價値から言つて、一流の人と、私が認めてゐる人ばかりではないことである。色々な考へ方からとりあげたものゝあることは、讀んだ

上で訣つて頂けると思ふ。

次田さんの本に、きつぱりと續くやうにと、初手は考へたが、書き進む中に、さうも行かない氣がして初めからまた出直した形になつた。これも是非がない。

最正確な意味で、短歌における近代と言ふことの出來るのは、恐らく室町時代からであらう。一等外郭式な事實であるが、勅撰二十一代集が此期の初めに完了した形になつたことである。内側に入つて見れば固より、其には色々な原因はあげられるが、形式から見れば、どうしてもさうした結論は出て來る。つまり短歌が、宮廷及び貴族との關聯を、一應斷絶した形を見せてゐるのである。

私のこの短歌史は、實作に携つて居る多くの歌人に對して書いて居るものではない。もつと外に、公平な立ち場の「歴史家」を要求して居る、讀者たちを目あてに記してゐるのである。

さて、現代にもまだ生きて居り、尙若干の生命を殘して居る短歌文壇の「定見」によつて、正しい批評は、到底望むことが出來はすまいと思ふ。だから私は、「現在」は、たとへば文學の價値をきめるのに間違ふことは少いとしても、其が歴史的價値を文壇に與へ過ぎるといふ過誤を犯し易いことを言はうと思ふ。其上に、生きた文學、殊にある特殊な鑑賞法を要する短歌のやうなものでは、どうも常に、ある有力な批評によつて一つの傾きが强ひて作られる懸念がある。こんなことを思ふと、元義・良寛が極めて順調にうけ容れられると言ふことが、今の要求に似たものを與